

昭和二十二年四月一日發行
定價每冊一角

岐蘇林友

廿周年記念號



四十四号 大正十一年 六月發行

岐蘇林友廿周年記念號

目次

【第百四十四號】

創立二十周年所感	岡部喜平	造林上の雜感	脇田山の人
卒業生に望む	西澤静人	アイヌ物語	M Y 生
記念號へ	米山太郎吉	短歌	大木放野
木曾の五木と害虫	菊池生	母校を思ひて	S K 生
祝詞	宮川丑作	祝詞	黒岩正平
木曾御料林雜詠	三村千載	木材の缺乏を憂ふ	松館藤太郎
祝詠	安井正夫	私の好む静岡縣の山村	立道生
二十年の過去と將來	宇佐美生	堤夕月君へ	秋風生
祝母校隆盛	脇田山の人	しつかりやれ	龍峯
木曾御料伐木運材改良を望む	全	寂の姿	萩野蘆江
石川縣林野基本調査	飯沼生	生きるといふ事	門田生

手紙の一節
 ペテロ大帝と脱走兵
 柔道の眞價
 科學文明と信仰

テ
 吉川眞夫
 小貫生
 尾花生

學校要覽

- (一) 沿革
- (二) 學則大要
- (三) 設備
 - 一、用地
 - 二、建物
 - 三、教授用備品
- (四) 經濟
- (五) 在校生及卒業生に関する統計
 - 一、入學志願者及入學生調
 - 二、在學生年齡調
 - 三、在學生家庭調

- 四、在學生通學狀況調
- 五、通學生寄宿舍生調
- 六、在學者入費調
- 七、在學生一人當經費調
- 八、在校生出身地調
- 九、卒業生出身地調
- (六) 職員名簿
 - 一、舊職員一覽
 - 二、表現職員一覽
- (七) 卒業生名簿
- (八) 在學生氏名
- 校友會の起源と岐蘇林友の發達
- 二十周年記念號の終に
- 本校位置略圖

林
 其
 廿
 四
 年
 三
 月
 三
 十
 日
 三
 十
 三
 年
 三
 月
 三
 十
 日

本 校 新 校 舍 全 景



標 本 室

舊 校 舍



(上左) 長校畑江代二

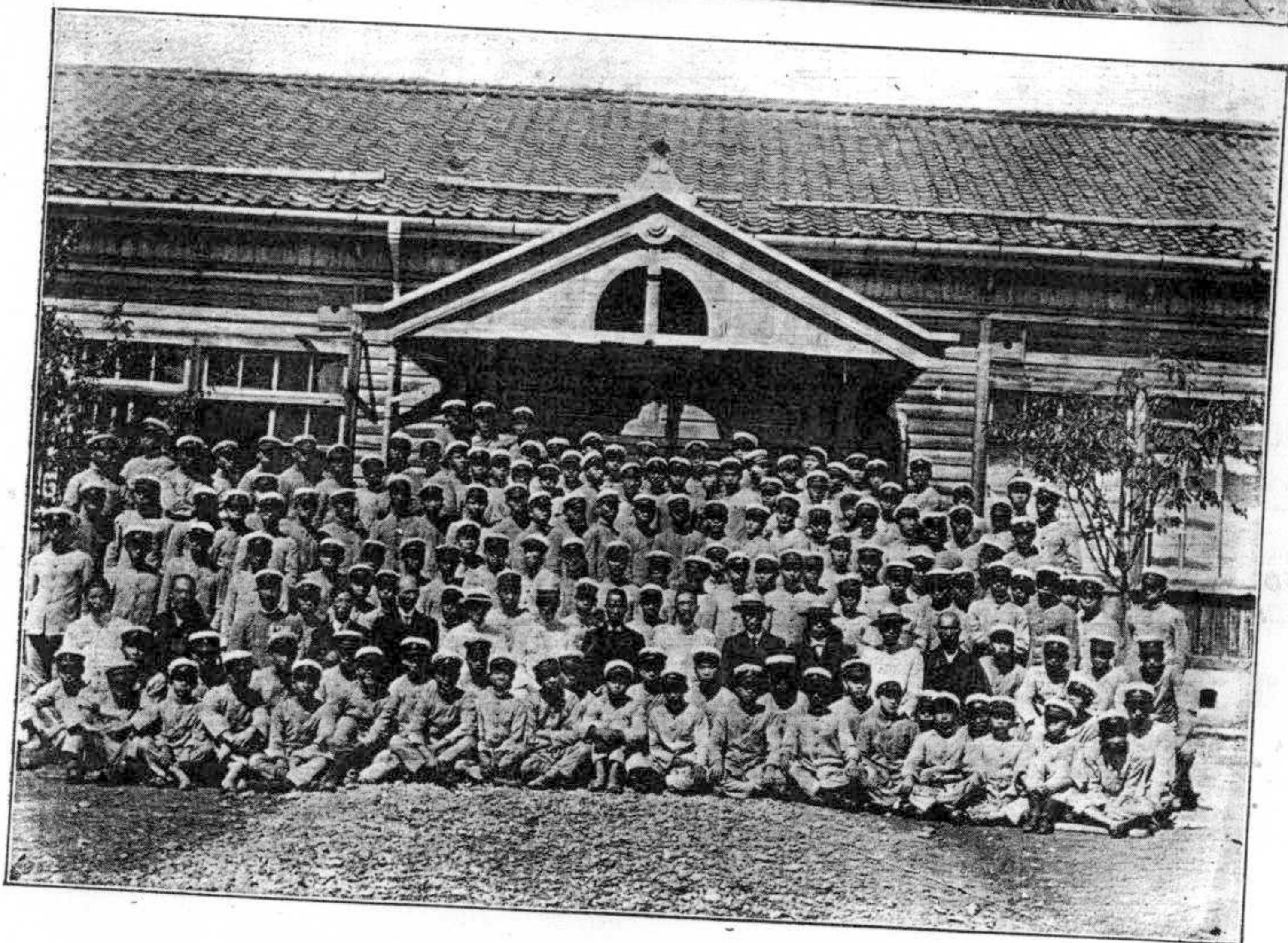
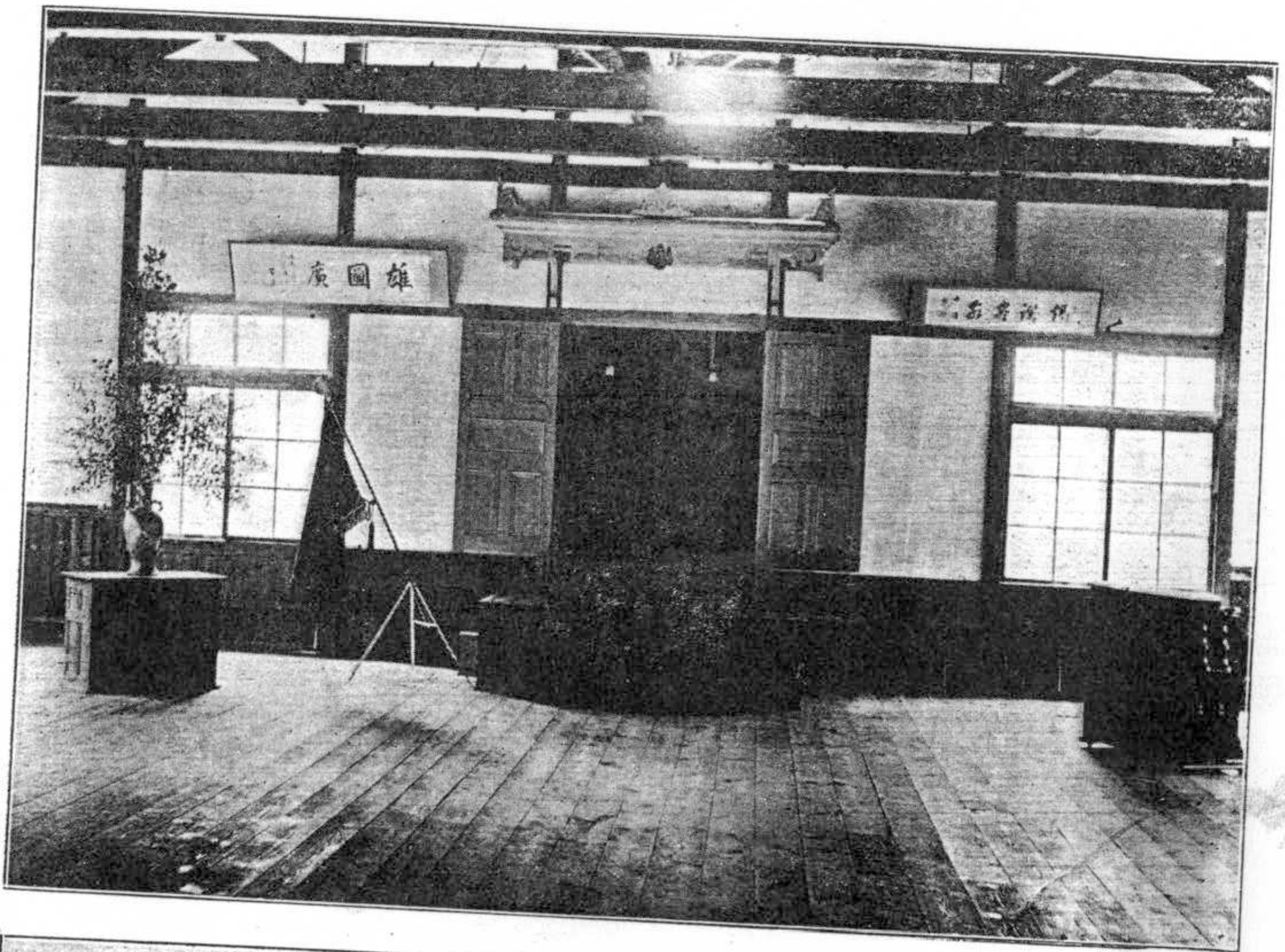
(下左) 長校宮七代四

(央中) 長校部岡現

(上右) 長校田松代初

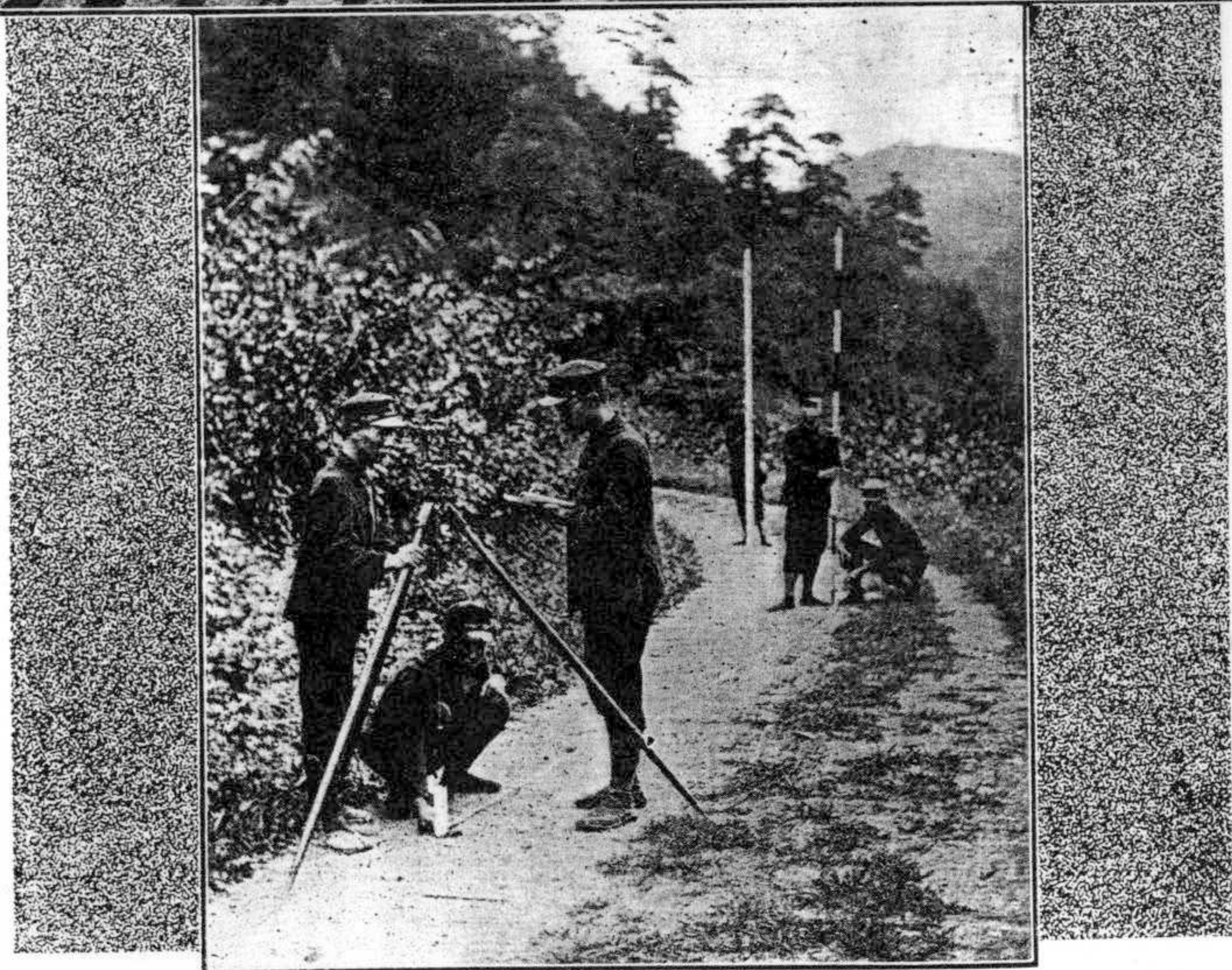
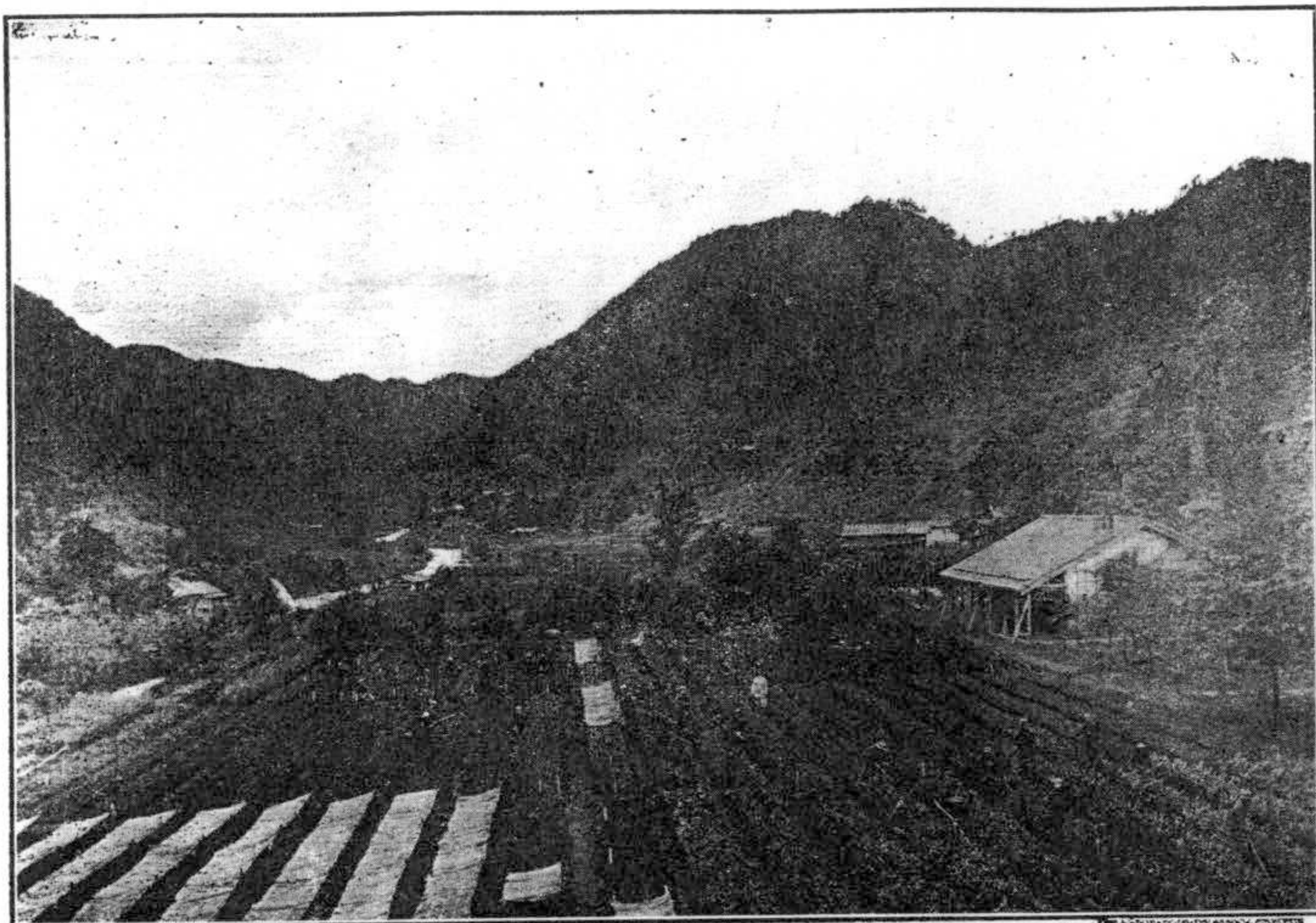
(下右) 長校藤安代三

堂 講 校 本



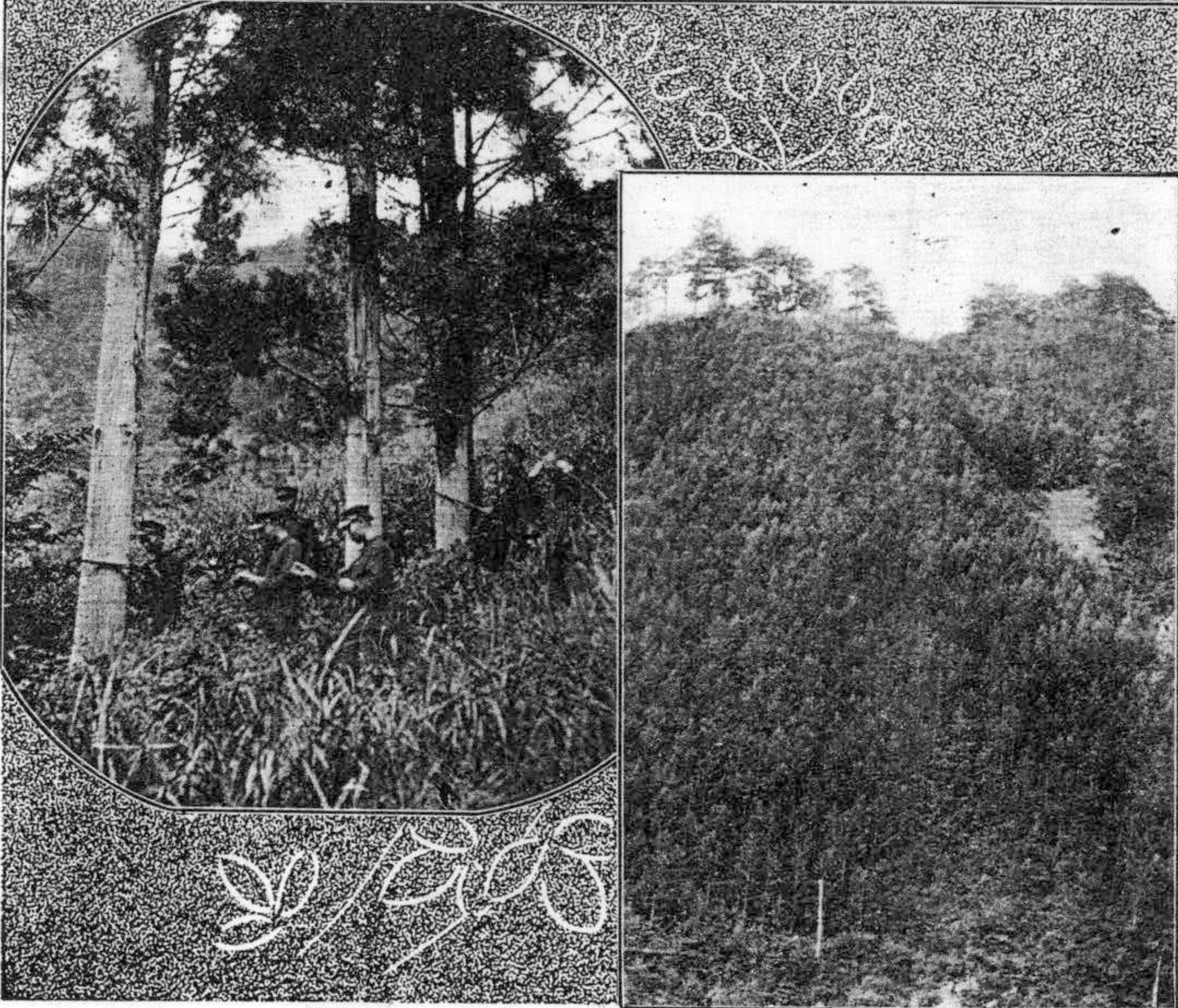
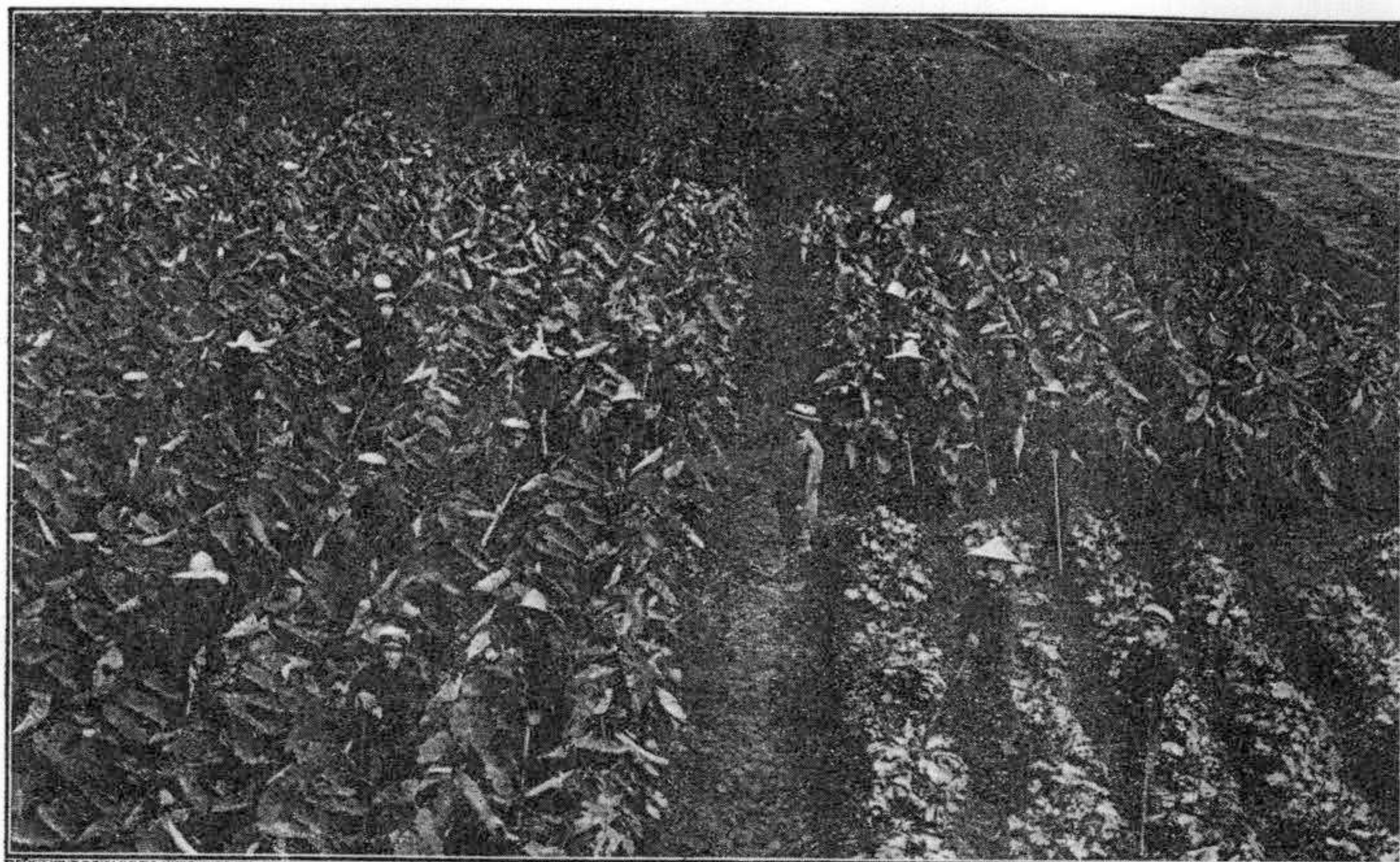
徒 生 校 全

苗圃



測量實習

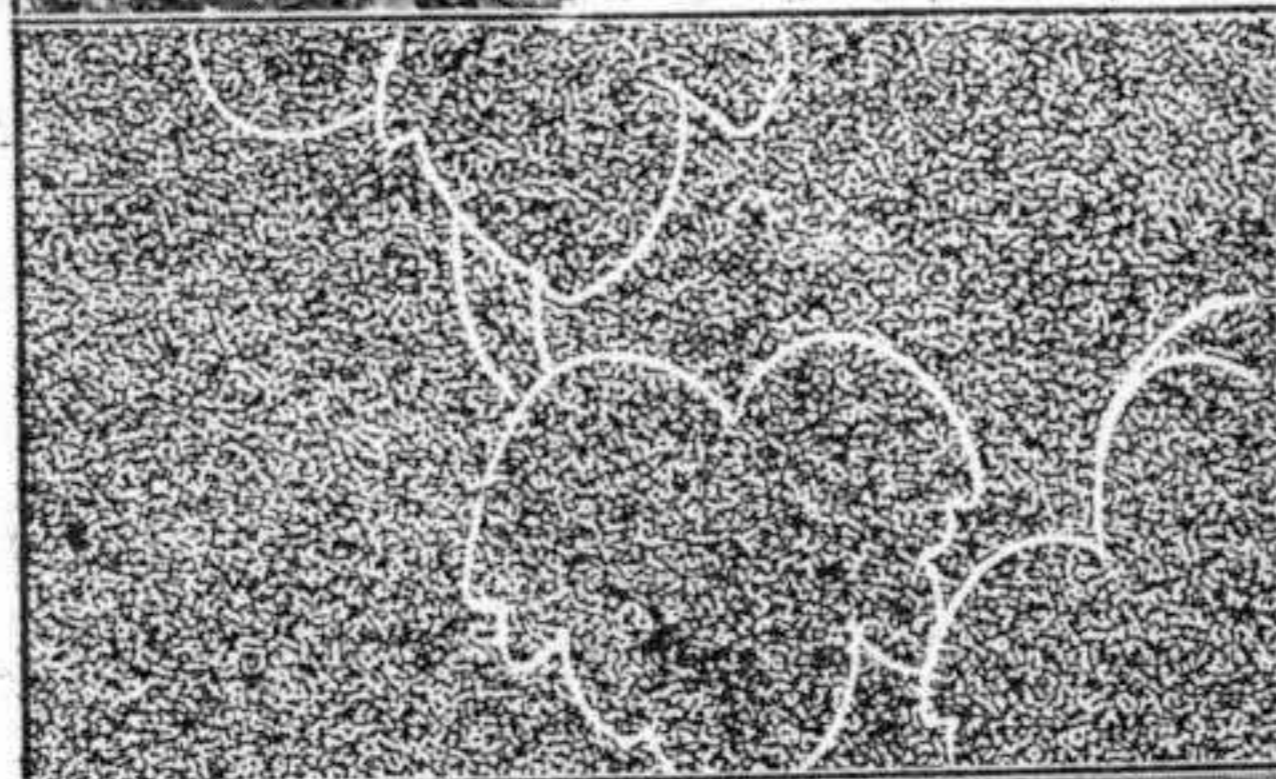
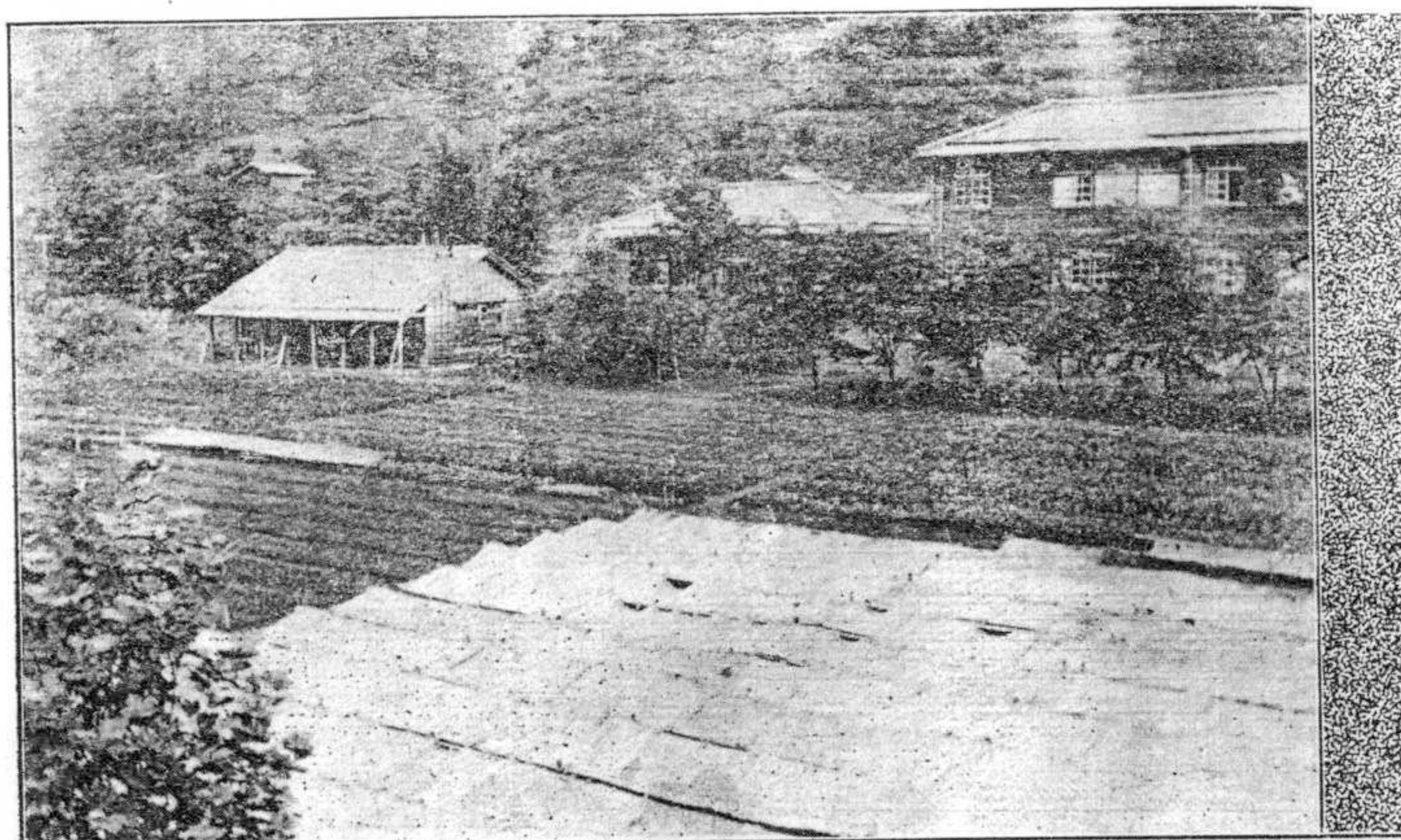
習 實 ノ 業 農



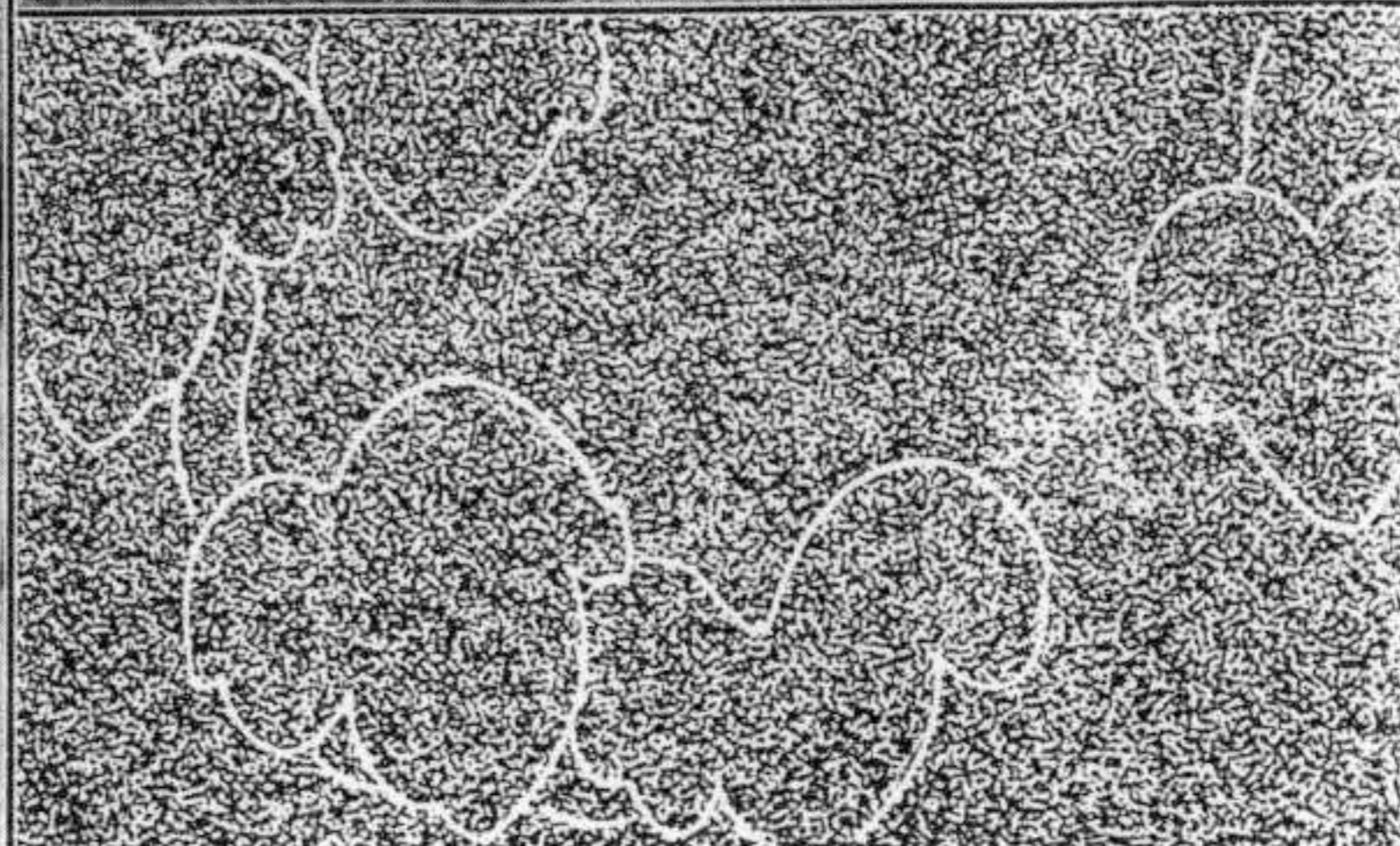
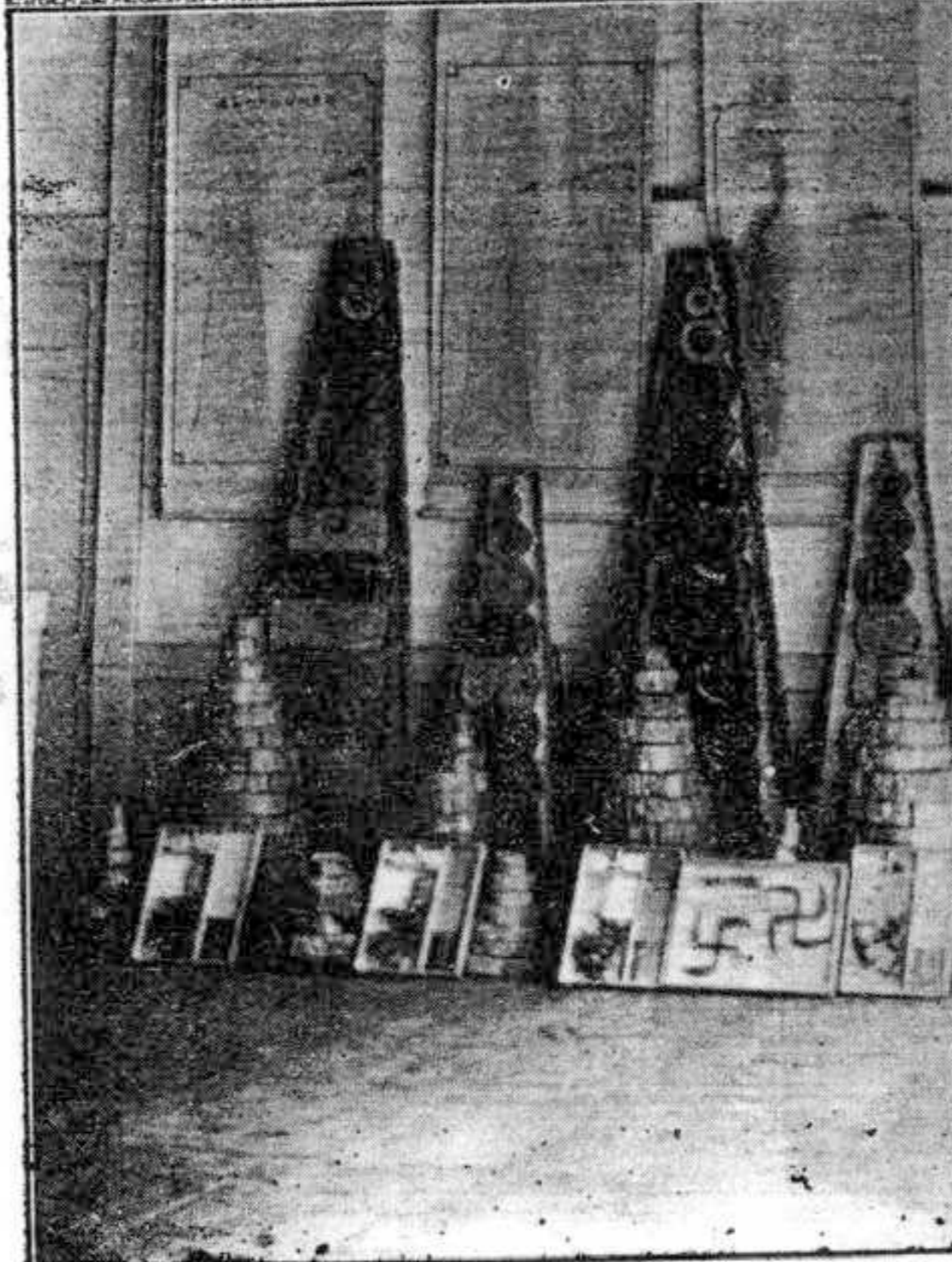
測 樹 實 習

演 習 林

寄 宿 舍 及 苗 圃

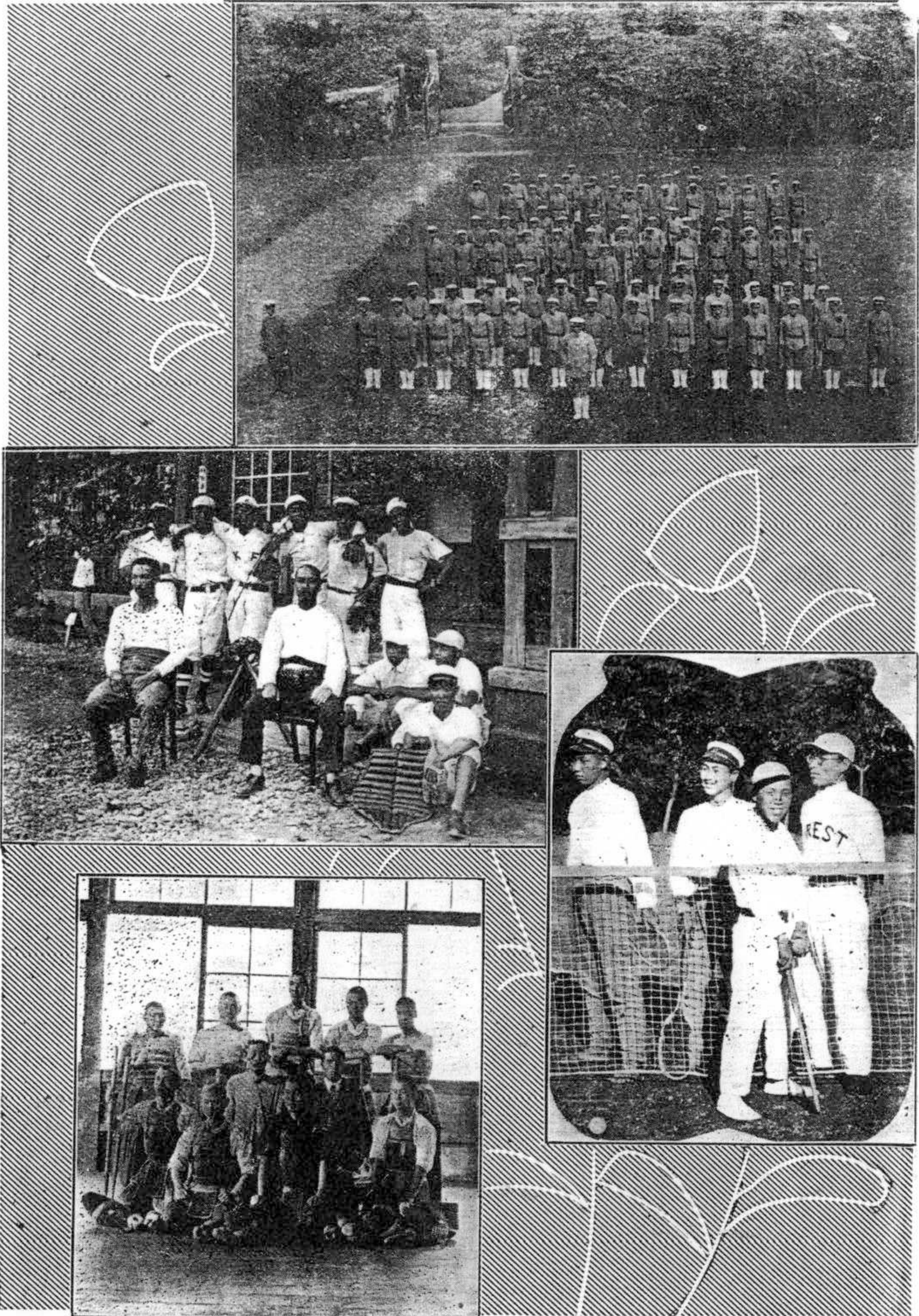


柔 道 部

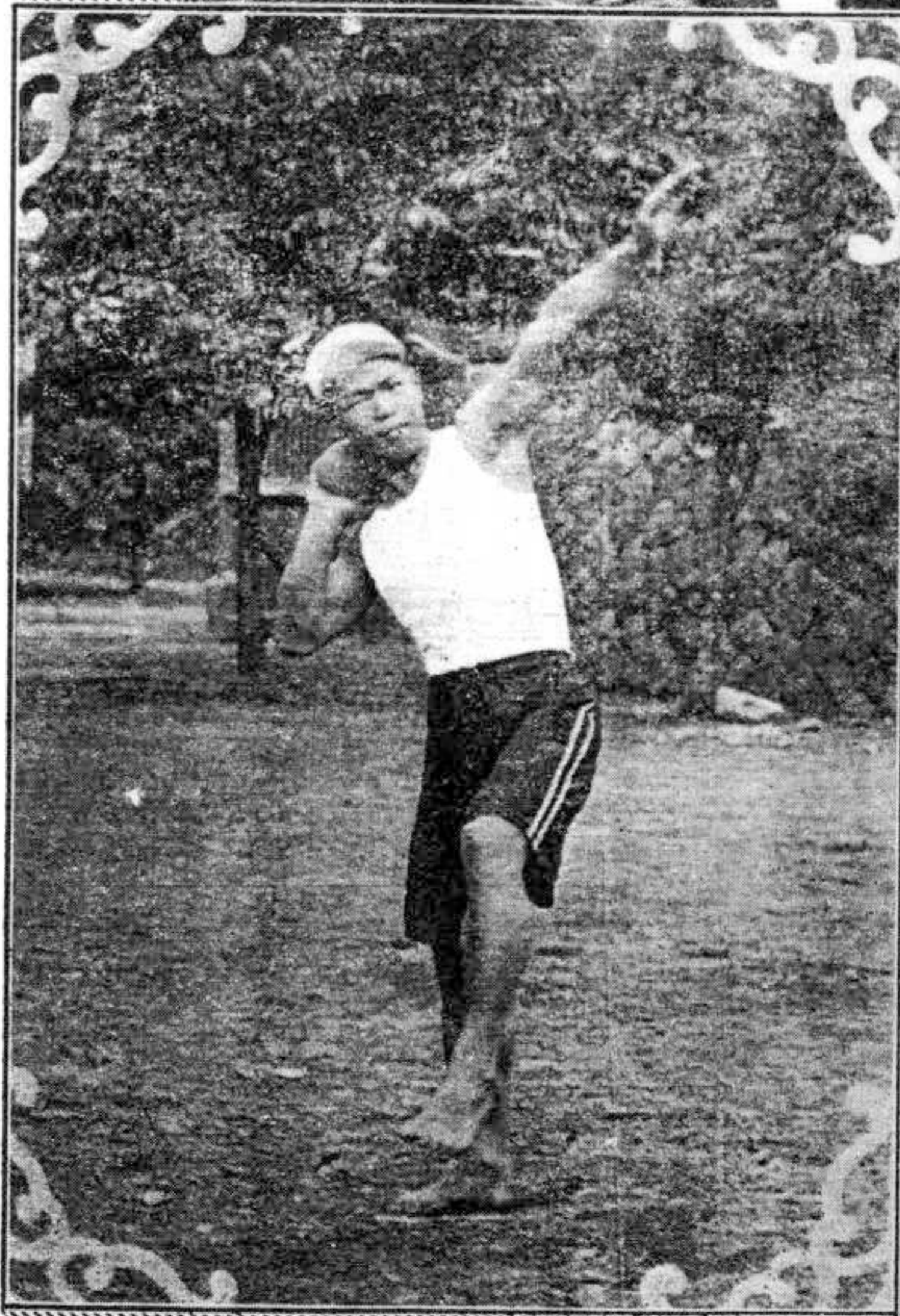
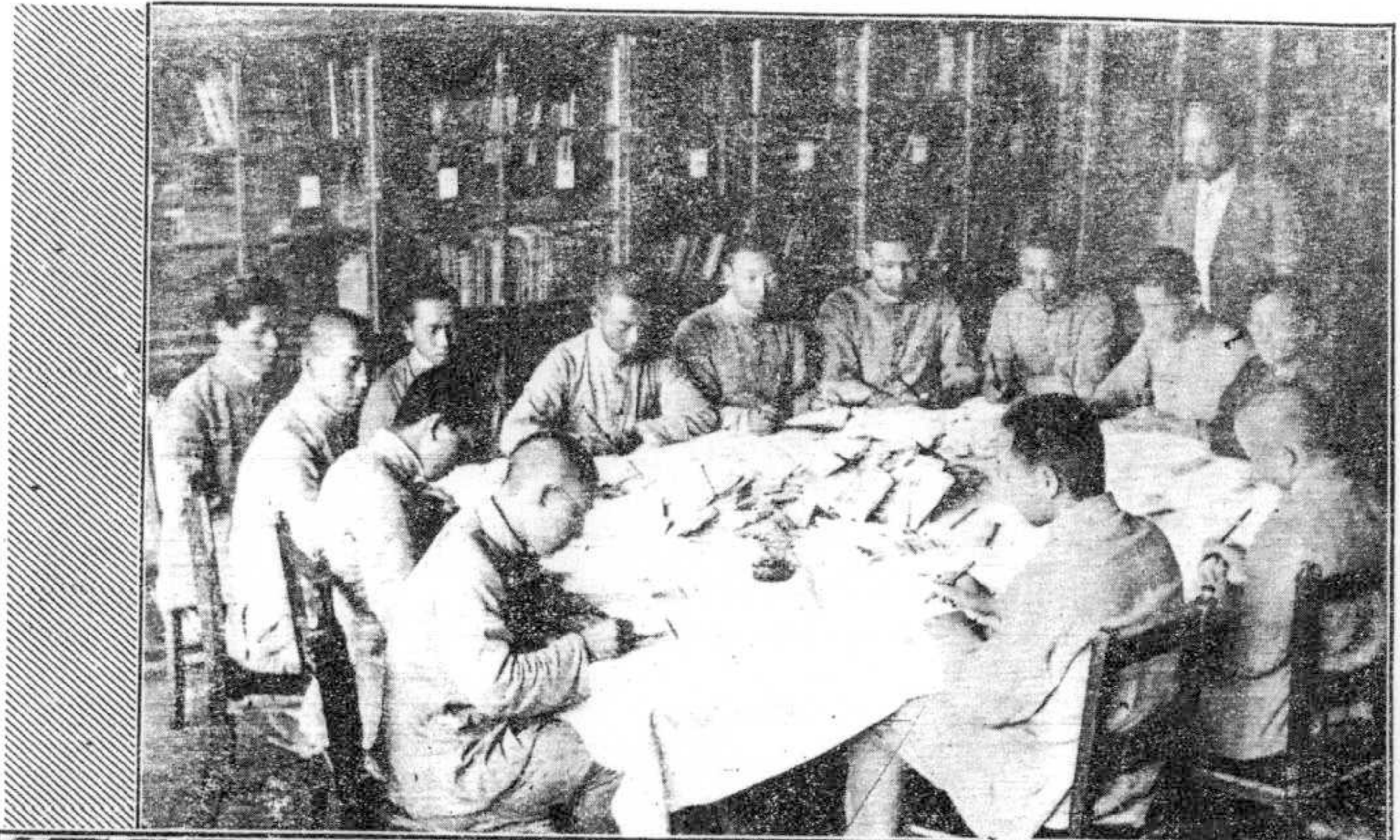


標 本

操 体



部 道 劍 部 球 野 (央中) 部 球 庭



投 丸 砲

投 盤 圓



友林蘇岐

號念記年周廿

創立二十周年を迎へて所感を述ぶ

長野縣木曾山林學校長

岡部 喜平

木曾山林學校の創立せられたる明治三十四年頃は林學教育の大本山たる農科大學林學科ですら、僅に十數名の學生しか居なかつた時代であつたから、長野縣の木曾に郡立の山林學校が出来て松田林學士が校長になられたと聞いた時に、我々仲間はそのが永續するであらうかと危ぶむたのである。

然るに幸にも健全に生長して、明治三十九年には縣立となり、其後益々發展して既に六百有餘の卒業生を出し、此等の卒業生が帝國領土内到處で盛んに活動せる結果、木曾山林の名は世に知れ渡り、今日では百名内外の生徒を募集しても容易に志望者を得らる、様になつた。

扱全國を見渡すと、兎角中等程度の林學教育は不振であつて、全國に林學科を併設せる農業學校は二十位はあるが、何れも志望者の乏しきに苦しんで居る。かゝる中にありて我が林學科で獨立せることは大に誇とする所である。

斯く本校が盛大になつたのは、松田、江畑、安藤、七宮各校長始め先師諸君の一方ならぬ御努力の賚であることは、言ふ迄もなきことである。

我が校が盛大となるにつれ、他縣から入學する者が年一年と増加し、それに卒業生は長野縣に止まらずして、全國の官公署や民間會社杯に就職する者が多い爲め、或る一部には木曾山林學校國立論が唱へらる、様になつた。國立も結構であるが。唯私の憂ふる所は、國立々々と騒いで時勢に伴ふ改善施設が行はれなかつたならば、何時の間にか時代後れとなりて、既往の光輝ある歴史は次第に影が薄くなるである。私は教育上何等經驗なき身を以て

昨年来校長の職を承け、先任者の餘澤に依りて僅に責を塞いで居る譯であるが、端なく創立二十週年を迎へて我々の光輝ある歴史を追憶するにつけ、之を記念すると共に時勢の進運に應じて大に發展を圖らねば相濟まぬことを考へたのであるそれを卒業生諸君に御願ひ致した所、滿腔の愛校心を發露せられ、記念事業を企て、下すつたことは感謝に堪へざる次第であります。

母校の現状に於て數千金の記念資金を得たことは、千軍萬馬の援助を得た感じが致します。今の秋は徒に國立騒を爲す時ではありません、我々は内にありて只管ら校風の發揚と内容の充實を計らなければなりません、校友諸君には外にありて奮闘して母校の聲價を益々發揮して戴かねばなりません、内外一團となりて努力したならば、既往の光輝ある歴史は益々輝くであります、かくて全國有爲なる青年は風を望んで蘇門に集まるのでありまじやう、母校の位置は林業の研究には天下無類の地でありますから、追々母校に止まつて研究せんとする者も出来まじやう、従て研究科も出来まじやう、研究科が發達すれば高等の専門科も出来まじやう、國立とか縣立とか議論して居る間に、演習林も立派になりまじやう、益々演習林を擴張して置けば立派に獨立の出来る時代も到来まじやう我々の前途多望なる哉である。

卒業生に望む

西澤 静人



既に諸君の知らる、が如く、我長野縣本曾山林學校は、正に創立二十週年卒業生を出すこと十八回總員六百有十七名を數ふるに至れり。されば金風菊香を送りて衣袂に薫じ、梧葉徒らに散りて愁音を弄す、秋光清景正に酣なる十月十六日を卜して、本校創立二十週年記念式を擧げ同時に記念誌發刊せらる、につき聊か希望を述んに。

つて須らく一大事業を成して、以て斯業に貢献するの覺悟なかるべからず。嗚呼人生は再び來らず、歲月は人を待たず。凡そ成功は各自の覺悟、勉學によつて成就し得らる、ものならん、古人の諺に曰く「道近しと雖も、行かざれば到らず、事小なりと雖も、爲さざれば成らず」と、この諺平凡に做たるも決して然らず、世人動もすれば此の諺を等閑に付して、深く意に留めざるものあり又青年は人生の花なり。即ち大なる活氣精力に富み、意志旺にして大に奮發勉勵すべき秋なり。且つ前途遼遠にして、自己の努力如何に依りては絶大の功業をも成し得べく、又自己の奮闘如何に依りては事業の成功も極めて容易なるものなり。又人は年と共に向上進歩し、畢竟常に現在の我れに満足することなく、一層優りたる我とならん事を求めて、知識技能を修め才智德行を研げばなり。凡そ天下の事進まざれば即ち退く人若し現在の我れに満足して自ら進まんとする努力を缺くときは知らず識らず萎微退縮して現在の状態も保ち難かるべし。斯くの如く退縮し社會の進歩に伴はざるときは往々進取の意氣消沈して倦怠の心自ら生じ、漸く懶惰の惡癖を生じて、益々進取の氣象を失ふもの尠かならず。故に絶へず新なる意氣を振ひ、絶へず高き地位を望みて、知識技能を修め才智德行を研げばこそ、日に月に進歩の迹を見るべく、年を追うて大成の域に達する事を得べきものなり。されば常に吾人は進んで已まざる覺悟なかるべからず、一度小成に安んぜんか忽ち

思ふに、今や我國の林業界は、長足の進歩發達を期しつ、ある事明かなり。此の時に當り成が校卒業生六百余名は南は南洋臺灣より北は樺太に至る各地に擴り、斯業の爲に貢献せられつ、あることは一般の認むる所なり。然れども極めて稀には卒業後其の志を立て其の目的の職務に従事するも、一朝多少の障礙に遭遇するときは、忽ち其の志を屈し、中途に其の業を廢し、多年の刻苦も水泡に歸せしめ、空しく歲月を消磨するものあるは、豈に慨嘆の至りに堪へざる所なり。苟も一個の男子として、一旦活社會に出でたる以上は、如何なる艱難辛苦に遭遇するも、其の所志に向

心に油断を生せん、一度倦怠の心を生ぜんか忽ち進取の氣象を失ふに至るならん。然らば諸君之を憂ひ、之れを恐れなば須らく奮然として進取の氣象を養ひ、毅然として倦怠の心を斥け、小成に安んぜず油断を生ずる事なく、元氣を新にし希望を高くし、絶へず我れの進歩發達せん事を期するべきものなり。

さて最愛なる卒業生諸君よ、母校の二十週年記念の永年祝賀を表すと共に内に、標本圖書機械等の設備を完ふし、近く明年度に於ては生徒定員及び學級數も亦従来の倍數に達せしめんとすの豫定にして益々本校の面目を一新せしめんとするの好運に向へり。之れと同時に諸君の行動如何に依つて、母校の價値を廣く世上に表示せられるに至らん、冀くば諸君自重自戒し、自己の本分に對し勇往邁進し、以つて健全なる國民となり、併せて母校の眞價を顯揚せられん事を切に希望して止まざる所なり。

以上は、二十週年記念を祝すると、同時に本校の爲めに諸君に向ふて希望を陳べ、併せて老婆的忠言を試み、以て諸君の一顧を煩はさんと欲し、拙文を掲ぐるに至れり。諸君幸ひ諒せよ。(完)



○紀念號へ

靜岡縣立豆陽中學校 米山太郎吉
小生は山林學校創設の翌年八月より明治四十一年の十一月まで約

七年に亘りて貴校に就職したるものにて、二十周年を迎へたる今日より創業當時を追憶すれば萬感交々至るものあるも今や全く天下の山林學校たるの實を具ふるに至りたるは誠に慶賀に堪へざる所にて在學生の已に全國的なるは勿論其卒業生の全國新領土に至るまで普く行渡りて盛んに且着實に活動しつゝ、あるは他の中等學校に餘り類例を見ざる處と痛快に堪へざる次第なりあはれ願はくは近き將來に於て名實共に國立學校たる日の到來せんことを切望して己まざるなり。

(大正十、五、二〇)

木曾の五木と害虫

菊池生



赤松や落葉松等は昆虫の害が甚だしい従つて。種類も多い木曾で私の眼に觸れたもの丈でも尠くはない。其中の二三は本林友に記した通りである。然るに木曾の五木には寄生虫は殆ど見當らない。演習林や福島附近だけでは標本材料を得るのに苦しんで居る。餘談にわたるが數日前の大暴風の爲めに講堂前の桐樹が中程から折れた。そして樹の中からはキクヒムシの幼虫と思はれる者を十數匹捕へた。大きいのは九分に餘り。小さいのは七分位もあつた、白色で瘦形の顎の丈夫な奴であつた。森林昆虫學の著書には桐の害虫としては

鱗翅類 クサキノシンクヒガ シモフリスマメ
有吻類 クハノカヒガラムシ オホワマガロヨコバイ
等が擧げられてある。根氣よく探したら五木からも虫が澤山とれやう。要するに獨の力は叶はぬ事だ、諸君の應援を願はねばならぬ木曾は木曾で特有の者も居るに違ひない。他の地方には見られぬ者が居るであらう。氣候雨量、土質が昆虫の發育に密接な關係もある事だらう。ブランコ毛虫だけで見ても東京地方の者と比較すると面白い結果が得られた、扱て木曾の五木にはどんな害虫が居る事やら知りたい。前にも申した通り材料標本が貧弱で確實な事は述べられぬが。新島博士の森林昆虫學の本には次の數種が示されて居る

(一)ひのき扁柏

鞘翅類 ヒノキノキクヒムシ、ヒノキノコキクヒムシ

ヒバノキクヒムシ、ヒバノコキクヒムシ

(二)さはら羅漢柏

鞘翅類 ヒバノキクヒムシ、ヒバノコキクヒムシ

有吻類 ナガヒラタウンカ

(ね、すあすひ、及びかうやまきは後報)

キクヒムシの類はお互に頗るよく似て居る。そして一分内外の小さい虫である。樹皮の直下材の表面にゲジ／＼状の穿孔の様が見られる。それは虫の種類に依りて多少模様を異にするから分類の

標準にもなる。一々擧げる必要もあるまいから二ツ三ツ次に記して見やう、虫の記載は興味のないもの。そしてわかりにくいものは林友が奮發して圖を入れてくれ、ばよいと思ふ。百聞は一見にしかず的に見る方乃ち圖があればすぐ了解されるから

(イ)ヒバノキクヒムシ は一分内外の小さい虫で色は少しく褐色を帯びて翅鞘は赤く黄色の小さい毛が生れて居る、此虫は「さはら」の外に「ひのき」にも普通に寄生する。樹の皮をはぎとるとゲジ／＼状の穿孔の様が見られる

(ロ)ヒノキノキクヒムシはひのきの樹皮下に居る虫で生活の様や穿孔の形状等前種によく似て大きさも同じ位だ。色は黒く穿孔状はゲジ／＼が二匹つながつた様なものもある。

一体此等の種類は多くは春に早く發生して長い産卵期を持ちそして冬季種々の状態で越冬するさうな。

(ハ)ナガヒラタウンカ 此虫は上部は暗黒色で下部は黄褐、体の中が廣くて稜狀部に三個の縦線がある。猶前翅灰黄縁紋黒褐で大きく翅脈上に矢筈形の多くの小斑紋があり。もみにも寄生するさうな。

何しても森林昆虫學も始まつてから間もない。日本の如きは幼稚極まるものである。何もかも研究されて居らぬと言ふてもよからう。(つゝく)

昆虫及び虫喰ひの材は山林學校宛に送り下さい。

祝木曾山林學校創立二十周年

宮川丑作



岐蘇山下學寮清
仰見料林千古榮
二十周年今日喜
自強先發幾精英

木曾御料杯雜詠十首

三村千載

千早振神代の代よりしけりけん

ひるもをくらき木曾の檜原は

朝な夕な真木の茂れる木曾山に

雲のか、れるさまのを、しき

山といふ山はあれどもどこもはに

真木のしけるやまは木曾山

そのむかし伊勢の宮木を伐いて、

こたまにひ、くほまれ高くも

君むかしゆつりまつりし木曾山の

いまは御料となげにけるかな
深山木もめくみの露にうるほひて

ときはかきはにいや榮ゆらん
み林をゆつりまつりしまこ、ろは

なかれてきよし木曾の川みつ
み林のあはひに匂ふもみちは、

民のこ、ろのもゆるなりけり
うゑて伐りきりては植うる大木曾や

小木曾の檜原つくるとなほ

山といふ山の檜原にはすとも

木曾のみ山と人はいふらん



木曾山林學校創立 二十年記念を祝て

安井正夫

(時年七十有三)

○ゆくすゑはいまよりいよ、さかむらむよつはたとせを祝ひはじめて

○みの老もうち忘られてはたとせのけふの祝ひに逢ふぞ嬉しき



過去二十年より

將來の二十年へ

宇佐美生

我校の光輝ある二十周年記念號の發刊に當り滿腔の祝意を披瀝し
茲に我校の前途を祝福し併而同窓生諸君の健康を祈り尙一言葉辭
を聯ねて希望を開陳したいと思ふ

顧みれば明治三十四年福島の地にて種山林學校が出来たと云ふ聲
は洵に空谷の聲音で當時木曾に在住した私等は當時町民歡喜の聲
を聞かずにいられたかつた次而之が甲種に變更せられて第一回卒
業生の諸君が遠くは九州より島根より續々蠅集して松田校長の采
配下に授業が開始せられた當時如何に喜びの目と満足の心を輝か
した事であらう

山林は木曾の真情木曾は山林の代名詞として天下に鳴つた當時我
校の出現は當然と云へば當然であつたが然し其の茲處に至らしめ
る西筑摩郡會議員並に郡長其の他の當局者の努力苦心は想像に余
りありと云はなければならぬ

當時全國にも其例は曉星の如く大學及實科の外は其制度の微すべ
きものなき時であるから従つて開校當時の設備の如きは洵に今よ
り回顧して滑稽に類するものも少くはなかつた私等第二回の入學
當時は稍々整備に近かつたとしていたが到底今日の状態に比して雲
泥の相違ある事は云ふ迄もない一例を擧ぐるにもトランシットは
唯一臺であつて當時年少の余輩などは傍へも寄り附けなかつた服
裝の如きも隨意氣儘で混成軍の様なものであり生徒の年齢も四十
年に近きものあり余輩の様に十五にも満たぬものあり軍人あり先

生あり中學の失敗者あり炭焼ありと云ふ状態であつた勿論參考書
教科書の如きも殆んどなきと云つてよく唯々教師の口述によるノ
ートを金科玉條とし然も到底それが卒業迄に終了せず林價算法だ
の測量だのは完了せず終つてしまつた
先生方も當時は素人か多く其の意氣は旺んで研究はせられたであ
らうが今から考へると不完全なる点の多々ありしは余儀なき次第
であつた

然して余輩等の社會に踏出した明治三十八年當時は日露戰の最中
であり人員は沸底し且學校出といふもの、極めて少數なりし關係
上周圍のものは大なる注意の目を張り又期待せらる、處も少くな
かつた然るに余輩等は全く何物をも知らずして社會に出たので周
圍のものは失望し嘲笑し壓迫する此方は悲觀する自棄になる馬鹿
らしくなると云ふ一場の悲喜劇を演じたのである

唯吾人は學校の体面と而して後より出づる人の爲に如何にしても
相當の名譽を恢復せざるべからずと云ふ一脉の決心を持つ
て居たのである之が爲には終夜研究を加へ日曜に態々實況の調査
をなし或は役所に居残つて書類の調査をした事であつた如斯にし
て吾人は兎に角人並の域に漕附て頻々として輩出する専門諸學校
卒業生の間に介在するを得るに至つたのである

由來十有七年我校は縣立となり新築を加へられ設備は完成し校長
其の人は幾度替れども木曾の一角に覇を唱へし天下に瀾瀾する人

士を送出し本邦林業界に其の存在を知らしむに至つた事は洵に慶
賀に堪へない處である乍然過去は唯過去に葬らじめず二十周年記
念と云ふ事も單に過去の懷出を語る事ではあるまい過去二十年間
に築き上る土臺の上之から漸次優良な新家屋、新世界を建造せ
んとする努力であると信ずる

世界戰局以來歐米列強の垂示した林業上の問題は吾人に何を示す
か今更めて茲に賢明なる諸君に申し上げる迄もありませんが經濟
界の沈衰は今其の極に達し八方梗塞の状況ではあるが然し聽事標
準に歸復するのは左迄遠い事ではないであらうと信ずる其時以後
に於ける林業家の責務需要活動は今より又吾人の深甚の用意を爲
すの要ありと信ずるのである

過去何百名卒業生の社會に於ける状態を見るに其殆んど九割は俸
給生活者であると信ずる専門學校の相續で増加し卒業生は以前余
輩等の我校を出てた當時の何十倍にか達する今日更に今後二十年
後に於ける状態を考ふる時今日卒業生諸君の苦心艱難は想像に難
からざる所である、

私の言は或は奇喬に失するかも知れない又潜越であるかも知れな
いが我校の將來は他の諸先例によつて高等専門學校に昇格するか
將又現在比肩する同程の學校と其選を異にして木材工藝より將又
森林工藝より全く専門實踐的特色ある人士の養成所たらしむるか
の二途を選ばなければならぬと信ずる

私は二十年記念に當つて現在に對する設備或は過去の謳歌懐古も必要なりとは信ずるか此の機會に於て縣當局に校長先生の將來に對する御考慮を煩し且又同窓生諸君の御意見を拜聴致し度と思ふのである



祝母校隆盛

脇田山の人

蘇峽二十年の歲月は實に急速の進歩をなす數百の健兒を産み邦國の内外各地に送り勇飛せしむ偉大なる可汝の成長一當初回城の中央に赤色の方形不完全な古建築より出でて新開の地に廓大せる長軀を以て今日に及ぶ雄々しさよ汝の教養せる壯者は不屈不撓の爲めに校風を保持し益々光輝ある生涯に移りつゝあるにあらざるや、校門を出でし健兒は荒れたる野山を地上に於ける樂園とせん美化の目的の爲に木植うる業に曉星より起床し岩清水に心より潔く小鳥の啼鳴を聞きつゝ、百花爛熳春光を迎へて夕陽山家に休養をなす王侯の生活よりも深遠に於て意氣ある生涯と謂ふべし
炎熱の季に雜草を征服して整然たる幼樹の旺盛なる發育を計る時渠等の權威は智者の啓蒙を味ふよりも超越して偉大なり
行事秋を迎へて冬に亘りて鬱蒼森林の利用啓發や林野將來の計劃に際し紅葉を燒きて山川深く虎狼の吼聲を聞きつゝ、落葉を踏みて

千仞の間に身心を練磨する同人は幸なる可素懷を技歴すれば母校の隆盛を期するには曰く世の手腕なき弱者となる勿れ頑強にして實力ある口も八丁手も八丁以て天下山林國の覇者たらんことを祝意と俱と期待するものなり



木曾御料 伐木運材の改良を望む

脇田山の人

木曾御料の伐木運材は大古式のホイホイでは餘りに舊型に屬する者がある過去及現在の如き労働資金の安價な時代は可なんも將來は斯くの如き安價にて底止するものに止らず必ずや高騰を來すは明らかなり故に今より當局の一考を要するのである山の人は別に新しがるではないが現に北米などの話を聞くも如何に彼の地の器械力の應用發達せるかに一驚するのである比較的御料は進止したつもりか知らないがマツチ箱式の輕便鐵道や10-15封度の軌道で十萬町歩の貴重な用材を擲出する時代遅れは寒心に絶へない夫れのみならず中央線の各驛に運搬された用材が再び積換へて輸送するが如き香氣と來たら話にもならぬ同じ軌道を布設するならば五十歩百歩だ中央線と同一の軌道を奮發してほしいシミタレタ經營は時代に順應せざるのみならずむしろ逆行の感がある故に中央線と同一軌道なれば各驛で一々積換の世話は絶無で夫れに用せし諸

經費を節約し伐木所迄を連絡して置けば短期間にして市場に目的とする用材を敏活に運搬が出来消費者側も便宜を得供給者の立場も利益を増大し而文明的で今日廢棄せられし樹種は何等の苦痛もなく利用せらるゝに至り始めて世界的歩調をとる事が出来る尙伐木方法にしても手斧や鋸で數千人の勞役に依らず器械力を應用しなければ現在の柚を有効に活動せしむると信ずる然して木曾の天地を順次開發せられしならば眞に名實共に完備するので好模範を造る事になり引いては中央山林國の開發ともなる此際當局の主能者に望む徒らに机上の論議を離れ歐米を視察して着々其長所を含ま味し應用せられ御料林の益々健全なる發達を期せられん事を希望して止まざる次第なり



石川縣の林野基本調査に就て

飯沼生

本縣に於ては林政上の基礎を知らむがため林業の基本的實狀調査の必要を感じ大正六年度より之れが調査に着手せり、調査事項及調査方針を記せば次の如し、而して調査に當りては一町村を單位として各項目(別記)に就き調査するを便とす今全縣下の町村を通過するに二百二十町村の内尙も山林のあるものは二百十二町村にして更に臺帳面積百町歩を限り一町村夫れ以上の山林面積を有するものは百六十四ヶ町村なりとす本調査は尙も山林を有する町村

に就き悉く施行すべくして又之をなすに若かずと雖も之か完成を可及的速かならしむとせば其の煩に堪へざるを以て先づ百町歩以上を有する町村につき施行するものとし就中山林面積豊富なる町村の經濟上林業を重しとする町村に主力を注ぐべきものとす固より調査項目中林産物消費状況移出入状況等の調査は山林面積の有無に關せず施行すべくして前に除分したるものなり

林野基本調査項目

(一)總論

- 一、位置 地勢
- 二、林野面積

イ、陸地測量部調製五万分の一地圖より各村別全面積を算出し次に統計又は推定により田畑宅地池沼道路河川等の面積を算定して之を全面積より控除して林野面積となすと
ロ、公稱により各所有別(國有縣有郡有町村有字有社寺有其他の團體有及び私有)林野面積を算定すること

右の内私有に對しては本村人の所有面積他町村人の所有面積に區別すること

備考、本項の調査を基礎とし實地の踏査を経たる後推定により本項公簿上の面積を訂正し實測のものとなし
(イ)により得たる一町村内山林面積の内譯を作るものとす尙實地に就き立木地無立木地の割合をも定めたる

後森林面積簿を作製すること

六(二)地 況

地勢地質土性を各大字毎に大要説述すること而して之等の記述を明にする爲其土地の代表的適樹を指定すること

(三)林 況

陸地測量部作製五万分の一地圖に林相を記入すること而して林相の色別は

- 一、赤松と外の針葉樹と雑木林と混淆林
- 二、赤松雑木混淆林
- 三、樅赤松混淆林
- 四、雑木林
- 五、赤松林
- 六、黒松林
- 七、松扁柏花柏檜(羅漢柏)樅林
- 八、竹林
- 九、蕪畑
- 十、無立木地

(四)林木蓄積

前項の林種別により齡級別に面積を推定し次に之に依り其蓄積を算定すること但し此場合人工林にありては豫め區長をして其

區内森林所有者に別表(人工造林調査表)を配布して樹種及樹齡現在立木本數計を調査せしめ置き之を基礎として面積及蓄積を算定し雑木林にありては實地を踏査して齡級別面積を推定し

夫々標準地伐採棚積したる上全林の面積を計算すること
尙桐、樺、栗其他闊葉樹にして用材を目的とするもの及漆樹油桐にありては區長をして之が直徑別に本數調査を提出せしむること

(五)地方林業の長所と缺点及之が將來に關する意見

(六)林産物及林産工藝に關する調査

- 一、其の起原沿革
- 二、生産方法
- 三、産額(數量)資材の數量及原産地を附記すること
- 四、販路
- 五、運搬の方法及運賃
- 六、生産販賣運搬等改善に關する意見
- 但し一及二は林産物工藝に於てのみ記述するものとす
- 七、林産物移入數量拂額及原産地
- 八、林産物消費の状況
- 需要額は町村内日用の木竹薪炭と工業用のものを別々に調査すること
- 九、林産物移出數量拂額及移出先

(七)木竹材及薪材の需給關係

前項蓄積生産及消費の状況により現在に於ける相互の關係及將來の見込を記載すること

(八)苗木生産需要の状況

- 一、生産の數量
- 二、販賣購入の數量
- 三、苗木生産需要に關する將來の意見

(九)森林の災害

- 一、災害の性状
- 二、驅除豫防及取締方法

(十)參考事項

- 一、放牧除草萱刈蕪畑森林組合産業組合等の現況其他參考となるべき事項を調査し之が將來に關する意見をも記載すること
- (十一)林業上指導獎勵すべき事項

以上の調査に甚だしき村に於て林業上指導獎勵すべき事項を列記すること

將來の方針

一 第一回(臺帖面積百町歩以上)調査修了後は引續き林野臺帖面積百町歩以下を有する町村に對し林野の地况林況並要造林地要林種改良地林産物の需給關係等を調査し將來の施業確立するものとす



造林上の雜感

脇田山の 人

二、本調査の結果未立木地及林種改良を必要とする土地に對し造林をなす者に縣費を以つて相當補助をなし林造の速成を期すると共に又一面當業者の希望に應じ技術者を派遣し測量及施業計劃案編成並適地の撰定實地指導等をなすべきものとす
三、其の他本調査の結果に基き本縣林業施後を根本的に確立すべしものとす

往時造林の錯誤よりして林業經營上至大の損失を來せしことは吾等同人の最も考慮と注意を要すべき問題にして將來に於ける損失を防止するものなりと信じ二三の事例を斷片的に論及し參考に供せんとす

(1)木曾地方に現れたる造林

天下に冠絶せる扁柏天然林の本場たる木曾御料林の伐採後に造林せらる、方法の内一町歩の植付本數六千本乃至極端なるものありては一町歩九千本に及べるものあり現今は本數四千五百本山の人をして之れを見れば確かに密植にして錯誤なりと信す之等の原因には種々ありと雖最上注意を要すべきは實力に缺たる高等學府の出身者が尙表紙やノートと首引し直譯的理論に走りし結果や演習造林と心得利害を顧みざる缺点である一町歩四千五百本にし

ても尙且密に失する感あり即ち一町歩參千本乃至參千五百本東西何れを問はず適當である木曾の如き急傾斜地の植付は指導者をして務めて斜面植込みに注意せしめざれば目的の本數より多く植込むものである御料林の如き伐採跡地の植付は求めて密植の必要更無し雜草木の旺盛ならんとする時既に植付けたる扁柏は、ドン／＼生長すれば植付本數の多きは下刈費に何等の關係を及すに至らず故に今日としては苗木を節約し植付人夫を節し引ては造林費の節約を期すべきである

既往植林地の現況を見るに前掲の關係よりして密植のため植栽木は上長生育のみ旺盛になり肥大生育の權衡を欠き不完全なる林木を形成せるに至れるは遺憾である此儘にして逐年せんか益々損失を増大するや必然なり斯かる造林地に對しては間伐又は除伐を急務とし多大の勞力を費すも改造なすの大英斷を要するものと信ず斯くの如きは獨り御料林のみならず各地民林にも行はる、弊害である。

(2)各地に於ける落葉松林

明治三十年頃より全四十年頃に亘り造林熱の盛んに向ひし際各地に於て落葉松の造林流行せし事ありき其結果各所に今日落葉松林の極めて變形の林を見るに至れり此の流行も生長に應じて手入等を行ひしなれば些したる弊害とも思はざりしならん土地の選定氣候立地の關係等を考慮せず吾れも人もと落葉松カブレの時代で其

の當時は赤松林や榊林等の美林も乱伐なし落葉松を植付なし數年后に至りて落葉松の生育不能に氣付き再び元の天然の赤松榊林等の保育をなすが如き大なる錯誤も亦甚しからずや其の當時の指導はドンナ顔をして居るのか獨り損失を見る國家や山持は氣の毒である。現在各地の落葉松林を通觀するに右の遺物たるのみならず極めて密植せるものが其儘となりて雜然たる林況を呈せり特に甚しきは淺間山麓、八ツ嶽山麓等である國有林の如きも着々試驗林などでは完全な除伐間伐が行はれて居るが一般林地に對しては手入せられて居るのは少ない御役所式の施業は一日一日と遅れる或は本年の豫算計上を無いとか何とかか言ふが夫れだけ當初の目的に反し益々損失を來すのである然も要は實行にあり落葉松の性質としては樹齡拾五年生乃至二十五年生内外の間に於て順次強度の除間伐を行うて良好なる成林をなすものなり故に山の人は言ふ此の期に雜然たる落葉松林の除間伐を急務とする

(3)赤松萬能論

我國の林野經營上より見て山の人は赤松萬能を主張するものである夫れは一番用材として短い年限で一番生育の速かな一番用途の多い有益な樹木は赤松材である故に赤松林の造成を以て急務であると信ずる先年本多博士は赤松亡國論で世間から種々の説を立てられた事がある爲めに造林思想を高潮せられし功は博士に依つて多大であつた山の人は六ツかしい學理を述べるのではない平凡な

事で讀者が實益を納めれば夫れでよいのである。

維新以后本邦の山野は乱伐乱採をなし赤裸々と化し或は不毛の原野と荒れはて或は地方に依り野火を變勵なす亡國的風習あり爲めに優良なる樹種の根絶せんとする時に當り天恵は無視し難く幸ひなる可し赤松の分布旺盛なるは林業復興の第一歩と謂ふべし此の際人工天然何れを問はず赤松林の造成保育は有用なることにて施業の方法は輪伐期を知くするを原則となし又は檜櫟等の樹種を下木とする中林作業を爲すにあり最も注意を要するは樹間距離の長短にて之れに依りて生育の遲速は分岐するものである別して赤松林の經營者は間伐を行ふ事が必要にて短期間に於て材積を増大し從而平均収益を多からしむるものである一般林業の經營と雖も投資に對し資金の回収速かなるを貴ぶ山の人は赤松造成を急務とするは他なし供給者の立場を離れて需要者側にありて此利用途多き赤松材の市場に如何に缺乏せるかを思ふ時赤松萬能を絶叫するのである中京の某一工場にして一ヶ年に拾萬石乃至拾五萬石の松を消費しつゝあり之れも到底内地赤松材を得る能はず止む無く北海道樺太の杉樅を以て需用を充たしつゝ、あり木材二業の發達は益々廓大せられ用途は増加するのみ沿海洲、北米、加奈太等よりドン／＼輸入材を見る現勢は可ならんも數十年後に來る木材の凶年を防止するや否や



アイヌ物語

M Y 生

先年北海道廳に赴任し同年六月より六ヶ月間施業編成調査の爲出張使役中の施業案調査用御用人夫アイヌ土人より聞知せし一端をアイヌ物語と題して左に記さん

アイヌ土人は現今北海本島及千島樺太に住居すと雖も日本歴史の記する所に據れば往古は蝦夷と稱して日本本州に蔓延し人々多くして勢力甚だ強かりしかば其の勢力あるにまかせて屢々叛亂を起し皇國の御迷惑一方ならざりき

こ、に於て日本武尊御親征あらせられ其の後阿部羅夫坂上田村麻呂等の名將之を征服せり一説に據れば北海道のアイヌは本州より追はれて逃れ入りたるものなりといふ。熟考するにアイヌは元來北海道に住居せる民族なり何故なればアイヌは往時の物語を口傳によりて傳へつゝ、あるが本州に住居せし事に就きては確實なる傳説なし稀に斯る説あると雖も其れは内地より渡來せる和人より聞きたる事柄に揣摩臆測を加へたるものにして決して信するに足らず其の他アイヌの言語風俗習慣等が和人と全く異なる事と石器時代にアイヌが使用せし諸種の器物が北海道の到る所に發掘せらるゝ事等アイヌが舊來北海道に土着せし事を證明せりされば北海道アイヌは本州より渡り來たも

のにあらずして本州アイヌこそ北海道より分れて蔓延したるもの
と言ふべけれ北海道は往昔渡島と稱し渡島編夷の名は阿部比羅夫
北征の時始めて史上に見ゆと雖も其の何處に住居せしは其れより
も尙ほ甚だ古き事にして北海道はアイヌの最初よりの根據地たり
しもの、如し

さればアイヌ種族の現今は天然物のみを友とせし昔時は外部より
何等の刺戟を興へられず安全無事の生活をなせしものにして人口
も亦多かりしと言ふ然るに御代の開くと共に優等人種と接觸する
事頻繁なるに従ひ漸く其の數減少せる傾あり是れ生存競争に基け
る優勝劣敗の眞理ならんもアイヌ種族に取りては誠に悲しむべき
現象なり現今アイヌ種族にして純粹なる者甚だ少く山間の地或は
交通不便なる地方にあらざれば之を見る事能はず海岸地方の如く
漁業の早くも開けたる所に於ては和人の交る事多かりしが爲め
其の子孫は大低混血し容貌の特徴を失ふ事少なからざりき故に現
今の土人の過半は混血兒と云ふも可ならん次に混血の土人と純粹
の土人との体格を比較せんに混血の土人は混血するにより却つて
其の兩親より強大なる体格を有し過激なる勞働にも堪へ得るもの
、如し純粹の土人は文明と共に日常生活の一大變化を來たし其の
體質は之に適せず次第に低下の傾向を見る幸に近年漸く他人種と
の接觸に慣れ境遇の變化に堪へ得る様になり其の低下の傾向次第
に回復せられつ、あると云ふ

アイヌ男女共に首の邊まで毛髪を垂れ其の上男子は男子なる威嚴
を保つ爲著髯をなし女子は女子らしく口邊又手の甲に文身をなせ
り文身の由来を老アイヌに尋ぬるも確としたる傳説無し只女とし
て身を飾る爲なりと云ふ依つて考ふるに世界の各人種は容貌の異
るが如く其趣味も亦一様ならず西洋婦人が胴を細くし日本婦人が
おはぐろを塗るが如くアイヌ婦人も文身によりて始めて女らしく
見せしめ斯くは習慣となりて行はれたるものならんされど文身
は野蠻の風習なれば現今の土人は其の惡しきを知りて新に施す者
なし且警察に於ても取締をなしつ、あれば將來之を見る事能はざ
るべし土人の習慣として家屋を建設するに當りては土地の善惡に
注意し墓の跡又は其の附近の地の如きは最も忌み嫌ふと云ふ家の
出入には必ず川下の方にして便所は入口より七八間乃至十五六間
位離れ男女別々に建つるを普通とす窓は川上に向ひ「カムイブヤ
ラ」(神の窓の儀)を設け此處より熊の頭を出し入れ又は祈禱をな
すに用ふ左側には「イトムンブヤラ」と稱する窓を設け光を採り外
を眺むるに使用す川上を貴ぶは川奥に位の高き神々在せばなり若
此等の神々に人の出入口を示し又便所を差向ける等の事あらば其
の者は祖先以來のしきたりを無視して甚だ無禮なるのみならず忽
ち神罰を受け一家滅亡すと云ふ。

次に土人の習慣の一つとして行はれつ、あゝ熊祭はアイヌの年中
行事中最も有名なるものにして子熊を捕へ來り之を育て冬期に至

り之を送る(祭る)事はアイヌの祭の中最も重せらる、ものにして
其の育て方懇切なれば懇切なる程家益々盛になると云ふ其の育て
方等は略し單に之に關する傳説を左に記さん

子熊は送(祭る)られる時に綺麗な木幣立派な刀を模造し珍らしい
花矢おしい團子と酒とをたくさん背負ひ父母の許に歸へりて今
まで厚い御世話になつた事や澤山の良い土産を頂戴せる事を述べ
るのである此の時老父母は大層喜んで「嗚呼左様かお前は良い所
で育てられた彼處の家の者は心誠な良いおれたちもあの家の先代
には良く参いつたものだからこりや隠居する前に一二度遊に行かうお
前も言ふまでもない事であるが良い友達を誘つて時折遊びに参り
其の家の好運を計り且つ富ませよ」と親子は再會を喜んで之より
更に其の家の福來安泰を計るのである

右の如くにて子熊を飼ふ目的は熊の同情を得て獵を多くし財産を
作り又病魔等に侵されぬ様に幸福を得んとする爲めなりと傳ふ。
アイヌ種族の教育は往時文字無かりし爲其の往時の歴史を知るに
甚だ困難なり故に彼等の信じて相傳へし傳説の如きも果して事實
なるや否や疑はしきものなり只アイヌが昔より相互間に於ける簡
單なる通信若くは山川を記し又は通路の順を明かにする等の種々
の符號を用る來りしは事實なり家庭に於て兒童を教訓するに神を
敬ふ事、兩親に従順なる事、目上の者を尊重する事、老人を敬畏
する事、人の問はざるに自ら語り出でざる事、目上の者の談話に

容喙すべからざる事等を以てす、而して男子には殊に漁獵する方
法、弓矢及び毘を造る法、獸類の往來に伏矢する事、毒の調製法
諸器物の製作法、彫刻の法等を教へ、最終に信仰する諸々の神の
名、祈禱に用ふる幣の作り方、祈禱文儀式に於ける挨拶及び其の
順序、古代よりの傳説等を會得せしむ、女子には木皮を採りアツ
シを織る法、刺繡の法、料理の法より女子を育つる法、文身の技
術、種々の舞蹈、死人の爲めの泣哭の仕方、男子に對する禮儀に
至るまで之れを教へ殊に其の最も重要な事は男子を尊敬し待遇
する事とす。アイヌは他地方人との關係に付き子弟を教育するに
他地方の人を優遇する事之れに會ひたる時は鄭重なる言語にて挨拶
すべき事之れと共に酒宴を開き神に祈を捧ぐる儀式の心得等を
以てす、此の場合に於て先方の風習儀式を充分に知るは必要なり
と雖も自村の儀式に精通せずして先方の注意を受くる様の事あり
ては其の者自身恥たるのみならず實に部落の不名譽なる事を以て
先づ自村の風習を教へ次に他村の事に及ぶと云ふ家庭教育は右の
如くして決して惡しきと言ふにあらざれども惜しむらくは狭きア
イヌの區域に止りて廣く社會に亘らざるを遺憾とす

現今の學校教育に明治中年土人の相當集團せる部落に於てのみ國
費を以て舊土人小學校を設けられ教育の進歩を計られたるも其後
經驗により實際の狀況に適せざる所ありしが爲大正の御代となり
舊土人兒童教育特別法等の規定せらる學校教育を施行せられつ、

あり
 斯の如く土人教育も漸次良好の状態に向ひつゝ、あるを以て目下在
 學中の兒童の生長して父母となれる頃は其成績和人に異ならざる
 に至るべし

左に一二の土人語を示さん

土人語
 ホクフ
 メノコ
 エカシ
 フジ
 ユボ
 アキヒ
 アチャボウ
 ウナルベ
 ビリカウ
 イボカシ
 ロベアンロ
 モコロ
 シニアンロ
 イランガラツベ
 カンビ

和語
 男
 女
 老父
 老母
 兄
 弟
 叔父
 叔母
 美しい
 キタナイ
 食事
 寝る
 お休み
 お早やう
 手紙

カンビエキ
 チクニ
 ジベルバニ
 ウニヒ
 チセ
 ホツカイボ
 メノコボ
 メノシヤン
 イノミ
 バイル
 シリサツク
 シチウツク
 シリマタ
 シリセ、
 ヒリメマン
 メマン
 アツト
 ウバシ
 アツトアシ
 ウバシアシ
 シリビリカ

手紙が来た
 木
 薪木
 自家
 家
 若男
 若女
 盆
 祭
 春
 夏
 秋
 冬
 暑
 涼
 寒
 雨
 雪
 雨降
 雪降
 晴

ツル
 トヨダンネ
 ハツバラブ
 キウダツフ
 シンジツ
 シンジツ
 マウチツツブ
 ニヨラク
 ヤルイ
 ウレボク
 シユナツジュツブ
 クエカシ

一月
 二月
 三月
 四月
 五月
 六月
 七月
 八月
 九月
 十月
 十一月
 十二月

北海道廳林務課施設業係の暇に



短歌

(山子の歌へる)

▲淋しさに口笛吹けば口笛が

山彦となりし朝の嬉しさ。

▲何にも彼も我が物顔で草の宿に

夜露を浮びて眠り明せる。

北海道札幌 大木放野

▲心なき山の悲しさよ大聲に

友を呼べどもコダマ流れる。

▲業終へし心安にしみじみど

川面に一つの落葉をみる。

▲谷川の響高けれ山深み

夫の静けさは何處かにあり。

▲山に在り一つの白雲離さじと

見つめつ居しに遠く去り行く。

▲街に行きあの静けさが切に又

生くきするなり森林労働者なる。

▲山子等の話は總べて若かりき

世帯に染まぬ語らひをもつ。

▲山に在り紅き灯の町宵々に

狂はんばかり戀ふる男よ。

▲暑ければ習となりて眞晝時

木影に入りつ仰向けに寝し。

▲仰向けに寝つ、かすかに吹く風に

揺る、木の葉の様々なる見たり。

▲風冷やし頃月と別れつ今宵も亦

心安らけ床に入りし。

▲木塙人夫の一人一人が掛け聲に

欠伸の湧きつ夏の日暮る、。

▲山に居てたまに海邊の宿に寝し

我浪の音に眠る術なく。

▲眠られねば起きて側らの煙管取り

サツキの煙様々に吐く。

▲地氣今足よりそつと泌み入ると

覺わし朝の石の潤む。

▲好くま、に潮に濕りし堅砂地

泳忘れてしばし歩みし。

▲さながら幼な小供に在る如し

ドブン／＼と河に石投ぐ。

▲玉蜀黍のカンケキ秋の音聞けば

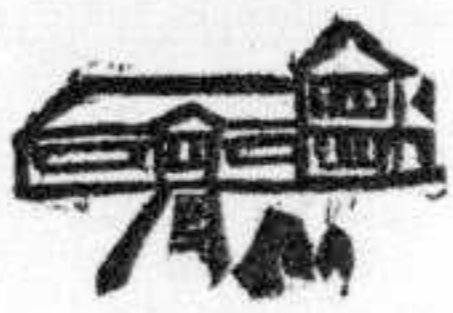
うら懐しき思出の湧く。

▲陽の暮れつ秋の野道を我行けば

冷氣は空より降り來るが如し。

▲爪づきて覺ゆる痛さに似てしむか

十月半の山澤の水。



母校を思ひて

S. K 生

山林學校が木曾の谷間に産聲を擧げてから二十歳漸く一人前の男

自分は卒業後滿五ヶ年を経た五ヶ年といへば長い様なもの、水の流る、様に實に早い吾々は今まだ社會校の一年生である何れに向つても未だ疑問ばかりだ然し五ヶ年はほとんど實際問題に就ての研究で印象が深い事ばかりである

此の意味に於て山林學校は各種標本室の完備演習地の擴張實驗室の整備は刻下の急務たるは今更此處に冗言を費す必要はない、此の方面に向つて着々進歩改善を圖られて居る諸先生に感謝してやまな

今回二十周年記念事業として標本室の創設も其の一部に加へられて居るといふことは實に喜ばしいことで此の機を利用して模範的の林業標本室を建設せられんことを望んでやまな、そして日本に二指を屈することすら出來ない母校として名實共に權威あるものにして欲しい。

大正一〇、四、一〇夜



母校創立記念會に當り痛切に感ずることは開校當時裏山へ植栽したる扁柏も矢張二十周年の年輪を數へ經營宜しきを得て將來木曾の名木を發揮しつ、ある一事なり。此の意味合に於て相互自然の間に順次愛校の生長を催し所謂充實ある天下の山林學校として彌が

になると云ふ歳である昔なれば元服をすると云ふ御目出度い年である

此の佳辰に當つて山林學校が今後如何にして社會に立つべきかを林友六百の會員と共に研究する必要があらうと思ふ

過去の山林學校兎に角中等程度の林學専門の學校として全國に否海外までも名聲を博して來たことは吾々は自惚れでもなんでもない而し今迄の林業教育は甚だ不振で母校を除くの外は總て農業と林業と併置の學校であつて而もそれが何れも農科の方が遙に羽振りがよく林科なるものは存在も認められぬ程の微々たるものばかりと聞いては吾々は余りに誇張するわけにもゆかぬ
山林學校の如何なるものなるやも解せぬ人多きに至つては吾々は寧ろ憤然たらざるを得ない

過去の林業教育は極めて固執的で盲目的であつた様に思ふ、それは教師や吾々生徒には何等罪はない世の中の人余りに此の方面に對して冷淡であつた様に思ふ第一學校の設備が他の實業學校に比して甚だ遜色がある様である吾々は奈何しても自發的には勉強するとしてもそれは實に無意味のものである

生存競争が次第に激しくなつてくると共に吾々は先づ第一に學校の設備を整へることが先決問題であらうと思ふ如何にも先生が眞劍に講義して聞かしてもそれは水の泡の如く消に去るに早い例へ一時は頭の中へ這入るとしてもそれはほんの一時ののである

上にも誇らん哉以て祝詞に代ゆ。

大正十年三月吉日

南安曇郡島川村

農主 黒岩 正平



木材の缺乏を憂ふ

松館 藤太郎

我が木曾山林學校は明治三十四年四月開校以來堅實なる發達を遂げ茲に二十周年を迎ふるに至れるは邦家並に林業界の爲に慶賀に不堪不肖明治四十年第四回卒業生の一員として今日此の光榮に浴す衷心欣快の情禁じ難きものあり。

茲に謹みて滿控の熱誠を以て祝意を表し益々發展斯界の爲に貢献せられし事を切に祈る。

紀念號發刊に際し何れにかと思へども眞の山人にて足は人一倍頑強なるも口手の發達至つて鈍く林友紙上へも通信文の外は投稿せし事なきも此の機に際し從來の罪を一掃し謝する爲に經歷の一部を披瀝し併せて所感の一端を述べ大方諸彦の御指導を仰かむとす回顧すれば四十年三月卒業後兩三日間福島町にあり三ヶ年間の親しみの名残を惜しみ郷里大桑に歸りしが間もなく青森大林區署より至急赴任すべき電令に接し四月二日早速旅装を整へ福島町に至り同行者を尋ねるに一回の杉本君三回の宮田君同期の由尾新井肥田等の五君なるを承知す茲に於て元氣百倍し三日は一行と共に

馴染の福島町を後にして關町を越へ愈々旅の人とはなりぬ鳥居峠の頂上にて恩師松田校長先生に邂逅し茲に青森行に付堅き決心を言上しお別れ致し歩を進む當時中央線は瀛車を通せず爲に己が膝栗毛に鞭打ちて楮尻驛に至り之より車中の人となり東京に出でぬ時冷も内國博覽會開催中として一應は觀覽せるも希望の任地に向ふ矢猛心に急がれ館内素通り何も頭に殘されしものなし而して六日は上野驛より乗車の事となり任地も間近の心地して愈々奥州への旅立意義ある旅程に上る一行何れも意氣軒昂衝天の概あり即ち車中盛んに「アリナレ川」「アンデス山」などのラッパ節を高唱し恰も吾れ一人の觀ありき。一行の服装は亦甚だ振ひ否無邪氣にて正服正帽と言ふ扮装の者もあり社會學を修めざりし其の當時の連中には無理なかりしなり、四月七日青森に到着し全市屈指の三階建一等旅館かぎりに投宿せり奥州は酷寒地と聞き覺悟し行きしも期待に反し温暖の感少からざれど各所に(市中)殘雪ありしは當時の氣候として之又意外に感せられたり、而して翌八日は早速登壇して夫々青森大林區署在勤の辭令を受けぬ間もなくして同期の竹内平田、矢島の諸君も赴任せられたり由尾君と不肖とは施業案に平田君は測量にて本署詰他の諸兄は何れも小林區署へ赴任せらる青森大林區署は特別經營事業の一大擴張期に際し殊に前年(三十一年)十二月末廳舎は祝融氏の爲に全焼の憂き目に會し前年外業の成果を悉く鳥有に歸し之れが復舊を期する爲大車輪的活動期た

り、又官行所斫伐事業として從來の立木處分を中止し更新上考慮を要する点あり林區署自ら伐採丸太として賣拂の方法を講じ人員の増員をなす場合に於て斯くも多くの人員を要したる次第なるべし、吾々施業案の二名は約二週間青森に滞在し焼き出され後の民家を借入れ分室に出勤し例規程類の研究に没頭せり、吾々は青森の言葉地理に通せざりし爲に常に異様の感に打たれ又はとんだ考へ違ひをなす滑稽を演じたるあり即ち出張すべき地名に横濱と稱する所あり盛んに横濱々々と連呼せらる、爲テツキリ神奈川縣の夫れと思ひ遠方まで行くものだと思つて一瞬考へさせられし事もありき、愈々日も経期も熟し出張する事となり由尾君とは別れしも何れも斗南ヶ半島(下北半島)なりし、當時本官施業案に十數名の内専門學校出身者は僅かに一名にて他は悉く林業講習所出身の方々のみなりき、之等の方に従ひ山元の一家を假り住居と定め外業に従事する事となり、第一日目はクリノメートル間繩を持ち三名の工夫を連れ登山し前年測量せる林斑界を更に測定するの仕事をなす、(前述の如く焼失の爲再測を爲すものなり)、伐り開きは前年已に行はれあり今より考ふれば實に樂なものなりしも其の一日にて甚だ落膽今まで想像しありし總べては裏切られたる感ありき而して雨天を除く他は連日の外業にて川澤と言はず峯と言はず小班界(林相別)迄測量するに至り其の困難狀況譬へん様もなく上野驛を發せし當時の元氣は何れともなく去りしも十數日間の經驗に

より更に別途決心を固め従業せり、然るに約二ヶ月の後盲腸炎と言ふ難病に冒され正に一命を屠さんまでに患ひしが約四十日間にて恢復せり新參者の自分として斯くも重病に呻吟せし當時の心は又格別なりしも再び外業に従事するを得たるは一ツに天祐と深く感銘更に奮闘し十二月まで外業を續け中旬歸郷し第一年目の出張は終はりぬ、之れより大正元年度まで巖手縣二ヶ年青森縣四ヶ年都合六回内二回は檢訂に他は編成として出張せり其の后一身上の都合より小林區署在勤となり大正二年六月盛岡を振り出しとし鑿々澤久慈の三小林區署を經現任地に參り既に二ヶ年を経過せり小林區署にありては八年餘造林業務のみ専攻今日に至りしものにして足掛實に十五年一施業期半に達せるも格別の事なく碌々今日に至りしが感ずる處は只木材缺乏の一事のみとす
施業案編成當時は各事業區其の規程の定むる所に従ひ獨立の經營即ち收支關係に甚だ重きを置き立木伐採の如きも林力の許す範圍に於て出來得る限り多量に伐出すの計畫を樹立し深山幽谷の原生林に近き林分に對しても極力伐採すべく林道の改設家庭工業の發展等を期し無理にも伐採せんとするの方法を執れり
然るに世の進運に連れ木材の利用も展開し逐次多量に伐採するに至れり殊に大正三年以來世界を震撼せる大戦亂により我國森林は過伐に陥り各地共木材の不足せるを耳にす之れが適例として當署管内に於ても初期外の伐採希望被害木の拂下伐採量の増加等を出

願し來る向頗る多し常に民林の伐盡せるを自撃しつ、ある不肖は出願地元各位に對し同情の涙禁せむと欲して能はずそれにつけても「無き袖は振れぬ」の古諺を感じ施業案當時は木材多量伐出を計畫し利用開發に腐心せるに僅か十年を出でざるに早くも木材缺乏を聞くに至りしは何たる皮肉ぞや轉た今昔の感に不堪日本の木材は今後五十年にして伐り盡さると盛んに唱導せらる
今専門學者の調べられたる之等關係に付詳記せば明治四十年より大正五年に至る平均一ヶ年伐採材積一億五千五百万石にして大正六年の伐採量は一億八千七百万石大正七年は二億五千万石に増加し外國産木材の輸入も大正三年は十六万石なりしに對し大正七年には八十三万石に増加せりと云ふ而して之れが供給可能數を見るに一億一千八百万石乃至一億七千万石にして已往伐採量に及ばざること約二千六百万石乃至五千万石にして年々之等は過伐に陥るものにして過伐の分を控除せば供給し得べき標準年伐量は一層減少するのみにして森林の元本を犯すに至り遂に窮極するところを知らざるに至る

翻て植伐關係を見るに明治四十年より大正五年に至る十ヶ年間に於ける平均一ヶ年の森林伐採面積は三十二万七千餘町歩にして全期間平均一ヶ年の人夫植栽面積は僅に十二万八千町歩余に過ぎず約二十万町歩は植栽せられず均衡を失す尙又最近に於ける人工造林の趨勢を見るに大正七年には十萬八千町歩となり大正二年植

栽面積十四万九千町歩に比し僅々五ヶ年にして二割八分の減少を示すに至れり尤も森林の更新は全々人工植栽に依るべきにあらざるは勿論なるも天然下種或は萌芽又は伏條分蘗等其の森林の状況により新謂天然更新法を適用すること素より障害なしと雖も之れも程度ものにて伐採面積の三分の二以上が悉く斯法によるに至當とすとは信じ得ざるなり即ち當然植栽すべき地況なるにも不拘當事者の無關心により其儘に放置せられあるもの多き事と思考す木材の饑饉は前記の如く歴然たるに不拘伐採跡地の更新状況亦如斯とは實に寒心に不堪なり

加之更に森林の荒廢により齎す災害の甚大なるを思はざるべからず我國生産物中最大なるは米とす此の米は山と木により完全に産出し得べきなり又年々洪水汎濫による被害は實に莫大なるものにして大正元年より全五年に至る平均被害高は面積二十二万六千町歩此の額三千八百〇五万圓にして假りに一町歩當りの人工造林費百圓と見積るときは三十八万〇五百町歩を造林し得べきなり政府は大正九年度より第一期間即ち十五ヶ年の計畫を以て公有林野に對し三十万町歩の官行造林を遂行する豫定なりと言ふ單に金額のみにより考ふるに前記被害額により一ヶ年間に此の十五ヶ年の豫定事業を遂行し尙餘力を生じ得るなり
今や科學萬能の世となり電氣の應用實に夥しく寒村に至るまで電燈の點せられざる地なきに至れり之れ皆森林存在により潤澤に供

給を受けつゝある水の利用によるものにして森林の恩恵や實に大なりと云ふべし現に國內にて使用されつゝある原動力は約一百万馬力にして今后利用し得べき極量としては湧水量にて五百万馬力と註せらる今之れを火力によるとせば九千万噸の石炭を要し我國として得て望むべからざるも此の改算價額は二十五億圓に上ると云ふ即ち此の富と力は水の涸渇と共に雲散霧消し盡すものにして石炭の豊富ならざる我國としては水力電氣の利用は實に重大なる意義を有す

次に最も重大なる森林の價値は國防上即ち軍事上大なる關係を有す這次歐州大戰に於ける森林の偉功と木材の靈能とに付ては讚美の詞を知らず聯合軍最後の勝利は佛蘭西國東都諸州の整備せる森林に負ふところ甚大なりと言ふ我國に於ても常備軍の一ツに森林をも加へ養護に努めざるべからず
由來樹木は他の工事製作品等と全然其の赴を異にし單に資力勞力により生産し得べきものにあらず「時」を以て第一の要求とす樹木の權威特質は實に係りて時にあるなり
以上の如くにして木材の缺乏を聞く眞想は單に現物の問題のみならず専門學者の指示せらる前述べの如き嚴格なる大影響を有す
茲に於てか我々實地の衝立つもの、責任や實に大なりと言はざるべからず此の際吾々の執るべき責務は協力一致を喚起し危急の時勢に沿ふべきなり百年の時を経て漸く成果を擧げ得る林業は一

日一刻たりとも忽緒に付すべきにあらず大力諸彦の御同感を信す益々同一步調に出でられし事を警言するものなり聊か所感を述べ各位の御眷顧と御指導の程を懇望し併せて御健康を祝し擲筆す

一〇、四、八、稿

私の好む静岡縣の山村

立 道 生



山林課に奉職して居ると随分山の中を歩行することが多いしかし自分は都會に暮して居て一週日目乃至は十日目に入煙稀なる山中へ出張するを最も楽しみとし最も衛生の理想の生活と喜んで居る殊に此頃九十度以上に昇つて居る紅塵の静岡市を後に蛾の聲も聞こえない山家へ出掛けるのが中々の楽しみである

静岡市から三里程輕便にゆられて北に行くといふ地がある、から親ゆすりの足で八里程安倍川沿岸を上流へくと溯つて行くと梅ヶ島と云ふ山村がある牛妻から八里の陸路は道らしい道がない私が始めて出張した時は静岡縣にもこんな山の中があるかと驚いた位だつた全村山林の三分の二は保安林に編入せられてある所を見ても如何に此の地が崩壊し易いか、明かである自分は今春四月一ヶ月間當村長の宅に滞在して居た雨のために出張出来ない時は村長の舎弟と二人で土地の名物ヤモメをあさつて来て椎茸と煮て食つたこんな山中のこと、て「米のなる木はまだ知らぬ」

と言ふふうで米は皆山梨縣なり静岡から移入する

産物としては茶、坊木、椎茸、山葵である、には又静岡縣一番いな日本一番と言つても差支へない親くすれと言ふ大なる崩壊地がある周圍一里餘これが毎年少しづつ、増して行くから百年後には随分大なるものになるであらう今一つこ、の聞けた物は温泉である湯槽が非常に大で吹き出る水も多量で静寂で身延の七百山中へ来た様な氣がする、から十町も上ると身延の山續きで山梨縣界になつて居るこんな山中であるから人情が非常に厚くて度々出張すること、て村民にもすつかり知られて、へ行くといふ故山へでも歸つた様な氣がするこの地の方言を紹介しやう

走 る (バシル) 恐 ろ し (コハイゾー)

耕 す (ウナウ) 大 き い (イカイ又デカイ)

椎 茸 (キノコ) い や な 人 (イヤナテハイ)

妻 (ヨメツコ) 午 后 の 間 食 (ヨージヤ)

我 家 (オラトコ) 左 様 で せ う (ソージラ)

父 (トツチャン) 小 さ い (コマイ)

堤夕月君へ

秋 風 生



高く澄んでコバルトの東空にクツキリとその山なみを見せた駒ヶ嶽の頂きにはもう白いものがやつて來ました。

周囲の雑木林には紅い葉や黄色い葉がポツポツ見ゆる様になりました。

九月も半ばと云ふに木曾谷はもうすっかり秋です。

今日は日曜でもあり且つ幾日も降りつゞけて居た雨も久しぶり霽れたので裏の山へのぼつて見ました。

初秋の山は流石に清澄なそれは何とも云はれないゆつたりとした気分を興へてくれました、愛も憎しみも、毀譽褒貶も、何にもない、あるがまゝなる自然の山！ 元來山の好きな私にとつて、秋の山と言へばたまらなくなつかしい、心のふるさつです。山の頂きの樹の根に腰をおろして、麓を通る汽車を眺めて、その汽車に乗つて居る様々な人のことを想像して、人生の旅つて、やつぱりあの汽車の乗り合ひの様なあはたしいものだ、殆んど無關心でわいわい云つて居る間に、時は、汽車は、用捨なく進んで遂に行く處まで行つてしまふ、とそんなことを思つたり。

眼下に展けた町の家並を眺めて、あんなに町は平靜に見えて居るけれ共、あの一つ一つの家のなかには人間の喜びや悲しみや様々な事件と變化とが行はれて居るものだなあ！と云つた様な妙にセンチメンタルな感慨に耽つたり、そのほか、様々な空想をほしいま、にしたりする。

何と云つても秋の山は、自然は、私の様な消極的な人間にとつても唯一の魂の慰安場です。

虚偽と偽善と虚榮の餘りに甚だしい現在の社會はたまらない、魂

よりはむしろ形式を重んずるが好まうすべらな現代の人々との交りには些の興味も起らなければ感激も起らない。何時もなつかしいのはやつぱり自然ばかりだ。私は今の「愛されぬは不幸なり、愛することの出来ぬは猶更不幸なり」と云ふ蘆花の言葉や「世の中に只一つの勇氣がある、それはたゞあるがまゝ、に人生を視、而して、それを愛することだ」と云つたロマンローランの言葉をなごを思ひ出して獨りで靜かに考へて居ます。

あなたの御手紙にありました信仰についてのお話しね、あ、したことなども要するに人間がその魂にハットする程大きな感激を受けた時とか、或は自己と云ふもの、うちに大なる缺陷のあるとを眞に自覺した時とか、又は大きな苦しみをぬいた様な場合にのみ初めて得られるものであつて平々凡々に何の感激もなく暮らして居る普通一般の人々、即ち私共などには到底得られるものでないと云ふ様な氣がしますね、それにつけても私はあの賀川豊彦氏や京都の一燈園主や倉田百三氏などのことを思ひ起して、人間もそれ程にまでなり得るものかと一種異様な感じがします。

殊に今年の春N市で賀川氏の口から直接に信仰の話や、神戸の貧民巷に於ける氏の生活振りや、夫人の氏に對する尊き理解などを聞いた私は今でも時々それを思ひ出して涙の出る様な感激におそはれることがあります

余りに長くなりましたからこれで筆を擱きます

觀楓、燒鳥と云ふこの谷にふさはしい秋の楽しみももう眼の前に迫つて來ました。

冥想と思索の秋！ 南國に漂泊ふ多感なる君の感興は如何ですか
さようなら 一九二一、九、一八



龍 峯

しつかりやれ

しつかりやれしつかりやらなくてはならぬこんな自然の叫びを何時も腹のどん底から眞に呼び起すやつぱしおれにも人並の努力心はある、功名心があるおれは偉らくなるに違いない見て居れ今だに今きつと偉くなるぞんと自惚があるこの自惚が頼母しいのだ

考へ過ぎるな

おまへはあまり物事を考へ過ぎるで駄目だ最つと大きくなれ人がおまへを笑ふともおまへは自分に自ら笑ふな。やれ若い時だなければ駄目だちようごたまへの精神は老人の様だ老人の様にされて居るのだ、眞實にさうだか僕は今からやれるだけやつて見るそれがよい

泣くな

物質の缺乏に泣いて居る自分の貧弱に泣いて居るそこで泣いて居るは唯だ下校の生徒ですおまへは總べてに弱い早やおまへは何物

かに負けて居りはせぬか神は君の力を試して居るのだ大事な所は此だ立派に立てやれ後にはおれが居るではないか

おのれ金の奴

貴様はおれを馬鹿にして居るおのれ金の奴常に自分を屈伏さして居やがる何にくそおのれ如きに自分の大事な物まで奪はれたまるもかおのれが百万圓でおれに向ふともおれには骨のある一つの腕があるおのれに勝る力があるのだ見事やるならやつて見ろ一番これから肌ぬいでおれの力のある所を見せてくれんおのれを屈伏せしめた時はおれはおまへを踏盤にして寶を見事に取つてくれるに

斯くなるは至當

おれだつて一匹の人間だもの努力によつて大臣になつて見る位は出来るさ小さい乍ら大臣になる迄の資格の素質は持つて居るからな。そうだから斯くなるのが君の至當さ。

おまへ何物だ

おまへは何者だ世の中に押しも押されぬ人間さでは偉らくなる氣かい、そりやをうさ偉らくななくて堪まるものかではおまへに問ふおまへは腦は確かい體質はあるかい、大丈夫腦力だて人並あるはい體質だつてこんなものだけや君は偉いさて金はあるかい金はないそれでは駄目だ世の中の落伍者だえへんそんな奴は足か手のない奴だおれにはそんな寢言はきかないぞ



寂の姿

萩野蘆江

しのびやかに来た秋そつと来た秋がもうたけなはなになった
愈々高く益々深く紺碧に冴へる大空の廣々さにも中空に浮動す
る白雲にも風の接吻に打ち顛ふボブラの梢にもいち早く凋落を見
せた梧葉の一片にも友に離れた孤雁の悲しげなるにも夜毎の草叢
に細り行く虫の音色にも秋来てふ思ひの露はに感せらるゝ様なな
つた

満目蕭條の秋！ 秋そのものは寂の一語に表現しつくされて居
る

總てに寂より離れて解し得られない秋の殊に寂しきは雨である
バラバラと板屋根打つて去る時雨はまだしもントシトと夜にかけ
て五月雨を思はせる雨こそ寂しさ心細さの限りである更くるに従
ひ餘りに明瞭に耳朶打つ雨の語らひをたゞ一人ポツネンと聴く深
夜の寂、蕉翁が

野分して盃に雨を聞く夜哉

草庵の夜更けに彼が嘆じた寂味とこの夜この時吾が胸に響く雨
とどこにいか程の差が見出し得やうか？

硝子を隔て、覗へば天地一黒の間にクツキリ浮び出る吾が顔……

とする。その結果はたゞ魂の荒ぶばかりである。この自己的内的
生命のさざしはそんな安價な僥倖で忘れ得る程弱いものではない
もつともつと深い所に強い根柢がある。

永遠の過去から現在に至る迄に生を保持せんがために蔽はれた靈
明の嘆きであり有限の生より永生の道を求めんとする切なる叫び
であり不自然な現在より自然に歸らんとする聲であるいろ／＼の
事で痛ましくも傷けられた心が血塗れになり乍らも尙自然へ本性
へと叫ぶ悲痛なる聲であるけれどもこの魂の叫びは何人もが聞き
得ると言ふものではない。無自覺の幸福より自覺した不幸へと辿
り行く人へのみ感じらるべきものである。彼の淺薄な人生觀に立
脚し皮相な思想に支配せられて外部活動にのみ執着して居る人々
には華美麗艶しかも毒々しい眩惑する様な色彩に彩られた世界を
憧憬して形名的生活に尊貴なる一生を人生の道化役者として放策
の間に終る。

斯うした人々には淺薄な喜悅と輕浮な快樂があるのみで深い内省
がない心の底の底より溢れ出づる感謝歡喜はない。

果して是等の人々が恵まれたる人々であらうか。人々はこの世に
生を享けた瞬間から悲痛な運命の萌しを認める。

榮光の輝く所其處には灰色の零落がある。

生の後には恐ろしく冷たいそして眞黒な死が覗いて居る。華かな
歡喜悅樂の背後には重々しい寂寥が犇々と迫つて居る。

寂しさは過ぎて物凄き感がする

秋の自然は寂そのもの、姿である落魄の旅路さすらふ人の兒の
哀思をそゝるやまた切なるものがあらう。



生きるといふ事

門田生

眞に生きんとする人にとつては生きると言ふ事それは痛ましくも
悲しく淋しいものである人生とは悲痛より悲痛への行旅ではある
まいか。

春の夜の甘美な情緒に陶然と酔へる時ヒラ／＼と散る花片の熱せ
る頬を撫して地に委するを見る時其處に花の悲痛なる運命と人生
のはかさを感ずる春宵臘月の柔かい光りを身に浴びて瑠璃の盃を
手にし美姫を侍らせて弦歌さんざめく上に暫しは眞なる自己の聲
を聞かない。しかしやがて歡樂にも倦き云ひ難い哀愁の襲ふ時樂
聲の杜絶へて寂寞となつた一刹那恍惚から醒めた時重い憂愁に囚
はれはしないか。

この憂愁は人生の眞なる意義に到達せんとする努力渴望より來た
る聲である。

人々の多くは悲痛を恐れるとして逃僻して居る。若し内から眞な
る聲が叫びかけた時その憂愁を無理にも押隠して酒で誤間化さう

人々はそれ等を知り過ぎる程知つて居る。そしてそれ等のものに
見舞はれる事を恐れるしかし何處まで自分自身を欺瞞せんとする
のか、而して有限の死に對して永久の不死を願ひ限りある榮光歡
樂に向つて離れ難き執着を感じる。だが結局歸省する所は一であ
る。人は歲月の谷間へと下る。下りきつた所其處には永生？ 將又
死が控へて居るといふ事を知り乍らも尙絶ち難き愛着に煩はされ
て居る物質的主義に生くる者で死を自覺したものが尙生を希ふ是
非痛の極である。更に又逃れんとして悶々より一層暗黒な世界へ
彷徨ひ行くとは。世間並の安價な快樂自己欺瞞其處に眞なる慰安
がありはしない。

だが淋しい哀音の綴り泣きを耳にして倅垂な夢から愕然と醒めた
時今まで知らなかつた世界が展開して人生の嚴肅なる一面に觸れ
る。そして周圍を心靜かに見廻した時限りない寂しさと淨化され
た生に對する執着を感じる。この嚴肅な寂寥を味得しない人は生
れたるが故に生きるといふに止まつて其の歩み行く道にはしつか
りとした自信がなく其の生が無意味に終る、しかしこの人間らし
い淋しさといふものは實に淋しいものであるだかそれをじつと抱
きしめ堪へ忍んで自己内部の聲に耳傾けつ、進む人が向上の路
を辿り得る人である。悲痛は人生である。此の悲痛を甘受して靜
かに自分の生を見守つて悲痛の底に存在する人生の眞意義を把握
せんとする其處に生と力との價値が有りはしないか。王者の尊貴

富者の富をもつてすらこの悲痛より免れ得ないのみならず人々の
隨喜渴仰する其等權威や富は内的生命の聲を遮りてより以上に光
りを妨げ煩悶せしめる金世界を征服する大英雄を以てしても自己
の内的生命の反抗を征し得ない。

他國を征服して勝利の歡びに得々として凱歌を奏す時その裏に哭
する幾萬の犠牲者を思ふ時限り無き悔恨の情は次第に英雄の心を
して悲哀に導くこれたゞに犠牲者に謝する單なる悔ではない。も
つともつと深い意義がある。王侯富者の權威と富は榮光歡喜の象
徴である。人々の多くは果敢ない是等を得んとして足掻き苦しむ
されど悦樂には限りがある、變化がある無始無終であるべき筈は
絶對にない。あらゆる歡樂を意のままに貪り盡した時寂寥の影が
聲もなく王者を包む。この時重々しい悲痛は彼は靜かに押し寄せ
て老ひ行く春の暗夜落花と共に鐘の音に送られて見も知らぬ世界
に彷徨ふ様な甘い寂しさと晩秋の夕暮木枯しに飛ぶ落葉と共に自
然に歸る様な透徹した淋しさに囚はれる茲に於て初めて人間らし
い感じに何とも言ひ難い清い涙が止度なく流れる涙の下から新ら
しい自己が生れるそして周圍を見廻す度にあまりに不自由な事を
感じるがそれを自分の力で何うとも爲し得ない事を思ふと悲痛な
る淋しい心は敬虔な祈りに變る

人生は悲痛より悲痛への旅である。
ロマンローランは言ふ「人生は憂愁なり」と



淋しい事のいろく

人間といふものは一人と一人との場合にはその二人に共通した点
のみ靈交して恰もこの世には二人以外にはお互に理解した者がな
い様に感じる、しかしこの二人を各々別な人々の中へ入れる時其
處でも共鳴した人を見出す。そして初めの二人は心的状態に於て
全然路傍の人である場合が少くない。

矢張人間は一人生れて一人淋しく生き一人靜か自然へ歸るのみだ
□ — □ — □ — □ — □ — □
血肉をもつて連がつたお互ひが結び合ふ事の出来ぬのは絶え難い
淋しさである。

自己の眞なる聲は右へといふ。併し周圍の肉親は左へといふ。左
へ行くのは眞に生きんとする其の者にとつては死である。自分に
死を迫るものは正しく敵である。しかしお互に憎み得ないで本能
的の愛に結ばれ重い幕を隔て、お互ひの嘆き喘ぐ聲を聞く。しかも
それは何うとも爲し得ない時第三者にも涙ぐまれる程痛ましく淋
しい事である
□ — □ — □ — □ — □ — □

時々人に呼びかけたかと思ふ事がある。
「あなたの心は満ちて居ますか。何を欲してゐますか」とだがそ

の時一つの心が呼ぶ何といふ借越な心だ。お前の愛は極めて弱い
皮相的なのだ、人を傷けこそすれ決して、結果を齎さなす。

人の運命を正しくほんとうに考へた事がある、よしお前の全部を
信んじて無條件でお前の魂の中に飛び込んでくる人があつてもお
前は靜かに押返して背を向けて黙し祈るより外はない。
お前が人に働きかけ様とする願望はこの世の美しいのを知らせ様
とするよりもお前自身が極めて貴ひ度いといふエゴイズムの欲望
を愛といふ美しい名で巧に誤間化して居るのだ少しは人間らしく
恥を知れ」と

自分はこの聲を聞くとひとりでに頭が下る涙が滲む、多くの人々
は傷き損ねられた心を持つてたつた一つのを血眼になつて探
して居る、それは自己の魂を安心して預けられる人生の安樂所で
ある所の魂と魂との結び合ふ事によつてのみ感じ得る、ふるへる
様な微妙な歡びである

自分が手を出さんにはあまりに我が愛が不純であり貧弱だ。人々
が苦しい運命を負つて蒼い顔をしてどぼく行くのを黙つて見詰
めて共に苦しみながら何うとも出来ないのも又淋しい事である。



手紙の一節

テ イ 生

Y君其後は御無沙汰でした、大した仕事とてないけれど共どういふ

ものか筆を取る氣にはなれなかつた、然し其の間實に無限の感
なき能はずだ
俺達はお互に生れて來た甲斐のあるライフを送りたいではないか
どうもお互の生活には無駄が多くて困つたものだ

Y君相變らずお盛で結構だね、緊張した精力主義の君の働き振り
には何時ながら羨ますには居られない。
俺達親のすねをかちつて居るもの、君から卑怯呼ばりをされると
はさてもく未法の世なる哉だ、併し君俺達だつて皆が皆そんな
に遊んでばかり居りやしないよ、異なつた立場から眺めるとそん
なに詰らなく見ゆるか知らん、立場が異ると言つて一も二もなく
コナシ附ると云ふ事はチト酷ではなからうか、自分としては君
の言ふ所になるべく尊重して決して全部は斥けて居ない積りだ。

君の何時も口にする社會組織の不完全よりも自分とても認めて居
る罪惡は其の社會組織の不完全より來ると云ふ、それもまあ宜い
それから人の自覺によりて社會的生活が定まるのでなくて、社會
的生活によりて自覺が定まるのだ、斯う君は常に言ふて居るがそ
れは理の一端であつて其の全部ではないのでなからうか？

個人と社會、斯うした大きな問題は到底俺達の思ひを巡らす事
は出来ない。
お、知らず知らず軌を逸してしまつた。

「生れて甲斐のあるライフ」そうだ之が今俺達が一番考ふべき問

題だ、今の世の人々は物質文明の弊に中毒して居る、現代の缺陷は此處である、此の缺点ある世を完全なるものに仕上げ様じやないかY君、其處に俺達の使命がありそれが俺達の生命じやあるまいか。

もうそろそろ木曾も紅葉で奇麗になる一度遊びに来たまへ失敬。



吾等が天職

在學生 春香生

私は今より二十年前中部地方の一半島の農家に孤々の聲をあげた者である、思ひ出せば今より約七八年昔の事である、御爺さんにつれられて約二十丁ばかり隔だつて居るあの鎮守の森の八幡宮に参詣に行つた。

御宮には彫刻や額などが澤山つるしてあつた、なんだか御宮程はあつて、吾等が幼き胸にもなんとなく畏れ多い様な気がした、御爺さんは小さな徳利を神前に捧げてそして私と一緒に又家へ歸つて来て八幡さまの御話や源頼朝などの御話しをくれた。

その時の私の心？ 年こそは十一、二の幼児とは雖もよくそれをのみ込む事が出来て今尚ほ記憶に残つて居る事である。

御爺さんの云ふには御前へはこんな山の中で生れた者だからどうしてもこゝろいふ山の中に生活して行かねばならないと何時もく云つて聞かせられた、その御蔭か知らぬがひく／＼何時の間にか

山の人になつてしまつた、なんと愉快な事だらう、それ大自然に立脚して朝な夕なのあの鳥の聲虫の音！秋の夕ぐれ雑木林の小路を行くと赤や黄に輝いて居る木の葉がきら／＼と光り、栗の實が落ちる樹々の間から谷間の稲田がかすかに見えて黄金の浪がたよつて居る、鳥でさへ馬鹿にする案山子の着物が秋風にゆられてなんとなく快感を覺えずには居られない「それ山林に自由存す」だ全くそうだ！吾等は此の大自然中に圍まれて生活して行くものだ、これは我等の天職である、なんとたのもしい事だらう(九、二七日)

お断り此文前方に入るべかりしも原稿遅参に付編入悪しからず



ペテロ大帝と脱走兵

吉川真夫

第一場(和蘭サラダム一造船所にて)

ペテロ皇帝(大工に變装し)オイ俺が此處を立去る前にお前に俺の秘密を話そうよ

スタンミツツ じゃあお前は何處かへ行かふと思つて居るのか
ペテロ うん俺はもう國を出て十二月だ、そして船の建造に就ては相當の智識を得た、それが又自分が此處へ來た目的さ、だからもう國へ歸るべき時だ

スタン 吾々の主人ヴァンブロックはお前が居なくなつたら悲むだろう、此の工場では一番勤勉なお前だもの！そして！俺は

ごんなにつまらん寂しい者になるだろうと云ふのは！ペテロよ

！俺はお前が好きなのだ

ペテロ おれもお前は好きさ

スタン ペテロよおれは思ひ切ておれの秘密を話そうか知ら

ペテロ 何だど！大丈夫何も恥づる様な事は爲た事はないだろう

スタン いや辱る様な事ぢやない、然しおれは可成に恐れて居る

のだ、ぢや云はうかおれはモスコで生れた者だ

ペテロ そうか、モスコで生れたからとて何も罪はない、加之

其事が何もお前の缺点と云ふ譯でなしさ

スタン そうぢやない、まあ聞け事の起りは斯うだ、或る日一軍

隊がおれの生れた家近くに駐軍した、其指揮官は直ちに我輩に

目を付けたとして拙者の風采の堂々たるのに驚愕したまではよ

いがおれを其軍隊の一員にと要求した

おれは拒絶しようとした、然し彼の曰くあのペテロ皇帝は(お

前と同名だな)特別におれに對して役目があるのだから若し拒

絶したが最後犯罪者と見做すと云つて直ちに其指揮官は鐵砲を

我輩の肩に載せて伴れ去つた

ペテロ ね、お前は軍籍にあつたのだ！

スタン 軍籍！そりやまわそう云はざるを得ない、でおれはいつ

も獨者で自分勝手に又意に反した様な命令にはとても耐ゆる事が出来なかつた

ペテロ(横を向いて) そーだ！そーだ！此奴は逃亡兵だ！

スタン とは云へおれは久らく堪へ忍んだ、遂に十二月の寒い朝が來た、丁度夜中の三時だつた心持ちの良い温い睡りの最中に叩き起され吹き荒むあの物寂しい壘壁の一角に立つて衛兵勤務をやらせられたのだあの雪中に、余り慘酷じやないか

ペテロ お前は温い床の中に居たかつたに違いない充分察する

スタン おれは温くして居る事が出来ないから鐵砲を投げ出して置いて歩き始めた、それから走り出した、それから……………お前は本統に思ふかどうか？……………

走り續けて止まつて見たら前哨から五リグも離れて居た

ペテロ そうかぢや逃亡兵だ

スタン 逃亡兵？ お前は此れを逃亡兵呼はりするのか？ そう

だ矢ッ張考へて見れば逃亡兵と云つても不思議はない

ペテロ お前承知だらうね若し見付つた時には銃殺される事は？

スタン 其んな考へも持て居る實は其時そう思つた、それから、

自分の位置から五リグ位離れたと云許で殺されるのも割に合

はないと思つてサラダム指して逃げた、そして此處に居る様な譯だ

ペテロ 是は困た事だ實際！そして若し彼の市長が通知を受けた

時には……まあともあれお前の秘密は大丈夫おれが引受ける
スタン おれはお前を疑はない、と云ふのはお前も同じ様な困窮
者ぢやないかと思ふ

ペテロ おれが？ 馬鹿な

スタン 兎に角お前には全く不思議な事がある、然ながらまあお
れの秘密は守るね？

ペテロ オー！大丈夫

スタン 若し露皇帝の配下の耳へでも入るものなら大變困るから
ね

ペテロ 露皇帝ペテロはそれに就ては今彼が知つて居るより以上
は知らないだろうよ、おれの引受るからには、だから慣れるな
噂に依れば皇帝自身が自分の位置から離れるのが好きだと云ふ
事だ

スタン

ハ、ー皇帝が？

ちや何もおれに逃亡したからとして叱言を云ふ資格はない……！
ね？

ペテロ とは云へお前は警戒しなくちやいかん、噂では彼の如何
なる事でも發見する手段があるぞーだ、余り高を括り過るな

スタン ごつこい皇帝は露西亞にあり我輩は和蘭にあり、お前さ
へ告げ口しなけれや危険は絶對になし

ペテロ オイオイおれを叛逆人にするのか？

生きて居る中は私もしたくないから

スタン 誰か戸を叩いて居ます、お待ちなさいお母さん私！隠れ
ますから

(ペテロ大帝變裝にて入り来る)

ペテロ 何だいオイ！仲間！隠るんぢやないよ！襖の蔭から出て
おいでよ！おれが通る時窓からお前を見たよ？

スタン まさか？ ペテロだ おれの昔馴染だ 握手！愛人 お
前モスコーに居るとは如何した譯だい…… 此んな内地で造船
でもあるまい

ペテロ いやそれぢやないセントピーターズブルグでさ皇帝が造
られつ、ある新都會でさ

スタン 皇帝は今モスコーだそうだね

ペテロ そう、帝は今朝此の街を通られた

スタン そうおれも聞た、然しおれは拜顔しなかつた、時にオイ
ペテロ、如何しておれがわかつた

ペテロ うん、偶然お前のお母さんの表札を見たので思い付いた
んた宮殿へ歸てから

スタン 宮殿……

ペテロ そうさおれはいつも泊る所を宮殿と云ふのだ、それがお
れの癖なんだから

スタン お前は妙な面白い奴だつたからな

スタン そうぢやないペテロ、然し若しおれが逃亡兵として此處
で引上げられる様な事があれば…… おれが自分の秘密を話し
たのはお前一人だからね

ペテロ 皇帝位なんだい！

スタン そう云ふ彼は立派な人間だ、ペテロ大帝だ、若しお前が
彼の事を悪く云ふならおれは承知しない

ペテロ オー！そうか！そんな譯ならもう何も云ふまい

第二場

スタン ヒツツ さあお母さん私はモスコーにはもううろろして
は居られません、私は御別れて和蘭へ歸つて又仕事を爲なく
ちやなりません、命がけて私は歸らなければならぬです

スタン ミツツの母 あ、！若しお前が逃亡などしなかつたら今頃
は伍長だものぞ！

スタン まあお母さん私は私の意志に反して兵士にされました、
そして私は軍人生活を見れば見る程其生活が嫌になつたのです
貧い日雇大工ではありますが私は今少くとも自由で獨立であり
ます

若しあなたが私と和蘭へ御出でになるなら私の給金は御委せし
ますし家庭の管理も御願ひしたいものです

母 私はお前の手足纏になる許りだ、お前ももう間もなく結婚も
するだらうしね、のみならず古い住家を捨て、去ると云ふ事は

ペテロ 今云つた通りスタンミツツ夫人はおれの昔仲間の者の母
か伯母に違いないと思つて此んな風をして來たのだ

スタン ハ、確かに變裝だ紳士の變裝だよ、ペテロ何處で其んな
に良い着物を見付けて來た……

ペテロ 差控へよ是れ！

スタン オイそんな風な冗談はもう云ふな確かに半分おれを嚇か
して居るね恐ろしい調子で差控へよ！なんて

然し乍らそれで譯が解つた感謝する。お前の昔友達の事を尋る
事が出来ると思つて訪ねようと立止りをして窓から覗いたんだ
ね

ペテロ 嗚呼！スタンミツツ一緒になつてヴランブロックの造船
所で澤山の材木を切つたものだ

スタン 随分やつたな！ どうしておれとサラダムへ歸らないの
だ……

ペテロ おれはセントピーターズブルグの方が良い賃錢になる
スタン 若しおれが自分の位置から遠く歩いたと云ふ廉で調べら
れると云ふ心配さへなかつたらお前と一緒にスブルグへ行くの
だがな

ペテロ 冒険を犯して此處へ戻て來るとはどうした譯かい……
スタン まあ良く聞て呉れ此の老母はひどくおれに會ひたがつた
そしてのみならず此處に戀人が居るのだ。ペテロ笑ちやいけな

いよ！そしておれを待つて居たのだ
だが哀な事には彼女を伴れて一緒に歸ると云ふ事は貧乏でとて
も出来ない。然し來年は若し幸運が続いたら歸つて來て結婚す
る心算だ

ペテロ 何若しおれが密告すれば？

おれは一寸したお金が貰ゆるな逃亡兵を摘發したと云ふ廉で
スタン 其問題に就ては冗談御斷り、老母がびつくりする、ペテ
ロ オイおれはお前に會て非常に嬉しい……ヤア！……門口
に兵隊！ 如何したのだ！ 士官？

ペテロ 失敬、お前と別れなげりやならぬ

ペテロ 止め！ おれは本統の事を云ふ、彼等は皆おれの友達だ
スタン オー！若しそんなら止まろ！

然しながら彼の一人の奴はおれの昔の指揮官にそつくりじやな
いか！

第三場

士官 陛下セントビーターズブルグからの急信にて陛下即刻の御
披見をどの事です

母 陛下！

スタン 陛下！陛下！何の心算だろう……

士官 此れ馬鹿共此の御方は皇帝なる事を知らんのか！

スタン 何！エー！此が……馬鹿な……

う云へば思出す事がある、丁度和蘭を發つ時に評判だつたが露
國皇帝は或る造船所で働いたとか云ふ事だ、ヒョットするとペ
テロが皇帝かも知れん……

ペテロ スタンミッツよお前は我が秘密を握た

スタン すればお前は……

ペテロ 帝王だ…… 起さなさいお婆さん貴女の息子男爵スタンミ
ッツは無事です

母 男爵スタンミッツ……

ペテロ 朕は彼にスブルグの造船所の監督を依頼する、まわ聽け
兩人とも明日はスブルグへ出發する様用意せよ、スタンミッツ
男爵はあの戀人をたつた今夜男爵夫人としました同伴する様、
朕は自身出席を要する用務がある左なくば停まつて結婚式に列
席する心算なれどもさあ此處に財布がある、明朝秘書官は辭令
を持ち來るべし、 さらば……

スタン オー…… ペテロ、ペテロ、陛下よ！陛下…… 私は非常な
混亂の中にあります

母 膝まづきなさい、スタンミッツ男爵スタンミッツよ お坐り
なされ

スタン 何……吾が昔の友人ペテロに！

彼どいつも相撲を取つた、お怒し下さい陛下……友人ペテロ！
ペテロ陛下私は信ずる事が出来ません、總てが夢の様な氣がし

此は私の友人のペテロです

士官 膝まづけペテロ大帝露國皇帝だぞ阿呆者……

母 オー……陛下陛下……此の悴を殺し給ふ悴は何も知りませんでし
た知りませんでした、只一人の悴です 鞭打つともどうか命は
御助け下され……

スタン お母さん冗談云ひなさるな此は只ペテロの惡戯です、ハ
、ハ、ハ、
なかなか味をやるね。そしてお前の讀んで居るのが急信かい……
士官 馬鹿者…… 何故陛下に差出口する……

スタン またもおれを馬鹿呼ばりする、無遠慮だとは思はぬのか
ペテロお前の友人を外へほうり出しても拘はないだらうね

士官 ハー！よく見たら思ひ出したぞ、オイ皆で此奴を捕へよ！
彼奴は逃亡兵だ

スタン おれも終だ…… ペテロは恰も何事も起らないかの如くに
すまじ込んで居る

母 私は途方に暮れましたどうか士官様哀な悴を御許し下さい
士官 彼は軍法會議に廻され銃殺されなくちやならん

母 オー……神様よ…… どうか私の悴の、助る様に

ペテロ オイ士官其囚人には特別に役目がある彼を放してやれ
士官 陛下の御意志は絶對的です

スタン(横を向いて)また陛下……一體全體如何したんだらう……そ

ます

ペテロ ハハ…… 左様ならスタンミッツ…… 吾々は又明朝會ふ、
妻君に宜しく(退場)

スタン 士官君、君の言つた軍法會議も執行されそうもないね
士官 男爵私は閣下の従僕であります

男爵よ若し機あらば私に就て陛下に然るべくおどりをなを御願
します

閣下 さらば 終り 一九二一、九、三〇



柔道の眞價

小貫生

本年は當校の二十周年に相當するので此の記念號に何か書て呉れ
どの事で御座いましたから毎月の林友にも御無沙汰のみして居り
ますから一寸自分の思ふた當校の柔道部やら柔道の眞價を書て見
て幸にも皆様の御参考にも成りましたならば光榮に存じます。自
分は大正六年の十月に當校に赴任して體操と柔道を兼務しました
來て見ますると柔道は七宮先生の御骨折で初めたばかりで道場も
講堂の一部に疊を敷て是に當てられ柔道衣も上着ばかり七八枚し
かありませんでした是れでどうして柔道を稽古して居るのかと中
等學校としてはあまりに貧弱なのに驚きました、其れから生徒を
集めて柔道とは如何なるものかと言ふ事に付て話しました。すぐ

に稽古を始めました處唯一人しか生徒が出て来ません其れが伊東近良君でした君は勝負と言ふのみで一向駄目でしたし然し仲々強かつたのです其の後色々の暇を見ては柔道を説明し成る可く多く稽古する様に務めました處二十三人出る様に成りましたが何分設備が無いので翌年度の豫算を少し多く戴て疊の敷を増し柔道衣も多くしました其の年の五月に自分が京都武徳會へ出演する爲め伊東君をも一所につれて行きました初めての勝負にあの伊東君も大分ドキドキして居る様に見受けましたが幸ひにも二人共二本取て歸校したのであります此外縣下聯合マーチにも出演する學校内にも進級試合をやつたりして益々當校の柔道部は盛んになつたのであります私が來てから卒業生を四回送りましたが其内一級二名二級八名三級十名四級五級五十名を出しました道場の疊も三十八枚柔道衣も上下二十四枚も揃へてあります何分にも當校の生徒は實習やら歳の關係もある事か柔道をあまり好まん様に見受けられます此の度幸に此の記念號の一部を穢し此の道を教へる私が蛇足ながら此の眞價の一端を述べ見やうと思ひます

からざる必須の體育法でいさ、かも疑問とする點はない、勿論幼年青年及體質等により多少の願慮は何事にも必要なことで其緩急の良否は教授者の責在であると思はれる



科學文明と信仰

尾 花

うづ高く積まれた古雑誌の中から一冊を抜き取つて何心なく頁をめくると「消えざるの光りへ」といふ三號活字が目にとまつたそれにはこんなことか書いてあつた

英國の有名なる一教師ホルトン博士は次のやうな事をいつた「世界は理智の氷に冷却され人類の魂は凍れるへて居る今や情意の火を燃やし枯れんとする魂の芽生へをせなければならぬ時だ、もしこの地上に情意の薪を投げて信仰の火を黙する人あらばそれは神の計畫を行ふものである」と誠に深い意味のこもつた言葉であると思ふ、人は現代を科學の世紀だといふその科學の世紀は今頂上に達して居る理智文明はその絶頂に迄登りついて居るのだ、かの歐洲戦争は科學文明が産んだいたづら兒であつた科學文明を母として居た戦は理智的戦争と名づくべきであらう、その理智的戦争をひきおこした科學文明について少しく考察して見やう科學の任務は研究と發明である時々刻々と發明發明を産んではは種々雑多

も其同化に缺點があれば却て病を醸す場合が多い、されば體育には同化力の最も強きものを最として撰擇せなければならぬ然るに現代の體育法が益々退歩的のものを好む爲め活氣に乏しく氣風一般に浮浪性に急轉した事は争はれない現象である體育の爲めに揺る折角の運動も同化の目的に合しなれば意義をなさぬに單に動搖するに過ぎないとして肝心の或るものを遂に忘却して仕舞う事となる。陸軍では幼年學校生徒には専ら柔道を士官候補生には劍道を課しつゝ、あり海軍では殊に柔道を盛にして居る其他中等學校にては正課に加へた學校は實に到る處で然べき事と思ふかくて大正九年に柔道家を庇護する趣旨で柔道整備術なるものを許可された總べて武術は哲學上の眞理を自得する即ち武術の極意は禪に合すると稱されて居る平素の進退皆保全的で同化作用の彈々たる活力は武士道となり日本魂を形成するのである此處に至つて初めて科學の眞價が著はれ殊に柔道は四肢百骸を活動させ同化作用の最も大なる良體育法で武藝百般は言ふに及ばず人世を有意義にせしむる基礎をなすもので之が直接に肉體に及ぼすものを示せば胸膜肋膜肺神經衰弱等の諸症を治した實例が多い唯恨むらくは之を講せざる者に對し心理状態を示すことが出来ぬ事である日本の武術は斯く同化作用の妙があり古來神の字を流派の冠詞とし神道何々流天神何々流鹿島何々流と銘名し又一心法歸心法と稱して其の根源を教授の一科の如くにして居る然し柔道は青年に取りて缺くべ

の機械がうづ高く積み上げられ人をして驚歎の眼をみはらしめるのであるそして文明生活の需要品の全部を容易に迅速に機械で製作するのである昔の人達が數十人もかゝつて孜々として働いて一日やつと生産して居た仕事も今日の機械の装置によればよく一人の少女が數時間にしてそれに堪へ得るのである現今の紡績工場などの仕事もそれである、そうした驚くべき生産力を持つた機械的文明が世界人類に貢獻した事は多大であつてこれを嘆賞する事は誰一人として躊躇するものはあるまいが然しその落ち入り安き弊にしてその文明は人を機械的に扱ひ物質的に遇するに至るそれは寧ろ機械に使驅されて居る人間が機械と化し物質的となるといつた方が適當かも知れぬこれは一面免れることの出来ない現象である、そこに冷たい氷があつて人の尊い魂を凍結するのであらうだから凍れた魂をあた、める薪は要求されているのである

孜々として額に神聖な勞動の汗と膏を搾つて働く人の氣分と手のさき足の先で機械をあやつて仕事する人の氣分とは全く違ふのである綠滴る田舎の自然の懐のなかに土の香りにひたりつゝ、せつせと働く人の感情が卒直で温和でのんびりして理想的で精神的で家庭的であるに反して齒車の轆りあはたしい工場の中ではこりにまみれつゝ、勞作する人は神經質的でこせんとして現實的で個人的でまた物質的である前者は肉体を靈化し、しんみりした生活の中に靈の飛躍がゆる後者は尊い魂が肉に包まれその天真を失ひその

統一を傷けられれば、しい装ひの中に靈が光りを失はんとして居る、かうした機械的文明所謂都會生活の闇黒面が切實に近代の人に味はれるやうになつたこれが現代文明の悲劇である
人を機械視する、物質を以て人格を賣買するこれが科學文明の墮落である科學文明の絶頂は科學文明の墮落の深淵である
嘗てホルトン博士が言つた

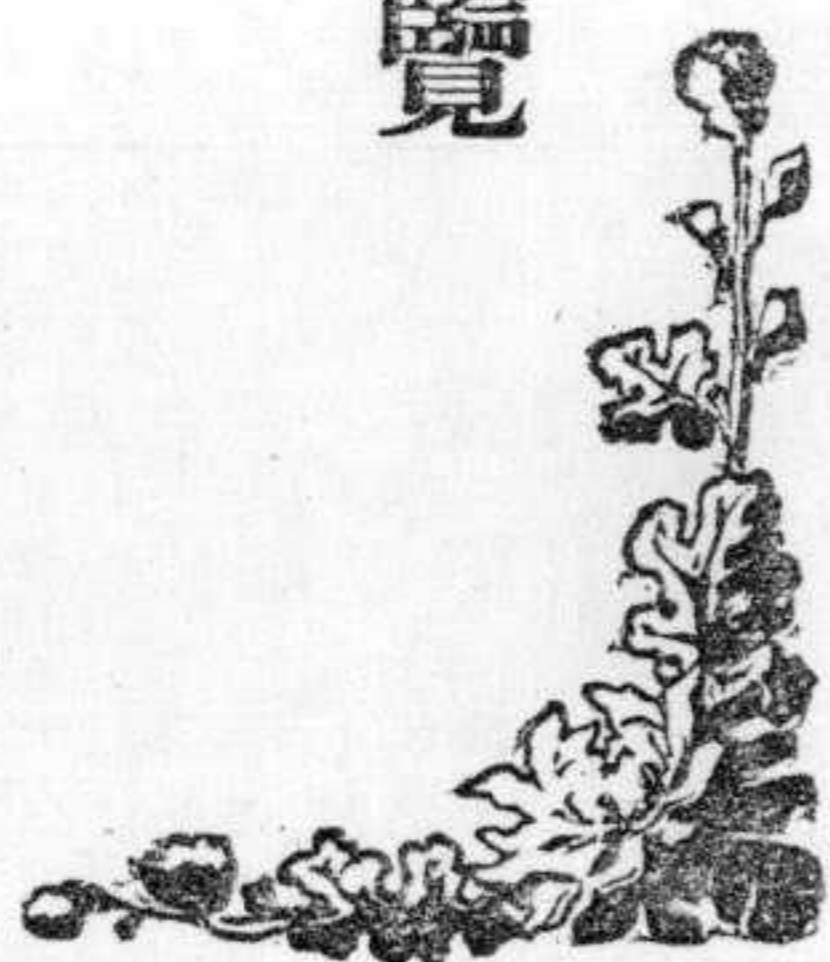
「科學を偏重し理智にのみ奉仕する國家は極端な國家主義となり軍國主義となり、果ては恐るべき侵略主義の國となるその代表者は獨逸であつた」と科學の崇拜、理智の讚美力の追及これ等がかの獨逸魂を培つた肥料であつた

ビスマーク、モルトク等の鐵血主義フキヒラの力の哲學ニイチエの超人主義これらは獨逸魂の權化で反デモクラチクスの柱であつた、而してこの三つの柱を結束し統一したものがカイゼル、イルヘルム二世であらう彼は強力の權化進撃の神慘忍の惡魔であつた彼の「汎獨主義の許に世界を統一するは朕の使命なりこの大使命の前には神の外恐るべきものなし」との天の神に對する誓ひの言葉はすなはち人類に對する惡魔の咆であつたのだ、この宣言は直ちに世界を焰々たる地獄に化した八百萬の生靈は暗され三千萬のはらからは傷けられ四千萬の財貨と八千艘の船舶とは烏有に歸せられその慘劇は歴史あつて以來のものであつた
眞に神ありや……とはヨーロッパの到る所に起り來つて居る疑ひ

たさうしてその片言雙句は人を魅了する力であつたその巨人は即カイロン大統領である、かの「汎獨主義の許に世界を統一するは朕の使命なり」といつたカイゼルのそれが惡魔の咆哮であるならばカイロン大統領の一九一七年四月二日參戰の宣言に發表した「デモクラシーの爲に世界を助けしめよ」とのそれは疲れたる人類の魂への救主の招喚の聲であつた、彼れが地上を地獄へと導いた宣言であつたならこれは大地の上にエデンの花園を建設せんとするみことのみであらう

學校要覽

(一) 沿革一斑



○明治三十三年二月西筑摩郡に郡立實業學校設立の議あり同年十月臨時郡會に於て乙種程度の山林學校設立の適切なるを認め全會一致之を可決す

○同年十月二十九日郡立乙種山林學校設立の認可を得たり

○同三十四年四月教育勅語謄本を下賜せらる

○同年四月二十日授業開始生徒六十七名西筑摩郡高等小學校廢校舎を使用す

○同年五月十五日開校式を舉行す

と呪ひの聲である、獨逸一國の生存の壇上に幾百萬の神の子が血祭りを舉げるとは豫め天地の計劃を樹てたもう神の眞意計り難し計り難き所謂神であるかも知れぬ而し目前の慘虐に信仰は破壊され神は心から去つたのであらう

神は眞にありや……一方に古き神は去つた傳統的信仰は破壊された、然し新らしき神を熱烈に求めた新らしき信仰の建設の芽生へは起つた「十字架の主は焼かれたり而して地上のカイゼルもまた共に焼かれぬ茲においてか其の灰の中より更に地上神と又靈界のカイゼルと一つになつて現れんこれはノルウェーの文豪イブセンの言葉であるこの世の終局は灰になつてその灰の中から再び新らしい人生——生氣滿ち活氣漲つた人生が生れくるといふギリシヤの古い哲學者の或る一部の思想を言つたものであらう歐州戰爭に惱み勞れたヨーロッパ人はこれに似たやうな神を求めめるものが多かつた「終末の日は近づけりされど新しき神は復活し玉ふ」とこの戰禍の灰燼の中から新らしい世界——平等と自由と正義と愛にて包まれたる世界の誕生を求め且つ信じた神はさうした世界を灰燼の中に建設するのだその灰の中に正義と自由の國を打ち建てるのが神であると信じた、斯うした新しき神を求め新らしき信仰の芽生へ期にあつて聲を勵して立つた巨人があつた彼れは大きな背景を持つて居た誰れ憚る者もなく應揚と自由の翼をばたき乍ら太平洋を渡つて講和會議の場所たるベルサイユ宮殿に現はれ

○同年五月二十一日松田力能校長に任せらる

○同年七月十九日甲種程度に變更の認可を得たり

○同年同月實業教育國庫補助法に依り同年より向ふ五ヶ年間毎年

金千二百圓宛交附の旨文部大臣より達せらる

○同年十月八日明治天皇昭憲皇太后御眞影を奉戴す

○同年十二月二十四日徴兵令第十三條及文官任用令第三條に依り

徴兵猶豫一年志願及卒業生無試験にて判任文官任用の件文部大臣より認可せらる

○同三十五年四月實習林として西筑摩郡福島町福島區有林八十三

町三段七畝二十歩を向ふ七十七ヶ年を期し郡と福島町福島區との

間に地上權を設定し地代を拂はず伐期に其の所有を折半するの

契約成立せり即ち裏山演習林並に大平山演習林これなり

○同年縣費より補助として金千五百圓三十六年度以後は毎年金二

千圓宛郡立中交附せらる、ことなれり

○同年十月十八日校友會報第一號を發刊す

○同三十七年三月第一回卒業生二十八名を出す

○同三十八年十二月長野縣會に於て明治三十九年より縣立に變更

の件可決す

○同三十九年二月十日縣立變更の件文部大臣より認可を得たり

○同年二月十六日縣令第八號を以て學則を改正し四月一日より施

行す

- 同四十年九月十三日江畑猷之允校長に任せらる
- 同四十一年十二月長野縣通縣令に於て四十二年度より向ふ四年間繼續事業として經費六萬六千七百六十三圓三十五錢を以て新築工事の件を可決す
- 同四十三年二月五日文部省告示第十七號を以て長野縣立甲種木曾山林學校の位置を西筑摩郡新開村に變更の件認可せらる
- 同年十月二十五日本校創立拾週年に相當するを以て記念として校友會雜誌を毎月一回發行の月刊となし其の第十二號を出す
- 同四十四年十一月長野縣立甲種木曾山林學校を長野縣立木曾山林學校と改稱の件文部大臣の認可を得たり
- 同四十五年四月福島町所在の實習地の一部を返却し新たに新築校舍に接續の土地畑山林原野六筆合計四段三畝五歩を借地す
- 同年五月十日校長江畑猷之允轉職す
- 大正元年八月七日安藤時雄校長に任せらる
- 同年十月一日西筑摩郡新開村新築校舍略竣工したるを以て本日移轉をなし移轉式を舉行す
- 大正二年四月一日縣令第十八號を以て學則を改正す現行の學則これなり
- 同年四月中福島町所在の實習地殘部を返却し新たに校舍隣接地畑山林七筆合計二段四畝十歩を借地す
- 同年十月二十日新築落成式を舉行す同時に林業教育品展覽會並

- に信濃山林會總會及び同講演會を開催し盛況を以て終了す
- 同年十一月三十日新築校舍追加建物林産製造室壹棟並に附屬物置壹棟建築竣工す即ち現在の建物全部竣工を告ぐるに至れり
- 大正三年七月二十四日縣令第二十八號を以て學則第六條第七條第十四條乃至第十五條を改正す
- 同年十月二日校長安藤時雄轉職す
- 同年十月六日教諭七宮純雄安藤前校長の後を襲ひ校長に任せらる
- 大正四年十月天皇陛下御眞影奉戴
- 大正五年十月皇后陛下御眞影奉戴
- 大正六年二月六日縣令第十九號を以て學則第三十條の二として授業料の納付を怠るときは保證人をして代納せしむとの規定を設く
- 同年二月二十三日縣令第十五號學則第十四條末段に試験の上第二學年に入學を許可するの一項を加ふ
- 同年三月二日縣令第十六號學則第八條中學科課程並に毎週教授時數表を改正し四月一日より施行す
- 同年四月中實習地として校舍隣接地田畑原野四筆合計三段十七歩を借地し實習地とす
- 同年十二月皇太子殿下御眞影奉戴
- 大正八年四月四日縣令第十八號を以て學則第三十條改正授業料

一ヶ月金壹圓二十錢を壹圓五十錢に改む

- 同年四月十日西筑摩郡主催小學校准教員養成所を本校舎内に開催し二ヶ年繼續事業とす
- 同年十月二十二日校長七宮純雄退職す
- 大正九年二月二十七日縣令第十八號を以て學則第三條改正生徒定員を凡二百名とし大正九年四月一日より施行す
- 同年三月三日岡部喜平校長に任せらる
- 同年四月二日學則改正に依り本年度より一學級を増し四學級となす
- 同年同月二十三日縣令第三十八號を以て本校名稱の立の字を削除し長野縣木曾山林學校と改稱す
- 大正十年三月四日縣令第十六號を以て學則第三十條改正授業料一ヶ月金壹圓五拾錢を金貳圓とし及び第三十八條削除寄宿料を徴收せず
- 同年三月十八日縣令第十八號を以て學則第三條改正生徒定員凡三百名とし大正十年四月一日より施行す
- 同年四月二日學則改正に依り本年度より一學級を増し五學級とす

(二) 學則大要

目的 本校ハ農業學校規程ニ基ツキ林業ニ從事セントスルモノニ須要ナル教育ヲ施スヲ以テ目的トス

修業年限 三ヶ年

生徒定員 凡三百名

入學資格 高等小學卒業程度

學科課程

學科目	第一學年		第二學年		第三學年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
修身	人倫道德	同上	同上	同上	同上	同上
國語	國語漢文	同上	同上	同上	同上	同上
英語	英語習字	同上	同上	同上	同上	同上
算術	算術代數	同上	同上	同上	同上	同上
物理	物理	同上	同上	同上	同上	同上
化學	化學	同上	同上	同上	同上	同上
生物	動物植物	同上	同上	同上	同上	同上
博物	動物植物	同上	同上	同上	同上	同上
法制	經濟	同上	同上	同上	同上	同上
體育	普通兵式	同上	同上	同上	同上	同上
林業	森林植物	同上	同上	同上	同上	同上
森林	森林本論	同上	同上	同上	同上	同上
砂防	砂防	同上	同上	同上	同上	同上
森林	森林保護	同上	同上	同上	同上	同上
林産	林産利用	同上	同上	同上	同上	同上
測量	測量製圖	同上	同上	同上	同上	同上
森林	森林製圖	同上	同上	同上	同上	同上
經理	經理學	同上	同上	同上	同上	同上
林政	林政學	同上	同上	同上	同上	同上
法規	法規	同上	同上	同上	同上	同上
農學	農學	同上	同上	同上	同上	同上
計	栽培汎論	同上	同上	同上	同上	同上
	養畜	同上	同上	同上	同上	同上
	地質	同上	同上	同上	同上	同上
	氣象	同上	同上	同上	同上	同上
	土壤	同上	同上	同上	同上	同上
	肥田	同上	同上	同上	同上	同上
	農業通論	同上	同上	同上	同上	同上

實習配當表

實習配當表	第一學年		第二學年		第三學年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
造林	造林全	上全	上全	上全	上全	上全
森林保護	森林保護全	上全	上全	上全	上全	上全
森林利用	森林利用全	上全	上全	上全	上全	上全
林產製造					林產製造	上全
測量	測量全	上全	上全	上全	上全	上全
製圖	製圖全	上全	上全	上全	上全	上全
森林數學			樹全	上全	上全	上全
森林經理			森林經理全	上全	上全	上全
農業	農業全	上全	上全	上全	上全	上全
球算	球算全	上全	上全	上全	上全	上全

(三) 設備

校地總面積 二町一段八步(六、三〇八坪)

建物敷地	九五〇坪
運動場	一、二〇〇坪
庭園其他	二、〇〇八坪
植物園	三五〇坪
果樹園	三〇〇坪

苗圃

借地總面積九段八畝二步(二、九四二坪)

苗圃	一、九三四坪
蔬菜園	一、〇〇八坪
演習林	八十三町三段七畝二十步

一、二、建物

本館及附屬建物坪數	三八八坪
普通教室	五
器械及標本室	三
校長室	一
事務室	一
圖書室	一
小使室	一
生徒控室	一
講堂兼雨天體操場坪數	六三坪
寄宿舍及附屬建物坪數	四二二坪
自習室兼寢室	一六
應接室	一
娛樂室	一
理科教室	一
製圖室	一
職員室	一
應接室	一
宿直室	一
銃器室	一
便所	二
舍監室	一
圖書室	一
病室	一

三、教授用備品

物理器械	二三七点
化學器械	二二一点
傳物標本	九二〇点
林業標本	一六八点
測量器械	三五二点
農具及林業器具	五四〇点
圖書類	一七六一点
體操器械	二〇七点

(四) 經費

大正十年度豫算

俸給	一九、一一〇〇〇
雜給	三、〇七九〇〇
校費	四、八二五〇〇

修繕費

各年度經費豫算調(建築費を省く)

明治三十四年度	郡立	六、一五六二七〇
三十五年度	全	八、六三三三二二
三十六年度	全	七、八一〇三八一
三十七年度	全	七、七五六三七七
三十八年度	全	六、六五六七三六
三十九年度	縣立	七、七七九一五〇
四十年度	全	八、六八〇九八〇
四十一年度	全	九、三〇二〇三五
四十二年度	全	一〇、四一五八七〇
四十三年度	全	一〇、四一九四五〇
四十四年度	全	一〇、七二三九九五
四十五年度	全	一一、〇二七五四二
大正二年度	全	一一、〇〇五二五〇
三年度	全	九、六一三〇〇〇
四年度	全	一〇、六九八〇〇〇
五年度	全	一〇、三一四〇〇〇
六年度	全	一〇、六七四〇〇〇
七年度	全	一一、一四一〇〇〇

全 八年度	全	一、四一〇〇〇
全 九年度	全	一三、五五八〇〇
全 十年度	全	三、六二七〇〇
全 十年度	全	二二、六一三〇〇
全 十年度	全	一、六五九四五〇
全 十年度	全	二九、一〇四〇〇〇

大正十年度收入(豫算額)

授業料	四、五六〇〇〇
物品賣拂代	一五〇〇〇〇
計	四、七一〇〇〇〇

各年度收入(縣立以後の分)

明治三十九年度	一、〇四一八〇〇
全 四十年	一、〇一一三三〇
全 四十一年	一、〇七一三三〇
全 四十二年	一、二〇一〇六〇
全 四十三年	一、二四五〇一四
全 四十四年	一、二二五三七〇
全 四十五年	一、三七六五一〇
大正 二年度	二、四〇五六二〇
全 三年度	二、四六五八五〇
全 四年度	二、四二〇一一〇

全 五年度	二、三一〇六四〇
全 六年度	二、五一八六五〇
全 七年度	二、四四〇一六〇
全 八年度	三、〇一二八八〇
全 九年度	三、三二四六五〇

(五) 在校生及卒業生ニ關スル統計

年次	入學者	農家子弟	其他
三十四年度	六七	三七	三〇
三十五年度	五九	三三	二二
三十六年度	五九	二八	一六
三十七年度	六二	三〇	一〇
三十八年度	六三	三六	一五
三十九年度	七五	三三	一七
四十年	六三	三二	二一
四十一年	五八	三二	一九
四十二年	五七	三〇	一二
四十三年	六六	三三	一八
四十四年	五七	三一	一五
四十五年	九一	二七	二八
大正二年度	八五	三一	一九

學年	最大	最小	平均
全 三年度	七五	四九	二二
全 四年度	八五	五五	二〇
全 五年度	八六	五〇	一七
全 六年度	一〇三	五七	二六
全 七年度	八二	五〇	二二
全 八年度	九二	六二	三〇
全 九年度	九一	七六	二八
全 十年度	一二二	九二	四〇

二、在學生年齡調(大正十年十月調)

學年	最大	最小	平均
第三學年	二七、〇一	一六、〇八	一八、〇八
第二學年甲	二一、〇九	一五、〇八	一七、〇六
全 乙	二七、〇〇	一五、〇九	一八、〇六
第一學年甲	二四、〇七	一四、〇八	一六、一一
全 乙	二二、〇九	一四、〇八	一六、〇七
平均	二四、〇五	一五、〇五	一七、〇七

三、在學生家庭調(大正十年十月調)

生徒總數	職業別	戶主トノ關係
一九二八	農 七八 自作 二四 自作兼小 九〇	相續者 五七 其他 二三四

四、在學生通學狀況調(大正十年十月調)

通學生	下宿生	寄宿生	合計
一里 二里 三里 以上	一里 二里 三里 以上	一里 二里 三里 以上	合計
計 三八	計 四三	計 一四六	計 一九二

五、通學生寄宿舍生調(大正十年十月調)

學年	通學生	寄宿舍生	合計
第三學年	二〇	二八	四八
第二學年甲	一五	一五	三〇
全 乙	一六	一三	二九
第一學年甲	二二	二〇	四二
全 乙	二二	二一	四三
合計	九五	九七	一九二

六、在學者入費調(寄宿舍ニ就キテノ調)

費目	第一學年	第二學年	第三學年
授業料	二四、〇〇〇	全	全
食費	一四〇、〇〇〇	全	全
宿舍費	二二、〇〇〇	全	全
校友會費	四、八〇〇	全	全

旅行費	五〇〇〇	二〇〇〇〇	三〇〇〇〇
雜費	八九、〇〇〇	全上	全上
合計	二七四、八〇〇	二八九、〇〇〇	二九八、八〇〇
教科書	一二、〇〇〇	一四、〇〇〇	一〇、〇〇〇
夏(小倉)服	六、〇〇〇		
冬(小倉)服	一〇、〇〇〇		
帽子	二、五〇〇		
實習服	五、〇〇〇		
鉈鎌代	二、〇〇〇		
ゲートル	一、五〇〇		
短靴	六、〇〇〇		
文具其他	一二、〇〇〇	全上	全上
合計	五七、〇〇〇	二六、〇〇〇	二二、〇〇〇
總計	三三一、八〇〇	三一八、〇〇〇	三二〇、八〇〇

備考 雜八九圓ハ日用品價格ヲ計上シタルモノナレバ各生ノ境遇ニヨリ減額スルコトヲ得ベシ

七、在學生一人當經費調(大正十年十月調)

生徒	生徒	學校經常費	生徒一人當
定員	總數	總額	
三〇〇人	一九二八	二九、一〇四圓	一五二圓

八、在校生出身地調

西筑摩郡	九年	二年甲	二年乙	一年甲	一年乙	計
東筑摩郡	二	二	五	二	一	一六
上伊那郡	四	二	二	二	一	一七
下伊那郡	二	二	二	二	二	一四
諏訪郡	二	二	二	二	二	一四
南安曇郡	二	二	二	二	二	一四
北安曇郡	二	二	二	二	二	一四
更級郡	二	二	二	二	二	一四
下高井郡	二	二	二	二	二	一四
上水内郡	二	二	二	二	二	一四
小縣郡	二	二	二	二	二	一四
南佐久郡	二	二	二	二	二	一四
北佐久郡	二	二	二	二	二	一四
松本市	二	二	二	二	二	一四
長野市	二	二	二	二	二	一四
本縣計	二四	二〇	一六	二七	二七	一四
兵庫縣	二	二	二	二	二	一四
三重縣	二	二	二	二	二	一四
愛知縣	二	二	二	二	二	一四

九、卒業生出身地調

靜岡縣	一回	二回	三回	四回	五回	六回	七回	八回	九回	十回	計
山梨縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
岐阜縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
福島縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
山形縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
石川縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
富山縣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一〇
西筑摩郡	二〇	一七	一五	一五	一六	一〇	一三	一〇	一八	九	一〇
東筑摩郡	一	四	一	一	二	一	二	二	一	二	一
上伊那郡	一	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
下伊那郡	一	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
諏訪郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
南安曇郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
北安曇郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
南佐久郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
北佐久郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
小縣郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
更級郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
下高井郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
上水内郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
小縣郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
南佐久郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
北佐久郡	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
松本市	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
長野市	二	一	一	一	二	一	二	二	一	二	一
本縣計	二四	二〇	一六	二七	二七	一四	二七	二七	一四	二七	一四
兵庫縣	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三重縣	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
愛知縣	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

全 四、六、六 四、九、一六 二年四月 山梨縣全 河野 長六
 兼舍監 四、四、五 七、九、一六 八年六月 長野縣士族 新家 園面
 教諭 四、七、七 七、三、三〇 六年九月 高知縣平民 北村 正夫
 全 四、十五 六、三、三〇 五年六月 山形縣全 大場 慎六
 兼舍監 元、八、三 十、一、四 八年六月 佐賀縣士族 島内 庸明
 全 三、一、二 八、二、一 五年二月 長野縣平民 宮川 丑作
 全 三、十五 六、六、七 二年九月 山口縣全 福山 也
 教諭 六、四、六 七、四、九 一年一月 茨城縣全 飯島 一郎
 全 七、八、八 八、七、一 五年一月 長野縣全 佐藤 新作
 助教諭 三、七、七 元、二、三 一年五月 鹿兒島縣士族 西本龜千代
 兼舍監 三、七、七 四、〇、三 二年六月 長野縣平民 福澤 桃十
 全 四、五、二 二、三、三 五年十月 縣士族 高木 本枝 (死七)
 教授 三、六、三 三、一、二 二、六、六 月 長野縣士族 青沼 正人
 託兼舍 三、七、五 三、三、六 月 全 平民 中野 有作
 監心得 三、七、一 二、九、三 十一月 全 千賀與四郎
 囑託 元、四、三 四、〇、六 一年三月 全 士族 柳澤友一郎
 全 元、六、三 四、三、七 三年七月 東京府平民 赤浦 力治
 全 四、十、元 四、七、三 十月 月 山梨縣全 加賀 美明
 全 四、二、三 七、三、三 八年二月 福岡縣全 内藤善助 (死七)

書記 四、四、七 三、七、一 三年七月 長野縣平民 鈴岡 實造
 全兼教 三、三、三 六、三、五 內三年一月 全 征矢野茂樹
 授囑託 三、七、七 二、七、八 八年九月 全 士族 安井 正夫
 全 三、四、一 元、七、二 八、八 月 全 平民 松本 謹吾
 全 三、三、一 七、四、四 五年五月 全 森田長次郎
 全 二、七、三 六、一、三 三年七月 全 加藤安太郎
 全兼教 六、一、三 七、二、四 一年十月 全 矢幡三十郎
 授囑託 六、三、五 九、二、七 三年 全 沼田 三郎
 書記 四、四、六 四、一、二 九、十 月 長野縣平民 久保田傳一郎
 林業 助 四、四、七 四、七、一 五年 全 岡西 謙三
 全 四、三、五 四、三、三 一年三月 全 士族 川崎 本雄
 全兼教 四、四、八 二、九、三 二年六月 全 全 士族 川崎 本雄
 授囑託 四、五、五 元、十、六 一年六月 全 岡西 謙三
 林業 助 四、五、五 二、三、七 一年十二月 全 平民 小林 哲三
 全 二、七、六 三、九、五 十一月 全 宮田 實
 全 三、九、三 三、七、二 三月 全 林 卓二
 全 三、七、三 四、六、五 七月 全 士族 征矢 朴郎
 全 四、七、二 六、三、二 二年五月 全 平民 中田 穰
 全 六、七、三 八、四、七 一年六月 全 武居喜太郎
 全 八、七、六 九、六、四 一年 靜岡縣平民 山下不二三

學校醫 四、四、一 三、七、三 三年四月 長野縣士族 今井 碧海
 全 三、三、三 四、一、三 五年七月 全 平民 芹澤 三郎 (死七)
 武術教 二、四、六 五、十、三〇 三年八月 長野縣士族 松原 大造
 師(囑託)

一、現職員一覽

就職年月 受持學科 卒業學校

全三十九年十月廿日 修身、林政 東京帝國大學林學科 正五位勳五等
 全三十九年五月廿日 造林、砂防、法制、經濟 東京帝國大學林學實科 正七位
 全三十九年五月廿日 利用、林產、代數 東京帝國大學林學科 從七位
 全三十九年五月十六日 動物、物理、化學、三角 東京帝國大學理化動物科 從七位
 全三十九年五月十六日 國語、漢文、作文、習字 東京帝國大學 從七位
 全三十九年五月十六日 測量、利用幾何 東京帝國大學林學實科
 全三十九年五月廿日 林政、經理、保護幾何 北海道帝國大學林學實科
 全三十九年五月廿日 農學、植物、礦物 千葉高等園藝學校
 全三十九年五月廿日 教諭兼舍監 千葉縣平民 塚越 勉夫

全三十九年七月廿日 英語 國民英學會英文科
 全三十九年七月廿日 體操、柔道 教諭心得 長野縣平民 吉川 真夫
 全三十九年七月廿日 珠算 書記兼教授囑託 長野縣平民 小貫 堅藏
 全三十九年七月廿日 書 記 長野縣士族 勝野慶次郎
 全三十九年七月廿日 校 醫 長野縣士族 今井 碧海
 全三十九年七月廿日 林業助手 山口縣平民 藏尾 真
 全三十九年七月廿日 武術教師 長野縣士族 里見 久雄



(七) 卒業生名簿

【第一回】

職務先	原籍	氏名
鳥取縣廳技手	福島町	吉田 兵太
自宅	西筑摩郡田立村	林 哲次
朝鮮木浦林業事務所	全 三岳村	原 四郎
自宅	福島町	原 庄次郎
鳥取縣廳技手	全	兒野 榮
朝鮮海州北旭町	全	岡戸 廣治
山形縣廳技手	西筑摩郡木祖村	岡田 恒治
須原	福島町	大森 久治
東京湯島切通坂	南安曇郡梓村	輪湖 正由
沖繩第二縣有林	死亡	高樋 博
上伊那郡赤穂村	全	園原 咲也
鳥取縣日野郡山上村	全 日義村	征矢野克己
若松小林區署長	鳥取縣日野郡山上村	坪倉藤三郎
シंगाポール	西筑摩郡木祖村	中村 豊次
福井縣小濱林産會社	死亡	中村 茂
	西筑摩郡讀書村	松原 三郎
	石川縣羽咋郡北邑知村	福田友次郎

東京三井物産木材部
鹿兒島縣廳技手
住友別子鑛山山林部
自宅
東京府勸業課技手
不明
大田原官行造林署長
大町小林區署長
北海道富士製紙會社
上田小林區署
青森縣大港村

職務先	原籍	氏名
西筑摩郡讀書村	全	遠藤治一郎
大桑村	全	南 勇次郎
石川縣羽咋郡熊野村	全	丸山 春
小瀧升太郎	全	平澤 政吉
小松 精内	全	鷲澤 忠治
遠藤 宗作	全	正又實次郎
青戸爲九郎	全	林 與五郎
齋藤 正雄	全	杉本 貢
高橋 作次	全	中澤 龜吉
原田 義治	全	大熊 俊彦
森 正治	全	鶴殿 正雄
祐川 昌平	全	柳澤 熊治
	全	小林桂一郎
	全	山下 常記
	全	寺尾 敬二
	全	千村 重喜
	全	池井 深一
	全	但馬 廣造
	全	宮崎清太郎
	全	松原 秀吉
	全	加藤十七三

新潟縣廳勸業課技手

職務先	原籍	氏名
鳥根縣能美郡母呈村	遠藤治一郎	遠藤治一郎
石川縣羽咋郡堀松村	南 勇次郎	南 勇次郎
死亡	丸山 春	丸山 春
死亡	平澤 政吉	平澤 政吉
死亡	鷲澤 忠治	鷲澤 忠治
東京大林區署造林課	西筑摩郡讀書村	正又實次郎
朝鮮製絲株式會社	全	林 與五郎
樺太廳林務技手	全	杉本 貢
不明	全	中澤 龜吉
新潟縣南魚沼郡役所	東筑摩郡片丘村	大熊 俊彦
自宅	小縣郡長瀬村	鶴殿 正雄
不明	更級郡榮村	柳澤 熊治
不明	小縣郡泉田村	小林桂一郎
大分縣中澤小林區署	熊本縣菊地郡瀧門村	山下 常記
自宅	石川縣羽咋郡加茂村	寺尾 敬二
讀書柿其分擔區	西筑摩郡福島町	千村 重喜
不明	全	池井 深一
諏訪郡役所	石川縣羽咋郡北志雄村	但馬 廣造
不明	石川縣河北郡金津谷村	宮崎清太郎
	死亡	松原 秀吉
	死亡	加藤十七三

飯田帝林局出張所
岡山縣神代村
大阪大林區署
自宅
朝鮮平安高山鎮
三重縣廳技手
自宅
自宅
靜岡縣伊豆稻取町
山形縣東田川郡役所
朝鮮咸鏡南道營林廠
自宅
愛媛縣廳技手

職務先	原籍	氏名
西筑摩郡讀書村	全	下畑 徳十
大桑村	全	嶽野 利雄
石川縣羽咋郡熊野村	全	代田善次郎
小瀧升太郎	全	戸田 績
小松 精内	全	南村 末吉
遠藤 宗作	全	木下 清
青戸爲九郎	全	藤原 周紫
齋藤 正雄	全	岩久 宗治
高橋 作次	全	大脇 又衛
原田 義治	全	木村鐵次郎
森 正治	全	中島源一郎
祐川 昌平	全	原 傳
	全	奧牧金次郎
	全	下條初太郎
	全	蜂谷 光香
	全	温井 誠一
	全	柳澤 邦信
	全	松井 定道
	全	倉科 真
	全	清澤己未衛

【第三回】

季三

東京四谷南町
不問
北樺太亞港周方町
木曾支局
朝鮮平安北道定州邑
自宅
石川縣珠洲郡役所
島根縣日原小林區
自宅
更級農學校教諭
王瀧村帝林出張所
福島町長福寺
不問
【第四回】
三重縣渡會帝林局
岩手縣遠野小林區署
東京府下大井町
青森縣川内小林區署
自宅
鹿兒島縣川邊
西筑摩郡檜川村
福島町
全
西筑摩郡木祖村
石川縣鹿島郡東港村
全羽昨郡北邑知村
福島町
西筑摩郡大桑村
死亡
石川縣羽昨郡西土田村
愛知縣幡豆郡瀨門村
石川縣羽昨郡河合谷村
西筑摩郡大桑村
死亡
石川縣羽昨郡高濱町
福島町
山下 藤一
古畑 金藏
高村 純平
前野 慶一
宮田 實
寺島 正治
宮森太一郎
小藤作四郎
宮下 信一
野知里慶助
河島 正巳
岡田彌兵衛
三宅 周吉
木下安太郎
勅使河原角藏
太田喜代松
松館藤太郎
川崎 本雄
竹内房太郎
水野 忠一
樺太廳林務課
下伊那郡役所
飯田山林事務所
埼玉縣勸業課
ハワイ
群馬縣沼田小林區
神坂帝林出張所
愛知東加茂郡旭村
青森鐵事保線事務所
下伊那郡飯田町
木曾支局上松出張所
亞米利加合衆國
自宅
東京市外目黒
自宅
帝林局名古屋支局
静岡帝林天城出張所
自宅
喜多方小林區署
全 村
福島町
西筑摩郡木祖村
南佐久郡大澤村
福島町
西筑摩郡駒ヶ根村
死亡
更級郡八幡村
全 郡全 村
西筑摩郡福島町
愛知縣東加茂郡生駒村
岐阜縣本巢郡穗積村
下伊那郡山本村
福島町
更級郡八幡村
全 郡全 村
西筑摩郡福島町
愛知縣東加茂郡生駒村
岐阜縣本巢郡穗積村
下伊那郡山本村
福島町
由尾 忠助
西野入 德
宮崎源一郎
肥田孝一郎
新井喜多雄
澤田貞次郎
市川 潔
兒野 恭一
上條嘉一郎
三原 昇
中島 昌利
平田 稻男
木村晋次郎
矢島 駒治
宮崎 二朗
吉田精一郎
和田 宗吉
松島 九平
永井
廣瀬靜之進
肥後金四郎

【第五回】

石川縣羽昨郡役所
下高井郡役所
自宅
長野縣廳
岐阜縣莊川小林區署
不問
長野縣更級郡役所
岐阜縣岩村分擔區
帝林福島出張所
自宅
長野縣林務課
自宅
朝鮮海外洲北旭町
自宅
神坂村湯舟澤出張所
兵庫縣生野町三菱内
秋田縣大館小林區署
静岡縣廳技手
自宅
石川縣羽昨郡志雄村
埴科郡王加村
上高井郡小布施村
上水内郡中郷村
下水内郡秋津村
長野縣
埴科郡松代町
岐阜縣惠那郡落合村
下伊那郡山本村
上高井郡山田村
更級郡更府村
北佐久郡共和村
西筑摩郡讀書村
更級郡信里村
西筑摩郡大桑村
北安曇郡常盤村
山形縣北村山郡大高根村
南安曇郡三田村
西筑摩郡木祖村
武居 文作
宮城 忠藏
瀨在 實
櫻井 忠
仲俣 伍市
松澤 万吉
北澤時三郎
金井 澄水
上田 祐二
小池 新伍
水橋 要作
宮崎惠喜太
小林 彪
樋口 勇
小山田喜重郎
北川 信美
藤卷 壽一
高橋 金作
横山 治人
寺島 俊一
阿寺分擔區
茨城縣高萩小林區署
東京小石川水道端
岐阜縣七宗帝林局
名古屋木材會社
上松帝林出張所
自宅
【第六回】
西筑摩郡三岳村
鳥取縣廳技手
不問
全
長野縣林務課
帝林王瀧出張所
岐阜縣下呂帝林局
全 村
福島町
埴科郡森村
福島町
愛知縣葉栗郡淺井町
下伊那郡上飯田村
北佐久郡中佐都村
奥原吉右工門
林 省三
竹内 茂
千村 善二
脇田 義正
久保田傳一郎
池田藤三郎
中島 要人
松澤莊太郎
栗野原治平
若林遊龜尾
仲田 惠介
倉科浦一郎
宮川 永三
中山 辰雄
原田 英二
向井辰次郎
本多清左工門
松尾 忠恕
原 雛助
全 村
西筑摩郡開田村
朝鮮總督府山林課
不問
新發田小林區署
全 村
茨城縣筑波郡島名村
上水内郡北小川村
岐阜縣惠那郡川上村

日立鑛山事務所
朝鮮黃原道山陽里
塩尻村棧敷中島方
日立鑛山事務所
自宅
全
秋田縣阿仁鑛山
自宅
更級郡役所
自宅
鳥取縣日野郡役所
青森大鱈小林區署
下伊那郡役所
朝鮮平安北道厚昌郡
神奈川縣廳

福島町
和歌山縣上神野村
福島町
福島町
山梨縣北巨摩郡新富村
小縣郡長村
西筑摩郡大桑村
全駒ヶ根村
埴科郡代田町
西筑摩郡大桑村
南佐久郡北牧村
下伊那郡飯島村
全上飯田町
福島町
埴科郡五加村

原 七郎
南勝石工門
芦澤 庸三
山村 次一
一木 虎雄
一ノ瀬架婆壽
田中 吟重
蜂須賀宮次郎
野村 光智
洞山鹿之助
島田雄太郎
塩澤 英一
原 喜四三
岡戸 郁二
宮入 汎省

帝林局野尻出張所
帝林局野尻出張所
靜岡縣河津村帝林局
西筑摩郡大桑村
上伊那郡南向村
更級郡塩崎村
死亡
全
福島町
上伊那郡南箕輪村
下伊那郡大下條村
死亡
福島町
全上加茂郡西白川村
上高井郡高甫村
更級郡信里村
全上本巢郡牛牧村
諏訪郡玉川村
西筑摩郡大桑村
全上惠那郡長島町
福島町
北佐久郡北大井村
西筑摩郡吾妻村
福島町

小池金四郎
米山 修
北村竹次郎
遠山 一郎
澤木 儀一
市岡淳一郎
原 耕 民
倉田 美行
上原 上
日野 雅亮
志津 篤助
中澤 揚
甲田 林
森 巖
原田久保作
加藤 清一
伊藤 益雄
小石彌三郎
小林佐久馬
高柴真次郎
宮下正三郎

不明
名古屋市外愛知町
南安曇郡役所

福島町
西筑摩郡日義村
福島町

青島守備軍工務課
帝林妻籠出張所
東筑摩郡片丘村技手
長野縣廳技手

上水内郡柳原村
福島町
東筑摩郡中山村
北佐久郡小諸町
西筑摩郡大桑村
全開田村
福島町
西筑摩郡大桑村
全上西長原村

宮澤 嘉一
岡西 謙三
柏澤 國治
塩川 金治
加藤 正治
樋口 智久
小林 哲三
曲田 秀二
土屋 浩三

【第八回】

茨城縣多賀郡役所
新潟縣廳農林課
群馬縣大間々小林區署
朽木縣田原小林區署
帝林局妻籠出張所
下伊那郡飯田町
王瀧瀨戸川分擔區
自宅
北安曇郡中土村
不明
不明
青森縣下北郡大畑村
王瀧出張所
大阪中西木材會社
山口公有林野造林所
自宅

上水内郡戸隠村
新瀧縣岩船郡岩船町
下高井郡大島村
岐阜縣惠那郡中津町
西筑摩郡讀書村
下伊那郡山吹村
上伊那郡小野村
福島町
更級郡塩崎村
上水内郡小田切村
死亡
諏訪郡北山村
下伊那郡大鹿村
西筑摩郡三丘村
全
熊本縣八代郡鏡町
東筑摩郡宗賀村

德武 國久
服部啓次郎
藤田 要吾
島田勘四郎
長谷川義雄
原 恒
倉繼 建雄
吉村金次郎
宮崎 光治
小池 一郎
西尾 長一
篠原 昇士
菊池 貞次
塚本 三樹
丸山金三郎
木村 康明
市川左金吾

石川縣石川郡安原村
西筑摩郡日義村
全 大桑村
岐阜縣吉城郡國府村
北佐久郡岩村田町
諏訪郡下諏訪町
南安曇郡温村
埴科郡豊榮町
西筑摩郡大桑村
下伊那郡飯田町

下村 博
吉田佐十郎
征矢野余所夫
小羽根安治
木下 稗藏
角田 久福
吉澤 英雄
石曾根四郎
村松 一清
川合 清行
杉本 直

豊橋歩兵第六十聯隊
帝林局三殿出張所
伊豆天城帝林出張所
西筑摩郡役所
帝林局王瀧出張所
下水内郡役所
臺灣大寶農林部社宅
帝林局上松出張所
北安曇郡役所
山梨縣南都留郡役所
自宅
樺太大泊製紙會社
不明

福島町
全
兵庫縣飾磨郡花田村
岐阜縣惠那郡福岡村
東筑摩郡宗賀村
下高井木島村
福島町
下高井郡穂波村
更級郡共和村
松本市
全上西桂村
北安曇郡大町
西筑摩郡大桑村
埴科郡豊榮村
岐阜縣惠那郡付知町
西筑摩郡王瀧村
下伊那郡河野村
岐阜縣益田郡中原村
愛媛縣宇摩郡別子山

山村 克人
小林 秀一
多田慶次郎
西尾 嘉一
丸山 久雄
佐藤 一郎
征矢 朴郎
山本政之丞
高野 薰見
安藤 次郎
前田 正義
伊藤 昇次
篠原 爲一
伊藤徳之丞
滿洲撫順炭鑛殖産課
京都小林區署
秋田縣木材能代會社
山梨縣山林課
自宅
長野縣林務課技手
飯山小林區署
上松帝林出張所
山形縣最上郡役所
長野縣林務課
秋田大林區署
東京府廳内木炭協會
自宅
西筑摩郡役所内
山梨縣廳技手
静岡縣加茂郡役所
宮城縣七ヶ宿村
自宅
樺太豊原支廳
松本林野官行造林所

東筑摩郡島立村
西筑摩郡新開村
全
岐阜縣惠那郡長島村
千葉縣安房郡天津町
小縣郡豊里村
岐阜縣益田郡高根村
更級郡青木島村
岐阜縣不破郡荒崎村
下伊那郡龍丘村
小縣郡依田村
西筑摩郡吾妻村
新潟縣佐渡郡新穂村
小縣郡依田村
南安曇郡南穂高村
山梨縣西八代郡下九邑村
松本市北深志同心町
福嶋町
全
西筑摩郡三丘村
上水内郡戸隠村
大久保五成
古畑 七三
田中 榮一
成瀬 義郎
神作 四郎
渡邊 知則
上田彌太郎
長谷部眞一
喜多村 明
代田文之助
市川 豊二
下枝 壽一
羽田 龍尾
吉池三九郎
白井 辰雄
小林 政基
關谷 静夫
日野 清亮
原 貴一
大洞 盛一
阿部 益實

五八

自宅
山林局森林測行所
自宅
高森小林區署
自宅
茨城縣日立鑛山
【第十一回】
帝林局札幌支局
長野縣林務課内技手
朝鮮黃海道鳳山郡廳
秋田大林區署
岐阜小坂帝林出張所
札幌支局羽幌出張所
青森縣相内小林區署
岐阜縣惠那郡中津町
福島市小林區署
山梨縣嶽澤帝林局
自宅
福嶋縣郡山小林區署

南安曇郡島川村
福島町
石川縣羽咋郡南志雄村
死亡
上高井郡川田村
埴科郡松代町
上水内郡免無里村
死亡
西筑摩郡福島町
北安曇郡陸郷村
岐阜縣加茂郡西白川村
全 惠那郡福岡村
更級郡依田村
東筑摩郡松本村
埴科郡埴生村
全上益田郡竹原村
長野縣上伊那郡高遠町
岐阜縣惠那郡福岡村
岐阜縣益田郡萩原町
全惠那郡串原村

唐澤 清見
松島 周一
岡山 益善
原田 洋平
中嶋 信敏
野中 高就
塚田 大
酒井 光義
千村 吉雄
關 琴義
新田 穰
原 潔
石坂 季治
赤羽 高
山崎 三男
梅田 吉郎
柳澤 義雄
市岡 新八
今井 安男
中垣 英一

福嶋喜多方小林區署
北海道廳林務課
自宅
不明
山梨縣山林課
不明
關西大學
自宅
【第十二回】
宮崎縣兒湯郡西米良
早稻田大學文科
自宅
三井合名美濃派出所
北海道深川帝林局
岐阜小坂帝林出張所
秋田阿仁古河林業部
自宅
長野縣廳
自宅
南佐久郡役所

松本市
死亡
埴科郡清野村
廣島縣山縣郡戸河内村
小縣郡上田町
山梨縣南都留郡道志村
愛知縣寶飯郡八幡村
西筑摩郡讀書村
石川縣羽咋郡西増穂村
二木 季人
齋藤 海藏
久保 照人
不鬼 修六
澤柳 壽夫
佐藤 光道
岩瀬 幸吉
長谷川房藏
深美 利一

自宅
帝林局札幌支局
長野縣林務課内技手
朝鮮黃海道鳳山郡廳
秋田大林區署
岐阜小坂帝林出張所
札幌支局羽幌出張所
青森縣相内小林區署
岐阜縣惠那郡中津町
福島市小林區署
山梨縣嶽澤帝林局
自宅
福嶋縣郡山小林區署

唐澤 清見
松島 周一
岡山 益善
原田 洋平
中嶋 信敏
野中 高就
塚田 大
酒井 光義
千村 吉雄
關 琴義
新田 穰
原 潔
石坂 季治
赤羽 高
山崎 三男
梅田 吉郎
柳澤 義雄
市岡 新八
今井 安男
中垣 英一

福嶋喜多方小林區署
北海道廳林務課
自宅
不明
山梨縣山林課
不明
關西大學
自宅
【第十二回】
宮崎縣兒湯郡西米良
早稻田大學文科
自宅
三井合名美濃派出所
北海道深川帝林局
岐阜小坂帝林出張所
秋田阿仁古河林業部
自宅
長野縣廳
自宅
南佐久郡役所

松本市
死亡
埴科郡清野村
廣島縣山縣郡戸河内村
小縣郡上田町
山梨縣南都留郡道志村
愛知縣寶飯郡八幡村
西筑摩郡讀書村
石川縣羽咋郡西増穂村
都竹武次郎
丸山 岩吉
伊藤正之助
田邊善右工門
田中 泰吉
今井 眞二
松澤 敏男
萩原 惠治
岩井 洋治
柳澤 得衛
東原 智

五九

北見野付牛富士製紙
自宅
鳥取縣日野郡役所
自宅
北安曇郡大町
天鹽留前帝林出張所
木曾山林學校
盛岡高等農林學校
下伊那郡役所
自宅
山口官行造林署
石川縣石川郡役所
自宅
福島町
松本歩兵五十聯隊
北海道旭川營林區署
北海道東大演習林
東京駒場農大實科
朝鮮大實農林部
兵庫縣廳農務部
小縣郡長瀬村

南佐久郡畑八村
埼玉縣兒玉郡長幡村
鳥取縣日野郡霞村
岐阜縣惠那郡中方村
南安曇郡明盛村
岐阜縣惠那郡阿木村
下伊那郡下條村
下伊那郡平岡村
岐阜縣吉城郡古川町
岐阜縣益田郡小坂町
埴科郡松代町
南安曇郡東穂高村
西筑摩郡開田村
全上
埴科郡松代町
南安曇郡温村
更級郡信里村
西筑摩郡駒ヶ根村
岐阜縣吉城郡國府村
西筑摩郡讀書村
全上

高田野砲第十九聯隊
長野縣林務課
福島縣西白河小林區
小樽花園町東四丁目
埼玉縣兒玉郡渡瀨
氣多王子製紙會社
長野縣廳林務課
京都市外花園砂心寺
朝鮮京城本町
新潟縣新發田小林區署
小諸町純水館
樺太真岡工場
郡下開田村
愛知新城帝林出張所
夕張帝林局出張所
膽振苦小牧帝林局
岐阜縣高山小林區署
北海道帝林札幌支局
岡山縣虫明保護官舎

北安曇郡平村
更級郡信里村
南安曇郡梓村
西筑摩郡駒ヶ根村
福島町
東筑摩郡松本村
小縣郡和田村
京都市上京區
岐阜縣加茂郡坂祝村
西筑摩郡吾妻村
北佐久郡小諸町
福島町
西筑摩郡新開村
下伊那郡山本村
岐阜縣惠那郡笠置村
更級郡青木島村
鳥取縣八頭郡那岐村
上伊那郡伊那村
岡山縣阿哲郡新見町
死亡

小林英一郎
野澤 博
長崎千万一
古澤 久治
原 彌藏
中田 穰
稻葉 增吉
藤枝 茂
安藤 晃
加藤朝太郎
唐澤 俊文
林 勘海
田澤 秋藏
竹村 節三
柘植 五郎
長谷部久雄
森次 潔
下平 佐門
梅村 計介
開運隆飛登

三留野御料出張所
北海道廳林務課
静岡縣古河久根銅山
西筑摩郡役所
岐阜縣莊川保護官舎
富山小林區保護官舎
岩手縣小林區署
町尻帝林出張所
朝鮮新義洲坡嶺所
樺太真岡工場山林部
静岡縣山林課内
岐阜縣上役所
滿洲長春豐材公司宅
上伊那郡中澤村
朽木今市小林區署
香川高松小林區署
新潟村上小林區署
松本官行造林署
自宅
鳥根縣廳農務課

福島町
岐阜縣不破郡荒崎村
松本市
福島町
岐阜縣吉城郡古川町
全 益田郡下原村
西筑摩郡田立村
全
全 大桑村
全 福島町
岐阜縣加茂郡川邊町
全上武儀郡金山町
西筑摩郡大桑村
死亡
下伊那郡念地村
西筑摩郡吾妻村
上伊那郡藤澤村
東筑摩郡山形村
西筑摩郡讀書村
下伊那郡和田村
西筑摩郡駒ヶ根村

臺灣嘉義三菱事務所
西筑摩郡檜川村
樺太泊王子製紙
岐阜縣揖斐郡役所
高野小林區署
空知岩見澤森林事務所
上水内戸隱保護官舎
豊橋輜重兵十五大隊
豊橋歩兵六十聯隊
樺太落合日本製紙内
小川町斫木中立事務所
不明
松本小林區署
福岡縣
自宅
全
全
全

福島町
全
西筑摩郡駒ヶ根村
全 福島町
全 讀書村
下伊那郡智里村
下高井郡中野町
下伊那郡伊賀良村
西筑摩郡大桑村
松本市
上伊那郡河南村
南安曇郡明盛村
村島町
全上加穂郡稻築村
福島町
西筑摩郡駒ヶ根村
下伊那郡上郷村
岐阜縣加茂郡下麻村
西筑摩郡檜川村
東筑摩郡芳川村
和歌山縣藤田組詰所
全一

【第十四回】

今井 武雄
平田 實
森下 義郎
市岡 正義
大澤 國男
熊谷 清逸
丸山嘉一郎
久保田邦治
小池 茂樹
野本 與一
小松 良輔
等々力與八
岡西 猛
福澤 定雄
與村 利一
村上安太郎
佐々木久一
岩田 元吉
長坂 清人
宮島 岩見

岐卓下呂帝林出張所 岐卓縣益田郡朝日村 小田 寶
 上松御料出張所 福島町 長谷川 毅
 秋田大館官行造林署 東筑摩郡里山邊村 小岩井茂樹
 三重阿山郡役所 三重名賀郡國津村 松島 長二
 福島原町小林區署 南安曇郡明盛村 白木 老雄
 山形西村山郡役所 岐卓加茂郡西白川村 安江悦次郎
 夕張登川村 岐卓惠那郡蛭川村 各務 傳六
 千葉印旛郡富里村 山口縣玖珂郡岩國町 藏田 毅郎
 山林學校内 全縣全部岩國町 藏尾 眞
 自宅 下伊那郡伊賀良村 榑原 武重
 豐橋工兵留守隊 岐卓惠那郡川上村 富士川鏡一
 王瀧御料出張所 下伊那郡下條村 吉川 光夫
 下伊那郡王子御紙會社 西筑摩郡讀書村 伊深幾太郎
 長野小林區署 小縣郡九子町 藤原 幾喜
 北海道夕張登川村 富山縣中新川郡東谷村 高峰 傳治
 沖繩縣廳 岐卓縣惠那郡蛭川村 奧村 和吉
 鳥取縣倉吉小林區署 岐卓縣惠那郡苗木町 曾我 義郎
 上伊那役所 下伊那郡伊賀良村 平田久良治
 朝鮮京畿道漣川郡廳 靜岡縣小笠郡西南郷村 山下不二三
 北海道廳拓植部 上水内郡若槻村 原 治二
 樺太富士製紙會社 山梨縣北巨摩郡日野春村 向井 惟晨

佐倉歩兵聯隊 山形縣南置賜郡玉庭村 鈴木 繁
 北海道廳林務課 福島縣若松小林區署 福井縣足羽郡酒生村 出雲 秀一
 福島縣若松小林區署 三重藤田組貯木場 西筑摩郡駒ヶ根村 伊藤 善三
 北見紋別郡興部村 東筑摩郡片丘村 村上 英雄
 福島縣檜原小林區署 上伊那郡川島村 赤羽 三郎
 北海道三美賀炭山 小縣郡大門村 內田新之助
 朝鮮清涼林業試驗場 愛媛縣新居郡船木村 小林 右内
 大分縣大分小林區署 愛知縣丹羽郡圓陽村 星加 正雄
 臺灣宜蘭廳 下伊那郡上郷村 横井 正守
 臺灣總督府管林局 上伊那郡中澤村 下平 三男
 シンガポール 西筑摩郡大桑村 瀧澤銀次郎
 南佐久郡田口村 上伊那郡中澤村 古根 勳
 西筑摩郡讀書村 全上 木下 武夫
 北海道王子製紙 岐卓縣土岐郡余戸村 廣瀬 運平
 福島町 全上 西尾 彰
 岩手縣廳 西筑摩郡大桑村 三村 善三
 奈良井 全檜川村 竹腰 福雄
 福島縣片倉林業部 上伊那郡富縣村 島田德之助
 東京農科大學實科生 西筑摩郡駒ヶ根村 下島 俊二
 群馬縣廳 愛知縣東春井郡篠木村 杉山 義次
 梶田 寛治

空三

長野縣廳 東筑摩郡神林村 上條 芳郎
 北海道三井物産會社 西筑摩郡三丘村 武居 章
 北海道富士製紙會社 山梨縣北巨摩郡朝神村 皆川 秀雄
 諏訪郡片倉合名會社 西筑摩郡木祖村 古畑今朝茂
 山梨縣深澤製絲場 全上北巨摩上野村 深澤 潔
 自宅 西筑摩郡大桑村 前野今朝次郎
 長野縣廳 更級郡信田村 新井 清美
 自宅 下伊那郡喬木村 下平 通雄
 秋田木材會社 西筑摩郡駒ヶ根村 武居喜太郎

群馬縣沼田小林區署 岐卓縣惠那郡福岡村 志津 幸祐
 秋田縣荷上場小林區 福島町 加藤 七助
 大阪大林組製材部 岐卓縣惠那郡付知町 伊藤 芳郎
 守山三十三聯隊 福島町 今井 忠雄
 北海道札幌區一條 全 日野 櫻亮
 東京農科大學 全 今井 徹郎
 苫小牧王子製紙分社 全 原 正次
 福島棚倉小林區署 更級郡中津村 大久保猪三郎
 朝鮮農林株式會社 死亡 渡邊 隆知
 秋田市中長町 福島町 和田 實也
 高知香美郡山北村 近森 良材

第十五回

第十六回

臺灣新竹州廳 山梨北巨摩郡下條村 小澤 安親
 豐橋歩兵六十聯隊 西筑摩郡吾妻村 矢崎 清海
 石狩清水澤分擔區 全 木祖村 唐澤 繁夫
 別子鑛山 諏訪郡玉川村 伊東 厚
 空知長野町帝林局 山梨縣北巨摩郡小笠原村 細窪友一郎
 高知大林區署 西筑摩郡大桑村 北川 春
 北海道廳 下伊那郡喬木村 內山伊那登
 樺太工業株式會社 三重阿川郡東拓殖村 松尾 廣治
 群馬縣利根郡東村 全上 井上 寛一
 岐卓縣白鳥藤田山木部 山口縣玖珂郡岩國町 原川 只一
 秋田縣八森村保護區 福島縣南會津郡大宮町 月田喜代佐

野尻帝林出張所 岐卓縣惠那郡阿木村 鷹見 勳
 宮崎縣住友山林出張所 東筑摩郡片丘村 米久保春雄
 上田蠶絲專門學校 下伊那郡伊賀良村 井原 邦雄
 愛媛關川佐友事務所 下高井郡長丘村 篠原 將英
 郡下王瀧伐木所 更級郡青木村 青木 忠太
 北海道廳林務課 南安曇郡烏川村 野本 美嘉
 盛岡高等農林學校 岐卓縣惠那郡笠置村 山本 茂
 郡下三殿出張所 西筑摩郡福島町 福川 正三
 東京市目黒五五七 全 古畑 要司

空三

東京八王子出張所
龍山少兵七十九聯隊
岐阜縣小坂出張所
守山三十三聯隊
岩村田小林區署
郡下敷原伐木所
鹿兒島高等農林學校
東京大林區署
飯山小林區署
滿洲鐵道鑄造事務所
福島帝林局出張所
岐阜縣山林課
朝鮮製紙株式會社
岩手縣林務課
自宅
靜岡千頭帝林出張所
東京大林區署
王瀧鉞川伐木所
野邊地小林區署
長野小林區署
福島町

下伊那郡飯田町
愛媛縣新居郡般木村
東筑摩郡坂北村
西筑摩郡神坂村
下高井郡近德村
愛知縣東加茂郡旭村
岐阜縣益田郡馬瀨村
東筑摩郡坂北村
下伊那郡伊賀良村
全南向村
岐阜縣惠那郡川上村
福岡縣山門郡三橋村
岐阜縣不破郡荒崎村
福島町
西筑摩郡駒ヶ根村
全上志太郡大長村
福島町
西筑摩郡田立村
山梨縣北巨摩郡駒城村
更級郡御厨村
全上

室蘭本町松本方
南安曇郡烏川村
八王子製紙株式會社
西筑摩郡駒ヶ根村
岩手縣小林區署
上田市小林區署
札幌區遊園地古屋方
北見野付牛分村
新發田小林區署
王子製紙株式會社
岐阜山下呂帝林出張所
高知窪川郡小林區署
朝鮮黃海松木郡廳
駒ヶ根赤澤伐木所
江原伊原住友林業課
自宅
東京大林區署
岐阜山ノ口保護官舎

【第十七回】
豐橋步兵六十聯隊
豐橋騎兵二十五聯隊
西筑摩郡駒ヶ根村
西筑摩郡開田村
南安曇郡古明村
全上
西筑摩郡本祖村
全上
上伊那郡河南村
松本市
山梨縣東八代郡下曾根村
小縣郡大門村
西筑摩郡開田村
愛知縣渥美郡神戶村
岐阜縣岐阜市高岩町
高知縣土佐郡本川村
岐阜縣惠那郡坂下町
福島町
全
西筑摩郡駒ヶ根村
東筑摩郡和田村
岐阜益田郡中原村
草間 勝
唐澤 正義
山崎 多門
井上新次郎
小松 義三
青木 重俊
大木多喜雄
小野澤四郎
前野 秀宗
仲谷 馨
後藤 豊吉
伊藤 近良
糸魚川良二
廣井 昇
征矢 三郎
丸山 林一
藤澤甲子十
矢島 穰
遠山 虎雄
高橋 秀惣

六五

自宅
靜岡縣山林課
盛岡高等農林學校
奈良井帝林出張所
岐阜付知帝林出張所
東筑摩郡麻積村役場
盛岡高等農林學校
靜岡濱松帝林出張所
岐阜小坂帝林出張所
長野縣廳林務課技手
福島出張所三岳伐木
東京神田表神保町
愛媛縣久万小林區署
歩兵五一聯隊二中隊
靜岡帝林局出張所
兵庫縣廳林務課技手
自宅
旭川帝林出張所
東京目黒林業試驗所
野尻帝林局出張所

全福島町
三重縣多賀郡國津村
上伊那郡西春近村
福島町
三重縣度會郡大内山村
福島町
下伊那郡上久堅村
岐阜縣惠那郡川上村
岐阜縣可兒郡錦津村
愛媛縣新居郡大町村
山形縣南置賜郡五庭村
西筑摩郡王瀧村
全上新居郡神郷村
岐阜縣惠那郡上村
西筑摩郡大桑村
愛知縣丹羽郡岩倉町
岐阜縣益田郡川西村
全可兒郡廣見村
全惠那郡苗木町
福島町
死亡

名古屋工兵三ノ一
北海道廳林務課
山梨郡廳
宇都宮步兵一年志願
長野縣廳
仙臺小林區署
甲府聯隊一年志願班
若松小林區署
群馬沼田小林區署
帝林札幌支局
山形縣舟形小林區署
栃木大田原小林區署
山梨南巨摩郡飯富村
自宅
全
下伊那郡平岡村
京都小林區署
靜岡縣林務課
岐阜高山帝林出張所
埼玉縣秩父小林區署
北海道廳林務課

岐阜縣可兒郡上田村
愛知縣丹羽郡布袋町
全上北巨摩郡上手村
南安曇郡梓村
上水内郡小川村
岐阜縣惠那郡坂下町
山梨縣西山梨郡能泉村
南安曇郡有明村
福島町
下伊那郡大鹿村
福島町
東筑摩郡片丘村
全上北山梨郡七里村
福島町
西筑摩郡王瀧村
靜岡駿東郡泉村
福島町
岐阜吉城郡袖川村
福島北會津郡大戸村
南安曇郡有明村
更級郡共和村
可兒 敏郎
吉田 正男
深澤 佐愛
長崎 信一
山中三十四
吉村 幸助
長田 克巳
大島 晃治
吉田 武雄
塚田繁次郎
八木 愿藏
花村 隼則
橋爪 滋
小桂 二郎
瀧 美雄
鈴木 正雄
岡西 萬秋
紺田 孝三
星 重男
吉田 良惠
野口 勇

六五

岩手縣山林課
六三銀行茅野支店
西筑摩郡新開村
自宅
岡崎市外砂防事務所
長野小林區署
妻籠帝林田立伐木所

【第十八回】
山梨縣土木課
宇都宮帝林出張所
神奈川大磯帝林局
印刷局抄紙部
盛岡高等農林學校
野尻帝林出張所
臺灣阿里山營林所
東京大林區署
長野縣林務課
自宅
前橋帝林出張所

岐阜縣吉城郡上寶村 直井 利雄
南安曇郡高家村 三原 忠一
福島町 新井 榮太
岐阜縣中津町 原 舍次郎
福島町 小林 愛司
更級郡稻置村 峰村 歲末
福島町 原 英雄

華太廳柘植部
林業試驗場
樺太廳柘植部
岩手縣沼宮小林區署
靜岡縣山林課
秋田縣湯澤小林區署
廣島縣山林課
兵庫縣土木課
平安中江鎮營林支廠
北海道遠輕營林分署
廣島縣廳
福島小林區署
北見野付牛營林分署
大町小林區署
平安中江鎮營林友廠
臺灣總督府營林所
靜岡縣山林課
高知大林區署
自宅
帝大林科臺灣演習林
香川高松小林區署

新潟北蒲原郡加治村 池主 鐵治
福島町 千村 重豊
岐阜加茂郡佐見村 高木 萬平
岐阜吉城郡上寶村 上井乙之助
下伊那郡市田村 片桐 英雄
東筑摩郡中川手村 池上 柳三
西筑摩郡三岳村 本南 克己
同 駒ヶ根村 長谷川 都
同 神坂村 早川 秀雄
南佐久郡櫻井村 柳澤 虎三
北安曇郡池田町 山崎 高男
岐阜武儀郡金山町 高木 榮一
岐阜吉城郡古川町 荒木 要
岐阜益田郡小坂町 長谷川要治
全惠那郡竹並村 渡邊 時夫
愛知縣東春日井郡篠木村 藤田 喜一
愛知寶飯郡前芝村 前田 早苗
兵庫東栗郡有賀村 小林敏三郎
岐阜惠那郡三郷村 熊崎 代治
西筑摩郡木祖村 澤頭 謹一
高知長岡郡吉野村 大原 猛志

山梨縣廳
自宅
阿里山殖產局出張所
六日町小林區署
茨城高萩小林區署
名古屋中越材木店

全上西山梨郡相川村 數野 二郎
西筑摩郡新開村 片原 祐一
岐阜加茂郡黒川村 安江悦太郎
三重一志郡八幡村 筒井 正夫
新潟縣北蒲原郡葛塚町 小林 元
西筑摩郡王瀧村 松原 松男

(八) 在校生氏名 (大正十年十月一日調)

第三學年 四八名

伊藤良雄 (岐阜) 岩井泰二郎 (上水内)
稻垣阪樹 (愛知) 小縣正平 (岐阜)
小松順市 (南安曇) 前野義宗 (西筑摩)
市岡巖 (西筑摩) 山岸七之丞 (下高井)
小林孝三郎 (東筑摩) 宮澤孝 (下伊那)
宅見剛二 (兵庫) 山田憲夫 (愛知)
有賀三男 (上伊那) 片桐藤吉 (岐阜)
原宗重 (西筑摩) 樋田良市 (全)
奥原謙次郎 (南安曇) 林繁市 (全)
近藤清美 (愛媛) 原主水 (西筑摩)
安江明耕 (岐阜) 福井浩 (岐阜)
大島保男 (西筑摩) 安藤覺 (全)

第二學年 甲組 三〇名

兒玉良人 (小縣) 波羅友治 (東筑摩)
加藤浪男 (西筑摩) 市川正 (靜岡)
長谷川糾 (全) 清次恒 (山梨)
福井保郎 (岐阜) 安倍美千雄 (岐阜)
北原辰男 (上伊那) 矢島義一 (全)
柳澤宗重 (東筑摩) 樋口國治 (西筑摩)
原久吉 (西筑摩) 奥原亮 (南安曇)
水野福三 (全) 青山泉 (岐阜)

- 金子平雄 (上水内)
- 福澤龍登 (小縣)
- 辻井誠造 (岐阜)
- 野本久吉 (松本)
- 櫻井榮一 (西筑摩)
- 小松雄二 (下高井)
- 宮下武夫 (上伊那)
- 原金一 (岐阜)
- 伊佐治 彌兵衛 (全)
- 長谷川 史郎 (全)
- 川尻 吾碩 (全)
- 相吉 甲子永 (山梨)
- 樋口 静雄 (西筑摩)
- 佐藤 謙二 (西筑摩)
- 安田 二郎 (西筑摩)
- 原 義治 (全)
- 大池 澄雄 (東筑摩)
- 上條 高志 (東筑摩)
- 松島 正彦 (西筑摩)
- 細江 金市 (岐阜)
- 上島 菊造 (岐阜)
- 池口 元助 (西筑摩)
- 田中文正 (山梨)
- 中谷 力三 (西筑摩)
- 佐藤 鎮守 (愛知)
- 古畑 豊 (西筑摩)
- 林 廣一 (全)
- 青木 茂幸 (東筑摩)
- 太田 幸保 (東筑摩)
- 多田 駒藏 (山形)
- 河崎 好正 (富山)
- 白洲 章吾 (西筑摩)
- 片原 宏 (全)
- 阿部 達三郎 (南佐久)
- 石川 熙 (岐阜)
- 河谷 幸一 (愛知)
- 今井 龍雄 (西筑摩)
- 田中 稻實 (東筑摩)
- 細窪 友雄 (山梨)
- 山内 勝 (岐阜)

第二學年乙組 三九名

- 田澤 廣助 (西筑摩)
- 三輪 正夫 (愛知)
- 征矢 辰三 (西筑摩)
- 成木 正夫 (岐阜)
- 曾我 繁太郎 (西筑摩)
- 大槻 榮壽 (東筑摩)
- 若井 嘉久太 (西筑摩)
- 福井 義一 (岐阜)
- 平川 榮一 (全)
- 早川 盛二 (西筑摩)
- 井出 進 (南佐久)
- 古畑 重吉 (西筑摩)
- 有賀 端穂 (岐阜)
- 上田 近 (西筑摩)
- 星 多喜夫 (福島)
- 吉田 邦男 (諏訪)
- 原田 稔 (愛知)
- 平田 兵平 (西筑摩)
- 水野 作 (全)
- 手塚 節次 (全)
- 川上 榮司 (西筑摩)
- 長瀬 稻作 (岐阜)
- 田口 學 (全)
- 唐澤 繁喜 (西筑摩)
- 湯本 彌六 (下高井)
- 近藤 鋌五 (岐阜)
- 小野 安兵衛 (西筑摩)
- 新井 深美 (更級)
- 熊崎 末吉 (岐阜)
- 村上 頼 (西筑摩)
- 森 軍次 (岐阜)
- 井戸 勝 (全)
- 細江 憲三 (全)
- 小松 利三 (東筑摩)
- 田澤 元 (北佐久)
- 森田 寛雄 (西筑摩)
- 新田 榮 (全)
- 水野 忠助 (全)
- 篠原 七木 (諏訪)

第一學年甲組 四二名

- 岩城 勳 (高知)
- 上村 正治 (西筑摩)
- 原 啓 (全)
- 細江 鉦三 (岐阜)
- 水野 太郎 (全)
- 岩尾 慶一 (全)
- 今井 不二雄 (西筑摩)
- 小玉 清 (北海道)
- 櫻井 清 (西筑摩)
- 米倉 寛 (三重)
- 青木 友廣 (西筑摩)
- 安江 道雄 (岐阜)
- 岡島 英二 (下伊那)
- 龜子 辰雄 (西筑摩)
- 伊藤 一美 (岐阜)
- 大内 隆 (愛知)
- 古畑 由太郎 (西筑摩)
- 濱野 敬男 (東筑摩)
- 中村 幸 (全)
- 遠山 重明 (岐阜)
- 小林 真三 (小縣)
- 肥田 織三 (西筑摩)
- 小幡 義正 (西筑摩)
- 内山 亮平 (北安曇)
- 下條 亮平 (西筑摩)
- 武居 勝 (西筑摩)
- 伊藤 福治 (高知)
- 丸山 作義 (南安曇)
- 新美 成記 (松本)
- 井戸 市郎 (岐阜)
- 村上 幹夫 (東筑摩)
- 加藤 久孝 (山梨)
- 小野 久美 (山形)
- 小椋 一美 (下伊那)
- 濱 尙吾 (東筑摩)
- 二本 清勝 (南安曇)
- 新村 洋 (上伊那)
- 市川 清澄 (西筑摩)
- 西村 勝二 (全)
- 小松 文明 (山梨)
- 海老澤 恒雄 (西筑摩)
- 原崎 武雄 (静岡)
- 久保田 正治 (全)
- 代田 多見雄 (西筑摩)
- 蜂谷 晃 (全)
- 小泉 博 (山梨)
- 吉野 俊策 (西筑摩)
- 日下部 銈一 (岐阜)

第一學年乙組 四三名

校友會の起源と岐蘇林友の發達

吾校の設立は、明治三十四年の四月で、其歳の七月第二日曜日
に在校生即ち當時の一學年生六十餘名が會合して、會員相互の智
識を交換し、親密を圖り、一致團結の精神を鞏固にするといふ目
的で、茲に校友會が創立したのである。會則も議決せられて、會
長には齋藤正雄君、副會長には坪倉藤三郎君が當選せられ、中村
茂君外五氏が幹事に選出せられた。これが吾が校友會の濫觴とい
つてよい。そこで二三回例會を開いたが在校生のみの會合で會毎
に衰頹するといふ傾で遂に一時中止となつてしまつたのである。
翌三十五年の五月に至つて、校友會再興すべしといふ議熟して會
則も改正し、組織も一變した。會長には松田校長を推戴し、名譽
會員特別會員等の制を設けて、地方名士を推舉して大に贊助を需
めた。是に於て校友會の面目も一新し、基礎も確定したわけであ
る。殊に機關雜誌として、校友會報を發行することゝした。漸く
十一月に至つて、第一號を發刊することが出來た。これが即ち今
の岐蘇林友の起りである。丁度本年が學校創立二十周年とすれば
林友雜誌の發生は、一年遅れて、今年は十九周年に相當するとい
つて宜しい。そこでこの會報第一號の七十餘頁の小冊子が、何地
で印刷せられたかといふに、信州は東端淺間山麓の岩村田町の活
版所から印刷せられたのだ。勿論當時は木曾谷には汽車の交通も

なければ、相當の印刷所もなく、僅か月十錢の會費で如何に編輯各位が苦心せられたかを想像するに餘りあると同時に、創業の際關係諸氏の勞苦を多謝するものである。今會報第一號に掲げられてある、坪倉君の祝辭は在校生各位の意思を代表したものと認め、一節を抜萃して、當時の光景を追想する。

(前略) 抑も本會は、昨年の七月に、在學生諸君と共に、盡力して創めて設けられ、其後三四回通常會を開いて、會員相互の親密を圖りて、林業上智識の交換といふ事を謀りました。けれども本會も凡べて事物に盛衰ありといふ原則に使配せられて、種々なる原因の爲めに、校友會なるものは、有るか無いか分からぬ様な姿で、一寸中止となりました。處か本年四月即ち學年試験後に至つて校長始め先生方より時々校友會は如何に、所謂有名無實に終るではないかと問はれても、何とも答へる事が出来ない様な譯で、誠に遺憾千萬でありました。然るを本年五月吾々協議の上、本校々長を會長に推戴しまして校友會を復興し且つ組織を改正して今日第一回の會報を發刊することになりました。吾が輩は一同兩手を擧げて、校友會の萬歳を祝する次第であります。(中略) 此機關なる本誌が、將來永遠に發達するや否は、實に會員諸君の熱心と不熱心に依るものでありますから、會員諸君の熱誠を以て本會の爲に力を盡すことにしたいのである。本日此の盛なる、開會を見るに至つたのも、本校教官諸氏

創立二十年周年を記念するに當つて、重要な印刷物の一つであるといはねばならぬ。

四十三年十月吾校創立十周年、其の間多少の變遷あるも、校基金々確く、縣立となつて、五年目、卒業生を出すこと、前後七回で總員二百有三名に上つた。本會長江畑校長銳意内容の充實と改進に努められ、校運歳と共に隆に、面目月を追つて新たになつた。加ふるに新開新築の校舍も着々進捗し、吾校校風は外觀の美と相俟つて向上發達すべき機運に際會したのである。是に於て岐蘇校友も亦この時代の要求に適應して、斷然毎月一回發刊するの進歩を實現したのである。即ち印刷所を松本の交文社と定め舊態を一變し、現在林友の様式に改め第十三號を發行した。今茲に改刊の辭を抄録して其の趣旨を明にする。

(前略) 我校友會雜誌の創刊は、我校友創立に後る、事二年、爾來毎年一回、或は二回之を發刊し來り、今や當に十有二號を重ねんとするに至れり。亦校運と共に昌なりと言ふべし。然れども一年の間寥々たる一二回の發刊は學術研究の上に於ても、校友相互の親睦は上に於ても、到底吾人の渴望を充たすこと能はず。假令其冊子は記事の増加に依り頁數に於て稍々多きを致すことあるも適々以て新鮮發測の味を欠き爲めに興味を減殺するに過ぎず。之を要するに從來の雜誌の體裁は之を縮少して新聞體となすは同時に發刊度數を増加して毎月壹回の月刊雜誌となすの

の盡力によつたのであるから、吾輩は深く鳴謝して止まない次第であります(後略)

三十六年三十七年の二ヶ年に、第二號、第三號の會報が發行せられて、これは信州は下伊那の飯田町の活版所の出版である。三十八年には、第四號、第五號の會報を出して、これは北信埴科郡の尾代町又は更級郡の中津町の活版所から出版せられた。三十九年の三月は、第六號を出し、四十年の七月に至つて、第七號、第八號を合本して長野市活版所から出版した。四十一年は休刊で、四十二年の三月第九號を發行した。同年の七月第十號を北信は下高井郡中野町の活版所から出版した。四十三年の三月第十一號を長野市活版所から出版して、木曾山林學校々友會々報の題號も餘り永きに失するの嫌がある處から、岐蘇校友の四字に改題したのである。偕斯くの如く、足掛九年の間に、十一冊の會報が發行せられた譯である。前にも述べた通り交通不便な、しかも文明の機關の完備せざる僻遠の地に於て、全信州の各地に涉り、冊子を印刷すると言ふ關係諸氏の心勞は特筆して忘却すべからざること、思ふのである。況して經費の如きも意の如くならざるに於ては尙更其の困難の狀が思ひ俾はる、のである。幸校長外教官諸氏の豊富なる學識と研究とが毎號發表せられ、卒業生並に在學生諸君の着實なる研究が記載せられたるは永く記念とすべき事柄である。加之校内の記事其の要を得て、一面本校の歴史を物語つて居る。今

勝れるに若かず。此くの如くにして始めて學術の研究上屢々問題を提出し、屢々暗示と刺戟を與ふるを得べく、校友相互の親睦をして一層篤からしむべく、又記事の清新を期し得べきなり(中略) 今や吾校創立十周年の盛運に會す雜誌校友も亦宜敷舊態を改め面目を一新し、學術に論說に文藝に將た雜報に益々意を凝し精を研きて切磋の朋とし、會友の資となすべきなり。然りと雖も言ふは易くして、行ふは難し、毎月の編纂或は時に煩冗を覺む疲倦を生ずることあらん。只冀くは堅忍不拔一意此に努力して、益々改善の實を擧げ、有終の美を收め、校運と共に長へに隆昌ならんことを聊か以て改刊の辭とす。

四十四年五月には愈々中央西線の開通となつた。六月發行の第二十號より岐蘇校友の題字を岐蘇林友と改題した。思ふに鐵路の全通と相俟つて、汎く林業界の知已を求むるといふ意味を表現したものであらう。同年十一月の第二十五號及び十二月の第二十六號より郡内又は林業地の有力者、小學校長町村長、青年會等へ廣く本誌を寄贈して、林業思想の鼓吹、公有林野の整理經營等の獎勵等をなしたるは、岐蘇林友の林業界に貢献したる功績の一つとすべきである。

四十五年七月は、第三十三號に達し、本誌を以て明治聖代に於ける終刊となる。大正改元八月、會長安藤校長を迎へて、第三十四號を出す。元年九月第三十五號紙上に於て、謹みて明治天皇奉悼

詞を捧げ奉る。同年十月諒闇中に新築校舍に移轉す、規模宏壯舊校舍の比すべくもあらず、この心機一轉の氣宇は第三十六號以後の林友紙上躍如として露はる。越えて大正二年十月新築校舍工事全く竣り、盛なる落成式を擧げた。吾が林友も四十八號を以て落成記念號と記念寫眞帖、記念繪葉書を發行して廣く四方に頒布した。眞に好個の記念物たるを失はない。大正三年五月昭憲皇太后の御斂葬に際し、林友第五十五號紙上謹みて奉悼の詞を奉る。

大正三年十月安藤會長に代つて、七宮校長會長の任に就かれ第六十號を出す。四年秋十一月御即位の大禮を擧げさせらる。林友第七十三號を以て御大典記念號を發刊して、五百有餘名の會員諸君と共に、御大禮を奉祝し度みて聖壽の無窮を祈り奉る。大正五年大正六年は月と共に號を重ね、大正七年二月は實に第百號に達したのである。

大正八年十月七宮會長辭せられて、九年三月に至り現會長岡部校長を迎へて第百二十五號を發刊した。十年十月創立二十周年の記念式を舉行するに當り本紙百四十四號記念號を發行するの盛運に向つた。愈々林友も齡二十年の青年の域に達したのである。

顧みるに、本紙創刊以來内は關係諸氏の繁務中、交る／＼多年に涉り終始一貫の誠意と、外は多數會員諸君の熱心なる後援贊助とに依り月を追ひ號を重ねて今日に至りたるを深く感謝するものである、併し本紙が時代の進運に伴ひ、理想に到達するは前途尙遠

遠と言つてよい。吾輩同人等魯鈍敢て其の任ではないが、本會の由來を考へ、將來を慮り、本紙改善の實を擧げて、諸氏に酬ゆる所あらうとする。冀くは大方の諸彦並に會員諸君、微意の存する所を諒せられ、今後益々援助指導の勞を吝まざらんことを切に希うて止まざるものである。

本文記事の文責は一に執筆者にあり誤謬脱漏等の事あらば他日訂正すべし乞ふ之を恕せられよ

廿周年記念號の終に

古者有喜則名物示不忘也。とは蘇東坡喜雨亭に誌せるところ人情かくあるべし。今の世例少きを記念口とて懷舊の便りとするれば我校其上を知悉し、現世を勤しみ、永遠の發展を策せどや爰に廿周年記念式を舉行せらる。願れば推移確然認むるなく烏鬼匆匆たり。厥の郡立の當初、其局に對せし辛勞、其教鞭を執りし苦難や如何ばかり、聞く、創業は刻苦多く繼承は心痛尠からず。と宜なり。松田校長の創設の傷心、江畑校長の整理に、新築企圖安藤校長の新築落成を俟つて移轉、且其内容充實に、七宮校長の豪放承繼より本校長に到り此舉あり、育英焦心と云はん。其意を稟けて在校諸子此處に祝意を表し卒業生諸君各地に其誠意を披瀝し、投稿各處より到る慶賀の至、爾來の發展や見るべし。余等微衷を露さんと欲するも、身翻江攪海の筆と驚天動地の才と兩つながら之を缺いて今更ながら及びなきを嘆ずる外あらざれども、其誌の發行に參與す、亦榮なしとせんや。疵に非ざれば即ち賛たるも其歡喜言はざる能はざるは情なり。茲に跋す。

大正十年十月

編輯員に代て

甲 氏